

トレーナーはウマ娘に
……。

あさのひかり

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

トレーナー。ウマ娘になっちゃったんだってさ。

アグネスタキオンの実験事故によってウマ娘になったトレーナー。

前途多難、様々なことに巻き込まれてしまう。

Pixivに投稿しているものを一部加筆して投稿しております。

目次

トレーナーはウマ娘に……。	1
サイエンティストは悩む	21
葦毛の少女は掛かりやすい	29
好奇心	44
黒い刺客・青い薔薇は微笑む	55
初めてのお風呂	78
お忍び？	96
会議室にて	119
俺の名前は	137
メジロ家での日	161
【おまけ】トレーナーさんの設定	183
新しい日の始まり	187
【人物設定】	201
皇帝との再会	205
始動	226
青鹿毛のバリスタ	248
坂路の申し子	265
決闘	282
伝説のウマ	303
雨の日に：マンハッタンカフェとの出会	317
い	317
カワイイの化身	326
利用するなら……	338
カレンとの休日	348

カワイイあの笑顔



361

トレーナーはウマ娘に……。

洗面台の前で一人のウマ娘が、憂いを帯びた表情で鏡を見つめていた。

トレセン学園指定のジャージに身を包んでいる。どこからどう見ても学園の生徒。

ウマ娘特有の整った顔立ちに、少し薄めの尾花栗毛おばなくりげの髪がその整った顔によく似合う。淡くウエーブのかかった髪は、まるで秋に見るススキの草原のようでなんとも美しい。

「……はあ」

鈴の音のような声と言ったらいだろうか？ どことなく凛々しく、それでいて甘く

…。もし声をかけられたのなら、誰でも靡いてしまうほどな音色。

ため息だけでこの破壊力である。

そんなウマ娘の少女は、自らの胸に手をかけて軽く持ち上げる。そしておろすと、肩に抱える重量感にまたため息をついた。

「ある……間違いはない……」

そして少女は少し泣きそうな表情で手を下腹部に持っていく。何かを確認するように触れると……。

「ないし……まじかよ……」

うるつと瞳を潤ませながら、少女はその顔立ちから出るとは思えない、少し粗暴な言葉を紡ぐ。

少女は：いや、少女なんてもう言う必要はないだろう。

『俺』はこの状況に頭を抱えた。鏡の『少女』は同じように頭を抱える。夢であつては欲しかったが、この鏡の少女は俺である。それは間違いのない事実だつた。

申し遅れたが――

俺は断じてウマ娘ではなく、歴とした男性トレーナーなのだ。

……そんなことを言ったら、頭がおかしいウマ娘だと思われるだろう。こんな姿で誰が人間の男性だと思ふだろうか。

「どうしてこうなつた……」

少し長くなるが、この状態に陥つた理由を話さなければならぬだろう。

？

これは今から数時間前に起こつたことである――

彼女たちのトレーニンングに何か生かせることはないか。俺は今トレセン学園の敷地内をうろつろつと歩き回っている。

こんなことをするから『ウロウロトレーナー』とかあだ名されることはあるが、この

状態が一番ひらめきに出会えるのだから仕方がない。

サイレンススズカの旋回癖。あの気持ちも痛いほどわかる。

ブーツと思索に耽っていると、いつの間にか校舎の中に入っていたようだ。思い込んでみると、周りが見えなくなるのは悪い癖だと分かつてはいるのだが、よくもまあ、誰にもぶつからずこんなところまで来れたものだ。

そろそろ自分のトレーナールームに戻ろうと思つて振り返つた時だった。

「どうしましょう……」

そこに悩める一人の女性。レース場のターフを思わせる緑を基調にした服がなんとも目を引く人物。『駿川たづな』が、オロオロと周囲を見ていた。

自分が新人で、何もわからなかった時にいつも手助けしてくれた人。三年経つた今でも、仕事以外でも交友を続けている数少ない人。

そんな彼女が困っているのだ。声をかけずにはいられない。

「何か困りごとでも？」

声を掛けると彼女は、こちらを見てハツとした表情をすると駆け寄ってきた。そしていつも通りの笑顔を見せると、恥ずかしそうに頬を掻く。

「トレーナーさん、こんにちは……えっとそれがその……」

「また理事長に無理難題でも押し付けられました？」

「いえ、それほどじゃないんですけど……」

彼女から話を聞くと、困っている理由はダブルブックングらしい。

ウマ娘たちにレース関係の資料を渡しに行こうとしたところ。理事長に言われた書類の整理を思い出したらしい。

彼女にしては珍しいおつちよこちよいな一面だが、困っているのなら助けるべきだろう。

「俺で良ければ資料を配っておきますよ？　流石に理事長の書類の方は俺じゃ出来ないですけど、資料を配るぐらいなら出来ますから」

「えっ、でも悪いですよ。これ全部ですし……」

彼女が胸に抱えている資料は数十冊。まるでタワー。確かにこれを全て配るとなると骨が折れる。

しかし、ここまで一緒に頑張ってきた仕事仲間が困っているのだ。

「大丈夫！　任せてください！　ほら、悩んでいる時間はないですよ？」

たづなさんは少し考えて。

「……わかりました。それではお願いしますねトレーナーさん？」

一度頷くと俺に資料を渡してきた。受け取るとドサッと重みが腕に伝わる。三年間でウマ娘たちに随分と鍛えられたと思っていたが、これは確かに重い。

たづなさんは心配そうにこちらを見つめる。

「あのやつぱり……」

「大丈夫！大丈夫ですから！ ほら、たづなさんも書類頑張ってくださいね！」

少しだけ強がりを見せた。請け負ってやめたら男としての格が落ちる……。にしても彼女は、なんて怪力なのだろうか。前に見た足の速さも相まって、三年間一緒にいるが謎な存在だ。

「トレーナーさん……本当にありがとうございます！ 配る子たちのリストはここに……。よろしくお願いしますね！」

少しジャンプして、資料タワーの上にリストの紙を置く。

やはり急いでたのだろう。忙しなくペコリと頭を下げると、彼女は珍しく焦ったように走り去っていった。

でも、たづなさん。

「リストを上置くことないんじゃないかなあ……」

いったん資料を下ろしてリストを読み上げると、俺は配るために行動を開始するのだった。

？

トレーナー宅配便は思いの外、順調に進んだ。初めはもう少しかかると思ったが、一

時間もすればその資料を残り一冊を残して配り終えることができたのだ。

「あとは……えつと。うあ、アグネスタキオンか……」

——アグネスタキオン。

超光速のプリンセスと言われる彼女。あまり関わったことはなかったが、いろいろな噂は聞いている。なにやら薬を作っているとか、その薬を飲んだら、体が七色に光るとか。実験人間を探して、夜な夜な校舎をうろろしているとか……。

最後のは盛った話だろうが、まあそんな噂が絶えないウマ娘なのだ。そんな彼女にも、一応トレーナーがいるらしい……。

そんな物好きがいるんだなあと思いつつ、実験室の前まで来てしまった。ここに立つだけでも薬品の匂いが漂ってくる。

「はあ」

資料を渡すだけ渡したら、この場から離れよう。そう固く思い、扉に手をかけた時だった。

瞳に飛び込んできたのは閃光——。

……そして衝撃を受けたときにはもう俺の意識は闇に落ちていた。
?

「つ……。頭いてえ……」

意識がいきなり覚醒する。そして瞳に飛び込んだ知らない天井……。

俺は思いっきり飛び起きると、頭痛を感じて頭を押さえる。

「大丈夫ですか!？」

聴き慣れた声がよく聞こえる。たづなさんの声だ。彼女の声を見ると、心配そうな表情で俺を見つめていた。

「大丈夫ですよたづなさん……。まだ少しふわふわしますけど……。どう？」

声に違和感を覚えた俺は、喉を押さえて小さく咳払いをした。

「こほん。あーあー、声が変わだな……」

「……トレーナーさんなんですよね？」

『トレーナーさんなんですよね?』

変なことを聞く彼女。

俺がトレーナーじゃなかったら、なんだというのだ。声も変だし、一体何があったのだろうか。

「たづなさん……。何があったんですか……。声も変だしなんか頭が重い……。？」

何かかぶったように頭が重い。後頭部が引っ張られる様な感覚だ。俺はおもむろに頭を触る。

「……かつら?」

すると肩にかかる金色の毛を見つけてしまった。少なくとも俺はこんなに長い髪を持った覚えはない。いつも洗いやすいように短くしてるのだ。それにこんな髪色ではない。

「やだなあたづなさん……。悪戯ですか？ かつら被せるなんて……。いでっ!」

肩にかかった髪を思いつきり引つ張ると、頭皮に痛みを覚えて数本毛が抜けた。ちよつと待て、なぜ頭に痛みを感じる……?」

「あの、トレーナーさんですよね……。? それを前提としてお話するんですが……」

何かかしこまったように、しかも俺がトレーナーだと確信が持てないような言い方だった。

「トレーナーさんはアグネスタキオンさんに、資料を届けにいった。そこまでは覚えてますか?」

「覚えてますよ」

全て資料を届け終わって、アグネスタキオンに届けようと部屋に入ろうとして、光を見たまで覚えている。

……ということはまさか。

「つて! もしかして俺! タキオンに何かされたんですか!」

恐れていたこと。知らぬのうちに実験台にされてしまったのか。俺は思いつきり

ベッドから体を乗り出して、たづなさんの肩に手を置いて迫った。

そのとき肩にかかる重み。

ぷるんつ、と揺れる胸……。

「ちよつ、近いです……！」

揺れる胸……。

なぜか顔を真っ赤にしてこちらから目を逸らすたづなさん。

俺は冷静になるために深呼吸して話を切り出す。

「たづなさん」

「はっ、はい！」

「質問なんです……。これなんですか……？」

自分の胸から垂れ下がる双丘を指差して尋ねる。

「むね……ですかね……？」

「えっと、男ってこんなに膨れた胸ありましたっけ？ それになんで俺は生徒用の

ジャージ着てるんですか……？」

なぜか着ている生徒用のジャージを押し上げる胸。太つてるとかそういうのじゃない。

い。

明らかに『膨れている』のだ。

「その、非常に言いづらいのですが……」

たづなさんは顔を真っ赤にしたまま、顔をそらし続ける。その言葉に俺はゴクリと喉を鳴らす。

「トレーナーさんはその……ウマ娘になったみたいですよ……」

「はあ……ウマ娘に……?」

なるほど、ウマ娘になったからこんなに豊かな胸があると……。

「それならなつとく……」

「納得してくれましたか?」

たづなさんの言葉をどうにか噛み砕こうと、脳内で整理するが、すぐにバグって飲み込めなくなった。

俺は一瞬動作を止めたのち。

「できるわけないだろおおおおお!! ああああー! なにがどうなってるんだーっ

!!? うわっ、声かわいいいっつ!!」

「トレーナーさんっ! 落ち着いてっ!!」

興奮にブンブンと振り回される尻尾が、辺りのものを吹き飛ばして散乱させていく。

「尻尾……」

俺は無意識に振り回される尻尾を見て。

「きゆううつ……」

また気絶してしまうのだった。

……

……

……

・ たづな Side

しかし、驚きました。まさか人がウマ娘さんになってしまうなんて……。

私の目の前で気絶している人は、私とよくお出かけに行ってくれたトレーナーさん……です。と言っても、今は美しい『尾花栗毛のウマ娘さん』寝ている姿はまさしく眠れる森の美女。絶世の美女です。

先ほど迫られたときには、思わず目を逸らしてしまいました。直視できないほどの綺麗さだったので……。

でも、役得でしたね。こんなに可愛いウマ娘さんに迫られる機会なんてそうそう。じゃなかった。

一体どう説明すべきなのでしょう。起きたらまた錯乱して気絶しちゃうんじゃないでしょうか。

先ほどの本人の発言と『爆発した実験室』に倒れていた『トレーナーさんの服を着て、

トレーナーのIDカードを持った』ウマ娘さん。この条件から、このウマ娘さんがトレーナーさんであることは間違いないのでしようけど。

このことを知っているのは私と理事長と、先に起きたアグネスタキオンさん。

アグネスタキオンさん曰く、実験の失敗でこうなった。どうして彼がウマ娘になったかは全くわからない。と笑いながら話しました。私は「笑ってる場合じゃないでしょう！」と思わず声をあげてしまいました。

アグネスタキオンさんは原因を探す。と言って早々と去って行き……。理事長も「驚愕！」とは言っていたが、このことはまずは内密にとのことでした。確かに、これが知り渡れば混乱が起こるのは必至……。

下手すればトレーナーさんは研究機関に……。

『あげません!!』

心の中の誰かが私に問いかけた気がしました。こんなに可愛い『ウマ娘』さんを渡すわけがないでしょう！

私のせいでこうなったのだから……。私が助けてあげなくては……。私が守らなくては……。ては……。

そんなことを思いながら、私は眠れる美女ウマ娘さんの髪を梳くように撫でるのでした。

ああ、とても可愛い。

「んっ……あれ……」

どうやら目が覚めたらしいです。

……

……

……

・トレーナーSide

「ということなんです……」

「なるほど……認めたくはないですが……。たづなさんがここに運んでくれたんですね

？ ありがとうございます」

ははは、と俺は乾いた笑いを浮かべながら、たづなさんにお礼を言った。

タキオンの実験に巻き込まれて、この姿になってしまった。そしてその原因は未だ不明で……。今後のことは未定だから、とりあえず察に籠っていてくれとの事らしい。

「お礼を言われるようなことは何も！ 元はと言えば私のせいですし……」

やはり責任に思ってるのか、たづなさんは俯く。彼女が責任に思う必要はないのだが。

「資料配りをやるって言ったのは俺ですから。それに、たづなさんが俺を保護してくれ

「だから、ややこしくならなくて済んだんですよ」

「なんとかして励まそうと、俺はたづなさんの手を取って出来る限りの微笑みを見せた。なんとか安心させないと。今回は事故であって、誰のせいでもないのだから……。」

「いやタキオンは責任あるかもだけど。」

「は、はうっ……」

「あ、あれ……?」

「何か対応を間違っただろうか? たづなさんは顔を真っ赤にして驚きとか困惑とか。」

「そう言った感情を含んだ顔を見せる。」

「そして、うっとり俺を見つめる。」

「……ます」

「……へっ?」

「私が必ず守りますから!! 安心してくださいね!! ウマ娘さんっ!!」

「ちよっ!! たづなさんっ!!」

「がばっ、と思いつき抱きしめられた。何が起こったのか俺には理解できなかつたが、彼女の匂いを強く感じる。嗅覚でも鋭くなったのだろうか。」

「恥ずかしさから耳を垂らしてしまう。無意識に尻尾が振れる。」

「このとき俺はさらに、『人ではなくなつた』と実感するのだった。」

……
……
……
経緯を話せばこう言ったことになる。

あの後『掛かり気味』なたづなさんに警護されながら寮に戻った。外を出歩くのはま
ずいから大人しくしてること。

食料などは後で届けると言ってくれた。

本当にたづなさんは優しい。体が元に戻ったら食事にも誘ってお礼をしないと。

まあ、そんなこんなで俺は寮の部屋にいた。そして鏡に向かって自分の体をチェック
していた。

別にやましい気持ちがあったわけじゃない……。いや全くないわけじゃないけど。

改めて鏡を見ると、鏡に写ったあどけない少女は、薄いサファイア色の瞳で俺を見つ
める。

身長は160cm程度と言ったところか。まさか身長まで縮んでしまうとは驚きだ。
元から高くはなかったが10cm以上縮んでいる。

年齢は外見から……。高等部のウマ娘といったところだ。

そして何よりも、淡い金髪。光の当たり方によってはアハルテケ系の『月毛』にも見

える。ゴールドシチーとはまた違うタイプ、『尾花栗毛』で、自画自賛になるだろうが美しいと思う。そしてぴよんとはねる真っ白な流星。

これは確かに目立ってしまっただろう。たづなさんが外に出るなど言った意味もよくわかる。

次にスタイルだ。

胸は学園のトップクラス……には及ばないが、ジャージを大きく膨らませている。サイズは測らないとわからないが、いい勝負をしていると思う。

バスト、ウエスト、ヒップ……毛並み。モデル並だ。腕を組むように胸を寄せて、悩殺するかのポーズを鏡の前で決める。自分でやりながら、恥ずかしさから顔を赤らめてしまった。

「っ……………」

これはダメだ。破壊力がありすぎる。俺はすぐにポーズをやめた。危険すぎる。こんなの見せつけられては夜も眠れなくなる。

とにかく良く分かった。俺は今容姿端麗なウマ娘になっている。

「目も当てられないミュータントになるよりはマシか……」

そんなことを呟いて、気分を落ち着かせる。大きく二、三回深呼吸をして、頬をぼんぼんと叩いた。

とりあえず、たづなさんが来るまで息を潜めておくことにしよう。担当バたちには、風邪で早退したと伝えておくと言つてたし……。訪ねてきても寝ていたといえれば免罪符だろう。

「さてと……昼寝でも」

ぐう——

しまった盲点だった。あんなことがあつたため、昼食を取り忘れていた。

興奮が覚めれば思い出したかのようにお腹が鳴つた。もしかして代謝もウマ娘並みになつてしまつていのではないだろうか？ これでは昼寝どころではない。

「何かあつたか」

基本的に学園内のカフェテリアで済ませているし、夕食なんて出来合いのもので済ませている。カップ麺なんて常備してないし、置いてあるのは段ボールに入った栄養ドリンクぐらいだ。

人が住んでるのか？ とするほど生活感がほとんどない。

「えーつと冷蔵庫には……」

俺は台所に向かうと、小さな冷蔵庫を開く。そこには冷やしてあるビールと、少しの調味料。賞味期限の過ぎた謎瓶。

そして……。

「こんじん」

そういえば商店街の福引で当たったから、とりあえず冷蔵庫に突っ込んだのだった。赤い野菜。カレーとかに入ってるあれ。いつもだったらなんてことない野菜のはずなのに。鋭くなった鼻腔を刺激する甘い匂い。

俺の瞳にはそれしか写ってない。なんで今日はこんなにも魅力的に見えるんだ。

俺は袋を乱雑に破り、一本の人参を取り出すと。

がりっ！

と噛み付いて咀嚼する。

「っ!？」

あまりの衝撃と混乱に人参を壁に投げつけ、へたりとその場に座り込む。

——衝撃。

不味かったわけではない。逆だ。おかしくなるぐらい美味しかったのだ。今まで食べてたものはなんだったのか？ こんなに美味しいものを食べてなかったとは。

——混乱。

俺の感覚はウマ娘のそれに変わってしまっている。混乱を通り越して、ある意味恐怖が襲ってくる。

ウマ娘自体は近くの存在なのに……。自分がなるとこんなにも混乱するものなのか。

いろいろな衝撃に、胸がきゅつと締め付けられる様な感覚に陥った。
「わけわかんねえよお……」

急に不安に襲われて涙がこぼれる。俺はこんなに涙弱くなかったはずだ。
しかし今はどうか。

不安に押しつぶされそうなティーンティーンの少女でしかなかった。

「壁にも刺さってるしい……」

さらに、さつき投げた人參が薄いボード貼りの壁に刺さっていた。

ウマ娘の力でぶん投げたからだろう。それすら不安材料になってるのだ。

怖い。

こわい。

コワイ。

得体の知れない存在になった様な気がして、恐怖が襲ってくる。

俺は元に戻るのだろうか。

俺は――

ピンポーン――

ドンドン――

そんな不安を引き裂くように、インターホンの音と扉を叩く音が聞こえる。その音に

たづなさんと思い、急いで立ち上がって玄関に行く。

この不安を取り除くために、今すぐ誰かと会いたかった。

しかしドアノブに手をかけようとしたとき、ふと手を止める。頭の中が『待て!』と抑制をかける。急に冷静さを取り戻して、いったん深呼吸。

慎重になるべきだ。

いきなり開けてこんな姿を『知ってる者たち』以外に見られれば、一発で不審ウマ娘だ。

危なかった。俺はとりあえず、扉の小さな覗き穴から外を見つめた……。

サイエンティストは悩む

アグネスタキオンSide

「んうー、これは困ったねえ……」

私は実験で吹き飛ばしてしまった実験室の前に立っていた。

これは困った、本当に困ったし悩ましいことが起きてしまっている。

実験には失敗が付き物なのだ。この実験室のように『尊い犠牲』によつて科学というものが発展してきたわけだ。

今回の犠牲も、こう言つたものだけで済ませられればよかったのだが。

私は、今回も自身の可能性の実現のために実験を行なつていた。

そして、遺伝子の可能性を引き出す薬の実験をしていたのだ。

のだが、一体どこをどう間違えたのか……。

「私としたことが、本当に全くわからないとは」

どこかを間違えたのだろうか、全然わからない。薬品の調合過程で大爆発を起こして、しかもそれに運悪く巻き込まれたトレーナーが居たわけだ。

事故の結果を聞いた時には、思わず意味深なことを言つて悪役笑いを上げてみたが、

駿川たづなの睨みが刺さり、流石に謝ったし、トレーナーを元に戻すと約束した。

しかし、人がウマ娘になることなんて。

「いや待てよ……」

私は今回の研究で遺伝子の可能性を引き出そうとしていた。ウマ娘と人の間には一定の確率で『ウマ娘』と『人間』が生まれくる。

そうでなければ生物的に『牝』しかないウマ娘は絶滅してしまう訳だ。

稀にはあるが人間と人間の間にも突然変異的に生まれくることもあるが、このケースは稀なので説明する必要はないだろう。

まあ以上のことから科学的にみても、人とウマ娘はそこまで遺伝子的差異がないことが通説とされている。

精密に調べても、答えが出ないし良くわからないわけだ。

明確な差が科学的に証明できない故かはわからないが、今日ウマ娘は『個性ある人間』ぐらいのポジションで世界に溶け込んでいる。

以上の事柄から、これは私の仮説となってしまうのだが。

もしも、あのトレーナーが『ウマ娘としての素質』を持っていたとしたら？

私が作っていたのは『遺伝子の可能性を引き出す薬』なわけだから、あのトレーナーの本来持っていた『ウマ娘の遺伝子の可能性』を引き出したとは考えられないだろうか

生憎、彼は私の担当ではないわけだから、素性や過去や家族構成が分かるわけではない。
い。

しかし、彼の家族構成の中にウマ娘がいれば、この説の信憑性も増すだろう。

これは追加調査が必要になる。本当に面倒だが。

「はははっ！ 実に面白いじゃないか！ しかしだ」

面白い。だが手放しに喜べない状況がある。

彼がウマ娘になった原因がわかったとしても、戻す術がわからない。

戻すと言った手前、実験は続けるが、混ざり合った紅茶とミルクのように本質が変わってしまったものは元に戻るのだろうか？

さらに、研究資料も一部が喪失してしまった。徹夜で寝ぼけた頭で考えていたから、その内容もおぼろげだ。

「んーむ、この研究は長くかかりそうだねえ」

「なにが長くかかるんですか……？」

——突然の声。

振り返ると気配もなく立っていたのは、真つ黒な髪のウマ娘。

「やあ、カフェじゃないかー。こんなところまで一体どうしたというんだい？」

『マンハッタンカフェ』

彼女は何かと私と一緒にいることが多いウマ娘だ。

実験には非協力的だし、何かと妨害してくれるが、仲としては良好と言えるだろう。

「どうしたもなにも……。また何かしたのですか……。？　とうとう恨みを買って爆弾でも送り付けられましたか……。？」

実験室の惨状を見れば、その反応は当然と言えるだろう。カフェは表情こそ大きく変えないが、視線は呆れ50%困惑50%のブレンドといったところだろう。

「いやあ、ちよつと実験を失敗してしまつてね。なに科学というものは犠牲がつきもの……」

「あなたのトレーナーさんには報告しておきました……。また何かやらかした。と……」

「うぐつ!？」

カフェは手で端末をゆらゆらさせながら画面を見せてくる。その画面内のメッセージには『片付いたらすぐにいく』と書かれている。

ああ、これはあれだろうか。

またお弁当抜きの外置だろうか……。

「ところで……。私のトレーナーについて何か知りませんか……。？」

「んー？ 君のトレーナーは……。あ」

カフェの言葉で思い出す。

あまり面識がないから忘れていたが……。カフェのトレーナーはこの実験の被害者である彼ではないか。

「今日昼過ぎから姿が見えないのですが……。いつもならカフェテリアに来るのに……」

「……いやあ、しらないねえ」

理事長からこの件は内密にこのことを言われている。流石の私でも面倒ごととは起こしたくない。

「そう……ですか……。ん……」

その時カフェの持っていた端末の着信音。カフェはその内容を見て、小さく何度かうなずいた。

「風邪で……。早退ですか……」

「ふーん、そうなのかい。よかったじゃないか彼の所在が分かって」

はあ、助かった。今回ばかりはたづなさんに感謝しとかないといけないね。

「それはそうと……。『あ』とアナタは言いましたよね……。？」

「んー。何のことかなあ……。？」

突然の反撃に私は尻尾をびくつと立ててしまった。明らかに不審に思われただろう。彼女の視線が少しだけ強く睨むものに変わっていることに気づく。

「……やつぱり。嘘はダメですよ……？」

カフェは取り出した水筒を手に、じりじりと私に近寄ってくる。

「カフェー……？ 一体なにをするつもりなんだい……？」

「本来こういうことには使いたくないんですが……」

「いやあ……。じゃあ使わないほうがいいんじゃないかなあ……？」

トクトクと音を立ててカップに注がれるのは黒い液体。香ばしい匂いが敏感に鼻腔をくすぐる。

「安心してください……とても美味しいブラックコーヒーです……」

「見れば分かるんだけどねえ……」

私は思わず後ずさってしまふ。

「彼のために淹れたのですが……。風邪じゃ飲ませるわけにはいきませんし……捨てるのももつたいないですよね……？」

「えーっと、私は急用を思い出したよ！ カフェまたつ——」

思いつきりと逃げようとしたところを首根っこを掴まれる。

まるでロボットののような硬い動きで振り向くと、珍しく笑みを浮かべるカフェの顔。

「どうぞ……。味わってください……。ね」

……

……

……

ひどい目にあった。

「……私のトレーナーにそんなことを」

その後、私は詳細を全て話すまで口にコーヒーを注ぎ込まれた。

今は口直しに角砂糖を頬張っている……。まだ苦味が消えない……。

口は堅いほうだったが、あそこまでカフェに粘られるとは思わなかった。あのトレー

ナーのことになる、どうやら『掛かり気味』になるらしい。

もう長い付き合いだが、なかなか見れない一面に驚かされるばかりだ。

「にわかに信じがたいですが……」

「私だってそうさ。とにかく口外はしないように頼むよ。彼の元に行くのもなしだ。怪

しまれたくない。君もトレーナーとは離れたくないだろう？」

「……そう、ですな」

しゅんと耳を垂らすカフェ。何だ行く気満々だったんじゃないか。

ウマ娘がトレーナー寮に行くのは珍しい話じゃないが、今は怪しまれたくない。

何より噂好きなウマ娘たちにバレてしまつては困る。そんなこともあつて『全員との面会拒絶』をさせるといふのが理事長とたづなさんが話し合つた結果の答えらしい。

しかし、それも長く続くととは思えない。カフェがこれだけ『掛かる』ほどに信賴して心配しているトレーナー君なのだ。

「ウマ娘になつたトレーナーさん……ふふつ……」

今もこんなに不気味な笑みを浮かべているほどに……。ん？ これは心配なのだろうか。

まあ、見なかつたことにしよう。

とにかく、担当ウマ娘たちは、信賴しているトレーナーのことを心配する。心配するが故に行動を起こす。

学園側がどれぐらい抑制できるかにかかつてるが。それも1日とも保たないだろう。状況を知らないウマ娘が、トレーナーの部屋にいる『謎のウマ娘』に出会つた時どんな化学反応を起こすか。

いやあ、見ものだねえ……。

生きてるといいけど。

葦毛の少女は掛かりやすい

トレーナーSide

俺は扉の覗き穴から細心の注意を持って、外を見つめた。

その場所には美しい葦毛の耳が見える。

(この耳は……。マックイーンか……)

かのメジロ家出身のウマ娘。

俺が新人の頃に出会ってこの三年間を共にした担当ウマ娘だ。たづなさん以外に一番最初に来るのであれば、マックイーンだと思っただけ……ここまで予想が当たるとは思わなかった。

耳のぴこぴこした動きからも、心配してるのが伺える。

扉を開けなくて正解だった。もし開けてしまったのなら、俺はどう見ても『トレーナーの部屋に入り込んだ不審ウマ娘』で、明らかに泥棒とか空き巣とかそういう類に見えてしまうだろう。

「トレーナーさん申し訳ございません。差し出がましいとも思いましたが……その、心配で……」

声色から、心からの心配が聞き取れる。彼女の息遣いも、いまこの頭の耳に届いていた。

俺もこの体になってから耳が敏感になった気がする。この部屋に来る間にも、環境音が耳をくすぐって、周りをきよるきよると見てしまったぐらいだ。

だからこそ、細心の注意を持って居留守を使う。俺はそつと扉から離れる。

「寝ていらつしやるのでしょうか……。今音が聞こえた気がしたのですが……」

息を殺してそつと扉から下がる。明らかにこちらの存在感に気づいていたようだ……。

「聞こえてなくても良いんです……」

消えてしまいそうな声で、マッククイーンは言葉が続ける。

「でも、わたくし達のトレーニングメニューを作って、無理をしていたのではないかと
思ってしまったって……チームを持ってからと言うもの、トレーナーさんは夜遅く徹夜も
あつたと伺っていますわ……」

違うんだマッククイーン！と思わず叫びそうになる。君たちのための無茶なんて無
茶に入らない。そんなに悲しくなるようなことを言わないで欲しいのに。

伝えたいが今のままじゃ伝えられない。この声で反応してしまえば、確実にややこし
くなる……。

「わたくしはトレーナーさんと一心同体。苦楽を共にしてきた身として、貴方の看病を
と思ったのですが……寝ていらつしやるんですわよね……」

自分の耳が垂れるのがよくわかる。マックイーンのこんな悲しい声を聞いたのは久
しぶりだ。

最近はずチームのことばかりで、あまり構えなかつたこともあるかもしれない。

すまないマックイーン。俺の体が治つたら、必ずスイーツ食べ放題に連れて行ってや
る。そう意を決して、ゆつくりと振り返ろうとした時だった。

「あっ!？」

ド Teen——。と音を立てて尻餅をつくように転んでしまう。ズボンの端を踏んで
しまったようだ。今のは確実にマックイーンに聞こえてしまったことだろう。

我ながら何と迂闊なことか……。

「トレーナーさんっ!?! 大丈夫ですのっ!?!」

ドンドン——ドンドンドンドン——

マックイーンの扉を叩く音が強くなる。ああ、厄介なことになってしまった。いつそ
のこと窓から逃げるか。

しかし、ここは二階。さすがに着地ミスって骨折は勘弁願いたい。

「トレーナーさんっ! 返事を! 返事をしてくださいます!」

ガチャガチャ

扉を叩く音から、ドアノブを思いつきり回そうとする音に変わる。ミシミシと音を立てて、今にも扉ごと取れてしまいそうなほどだ。

ウマ娘の力恐るべし……ってそんな場合ではない！このままでは扉が壊されるつ！（ええいつ！こうなったら一か八か！）

こほんと小さく咳払いして、最低限でできる低い声で。

「俺は大丈夫だから！ マックイーン。入らないでくれ……！」

そう声を上げた瞬間、扉を開けようとする音が止まる。ふう、止まってくれた。扉は壊されずに済んだようだ……。

「……ですの？」

俺の耳がびくつと震える。

一瞬間逃してしまっただが、明らかにその声は重く、鋭く、俺の耳に刺さる。

「アナタは誰ですの……？」

……ああ三女神様。多分俺は選択を間違えたみたいですよ。

「アナタは誰ですの？ 何でトレーナーの部屋に女の方の声が聞こえるんですの？ トレーナーはいるんですか？ トレーナーさんは無事ですの？」

矢継ぎ早な質問に俺は答えることができない。

今のマックイーンには、なぜか言葉だけで射殺せそうな凄みがある。俺はただ、腰を抜かしたように後ずさることしかできない。

「……答えないんですわね？　良いですわ。だったらっ！」

ズシン――

空気が揺れるように、部屋が揺れると……。

「こうするだけですわ!!」

ドアノブがメキメキと曲がり、蝶番が悲鳴を上げて……。防犯用のために結構分厚い扉が空を舞って……。

何と言うことでしょう。最悪な形の対面を果たしてしまった。

「……へえ？」

逆光で表情はイマイチ見えなかったが、その瞳には明らかに鬼が宿っている。

ゆらりと部屋に入ってくるマックイーン。俺はその凄みに後ずさることしかできない。

まるで猛獣のように距離を詰めるマックイーン。

「トレーナーさんの気配がありませんわね……そしてアナタは……！」

「っ!!」

突如マックイーンは俺の上に馬乗りになると、地面に押し付けるように覆いかぶさ

る。両手首をガツチリと押さえられ、腰付近を両太腿でホールドされる。

3年間一緒だったとしても、ここまで密着されたのは初めてだ。ギリギリとマックイーンの手が力がかもっている。

「トレーナーさんをどこに連れて行きましたの？ あの方は風邪で寝ていたはず……」
「やつ、やめっ……」

どんつ！ と地面にマックイーンの手が押し付けられると、フローリングが凹む。次はお前の顔だ。と言わんばかりの凄みに息が詰まる。

「そんな言葉は聞いてませんわ！ わたくしは『トレーナーさん』をどこにやったと聞いているんです!! アナタの体からトレーナーさんの匂いがしますわ。アナタが連れ去ったのでしょうか!? その体でっ！ あの方を誑かして……!」

ああ、これは完全に掛かり気味だ。昔にも勘違いからこんなことがあったが、ここまでひどいのは初めてだ。

俺を見つめる瞳は恐ろしく……怒りの興奮に肩を揺らす彼女の姿なんて初めて見た。

マックイーンは掛かり気味で、こっちは命がかかっている。

「答え次第では……。メジロ家の力を使って、アナタを泣いたり笑ったりできなくして差し上げますわ」

なんかすごいこと言っていないかこの子……。

とにかく、今はマックイーンを落ち着かせなければ、物理的に俺の明日はない。怒ったウマ娘なんて、暴走した重機と一緒になのだから。

「あの、マックイーン？　ちよつ……」

どんつ！　とまたフローリング凹むほどの威嚇。

本当にやめてくれ……修理代は俺に回ってくるのに……。

「アナタに気安く呼ばれる名前ではありませんわ！」

ここまで掛かってるウマ娘を落ち着かせる方法は、さすがにトレーナーの講習でも習わなかった。

「……メジロマックイーンさん。トレーナーさんについてお話しさせていただけないでしょうか？」

とりあえず一旦落ち着かせるように、丁寧に言葉を紡ぐ。相手を刺激するべきじゃない。

「……良いでしょう。しかし答え次第では」

メキツと音を立てて、フローリングがまた変形した。

……さようなら俺の月給。

「いったん降りてくれな——」

「嫌ですわ」

……即答とは恐れ入った。まあ、離せば逃げると思うのは自然なことか。相手要求通り、無理に動くことはせずに言葉が続ける。

「おーけー……言う通りにするよ。まずこうなった経緯から話そう」

……

……

……

俺は掻い摘んでこうなった経緯をマックイーンに説明した。

ジト目で俺の話を聞くマックイーンは、どう見ても信用していないように見える。

それを通り越して、頭でもおかしい不審ウマ娘を哀れむ目に見える。

「言いたいことはそれだけですの?」

「やっぱり信じてはもらえないよね……わかってた。わかってたさ……」

いまだにマックイーンは俺を押し倒す状態で、顔も吐息が絡まるほどに近く、離してくれるつもりはないようだ。

「それでトレーナーさんはどこに連れ去ったんですの? あの方は、わたくしの助けを待っているはずですわ! さあ、早く吐きなさい!」

こうなつては、何を言えば信じてもらえるだろう。俺しか知ってないマックイーンの

情報は……。

「トレーナー室の冷蔵庫のモンブラン。一緒に食べようと言ってたのに、いつの間にか二つともなくなってたよな」

俺の言葉に驚いた顔でマックイーンは耳をピンとたてる。

「何でアナタがそれをつ!？」

「あ、やっぱお前が食べたのか……」

犯人は予想ついていたが、やはりマックイーンだったか。

この情報は、トレーナー室に入れる人間しか知らないだろう。冷蔵庫にモンブランがあつたことを知ってるのも、俺とマックイーンだけだ。

「……まだ信じられませんかっ!」

「じゃあ何を言ったら信じてもらえる?」

「……トレーナー室に保管している紅茶の銘柄は?」

「ダーズリン。メジロ家の契約農場のものだよな。よくカフェと紅茶とコーヒー。どっちを俺に淹れてくれるか言い合ってるよな。ちなみにカフェのコーヒーマンデリンの深煎りで、豆は毎日煎って補充してる」

これは流石に俺しか知らない情報。ここまで知ってたら、ストーカーを超えて超能力者のはずだ。

「っ……まだ、ですわ！　では、その……。わっ、わたくしのレース前のルーティーンは……っ？」

「それは……」

よく知っている。

メイクデビューからずっと続けているルーティーン。

彼女の気持ちを落ち着かせる方法。マックイーンの俺を拘束する力が弱くなる。俺はマックイーンの手を取って両手で包み込んだ。

「大丈夫。大丈夫。大丈夫。心はいつも君と共にターフの上に」

「っ——」

マックイーンは目を見開いて驚きの表情を浮かべた。

これは控え室でだけ行っているルーティーンだし、他の誰にもやったことはない。つまり、俺とマックイーンの秘密の『おまじない』だ。

「分かってくれたかい？　マックイーン？」

「わっ、わわっ、わたくしはっ……なんてことをっ！」

苦笑いする俺に、マックイーンの顔は焼いた鉄のように赤くなる。

そしてすぐさま俺から飛び退くと、鮮やかな形で土下座して見せる。

「おいおい、やめてくれよ……！　俺を心配しての行動だったんだろ？」

「自らのトレーナーを信じられないなんて！ メジロの恥ですわ！」

今度は別の掛りを見せるマックイーンを落ち着かせるのだった……。

……

……

……

マックイーン Side

ああ、やってしまいましたわ……。

トレーナーさんの部屋に押し入っただけではなく、押し倒して暴言まで使ってしまった……。

一心同体と言ってくれたトレーナーさん。ここまで導いてくれたトレーナーさん。心まで繋がった気持ちでいたのに、それをわたくしの方から裏切ってしまうなんて。

「終わりました……契約解除の流れですわね……」

「いや、しないからね。まだまだ君の走りを見たいし」

「トレーナーさん……」

トレーナーさんが台所から戻ってきて、私に紅茶を差し出す。

そして魂が抜けかけている私を引き戻す言葉。優しく美しいウマ娘の声ですけど、言葉遣いはいつも通りのトレーナーさん。

いまのわたくしには最高の慰め。きつと訳もわからずウマ娘になった、貴方の方が何倍も不安でしょうに……。

「……」

なんとも気まずいですわ。

次の言葉がなかなか切り出せずに、時間だけ何倍も引き伸ばされたかのよう。とりあえず深呼吸をすると、机を挟んで向こう側のトレーナーさんの顔を見つめる。

さつきは興奮でよく見えていませんでしたが……。

美しい尾花栗毛のウマ娘。まるで欧州の貴族のような整った顔立ち。

人のときも素敵でしたが、やはりこの方はきつとどうなつても素敵なのでしょう。

わたくしの眼差しに、首を傾げる姿はなんとも可愛らしく……。キョトンとした表情なんてもう。

ああ、わたくし以外に見せたたくない。独り占めしたい。そんな顔を他の誰かに見せれば、きつと勘違いしてしまいますわ……！

「トレーナーさんはわたくしが守らなくては……」

「えつと……程々にな……？」

メジロの名にかけて、トレーナーさんはこの私が守ってみせます。

ウマ娘になろうが関係ありません。共にあると決めたお方なので。性別の違い

いだらうと、乗り越えて見せましょう。

.....

.....

.....

トレーナーSide

うん、どう見ても別の方向性で掛かってるね。

ふんすふんすと鼻を鳴らして、しっぽが大きく左右に振れて、耳も忙しく動いていく。

しかしマックイーンが来てくれたおかげで、さっきの不安もどこかに消えていきつと受け入れられない不安。とかもあつたんだろう。

しかし話してみれば、少し危なかったとは言え、マックイーンは信じてくれたし、受け入れてくれているようだ。

もし俺一人であのまま居たら、ウマ娘になった不安で号泣していたかもしれない。

ポジティブに考えよう。マックイーンが扉を壊して入ってきてくれたから、俺は不安が消えた。

そして月給も消える.....。

はあとため息をつき、俺は紅茶を啜りながら、キラキラとした視線を送るマックイーン見つめ返した。

「安心してくださいまし！ たとえ戻らなくても、私が一生守って差し上げます」

「いや、うん。タキオンは戻れる研究するって言ってるし、そのうち戻れると思うよ」

「そうですか？ ウマ娘のトレーナーさんも素敵ですのに……むしろ近い存在になったと思うと……」

頬を赤らめて言うな……。とツツコミを入れたくなつたが必死に飲み込んだ。

「それより問題はトレーニングの穴が開くことだね……。この姿じゃトレーナーをするのも難しいし」

「その事でしたら、わたくしに。メジロ家にお任せくださいー！」

「とりあえず言っとくが程々にな……？」

いつも以上に掛かり気味になる彼女を抑制するが、こうなつては言葉なんてなんの意味も持ちそうにない。そんな雰囲気が見て取れる。

「私が言えばきつとダイヤさんのサトノ家も協力を……戸籍ぐらい簡単に……」

今メチャクチャに危険なことを言ったような。ウマ娘の耳は、色々拾ってしまうのが困りものだ……。

「このあとたづなさんが来ると言うから、マックイーンも交えて話し合いたいんだ。少

し残ってくれない？　ちよつと一人じゃ不安だし……」

話題を変えようと話を逸らす。

中等部の少女に、不安だから居てほしいなんていうのも、恥ずかしくて頬を掻いて照れ隠しをする。この体になってから、精神面も引つ張られているのか、何かと不安に陥りやすい気がするんだが……。

「……かわいい」

「なんか言ったか……？」

「なっ、何でもありません！　もちろん……！　わたくしがお守りするので安心してくださいまし！」

マックイーンも顔を真っ赤に俺に返す。だいぶいつもの感じが戻ってきた。俺はため息と共に胸をなでおろす。

「ありがとな。マックイーン」

そして、マックイーンにいつも通りの微笑みを返すのだった。

「はうっ……！」

なぜかマックイーンは鼻血を垂らした訳だが……。

好奇心

その後たづなさんと合流して、今後のことについて話し合うことになった。

吹き飛んだ扉に、驚きの顔を見せたものの、時々ある事ですから。と笑顔で言ってみせたたづなさん。

マックイーンが修理代を出すと言つて謝っていたので、俺の月給が消える事はなくなつた……。

マックイーンが電話をかけると一瞬で修理屋が飛んできて直していった事には、流石に俺もたづなさんも驚いたが。

そして今、話し合うために、たづなさんにも紅茶を出して、机を挟んで座っている。そして二人はマジマジと俺を見つめる。

「そんなに俺の顔が面白いのですか……?」

「あつ、いえ違うんです。その……やはりお綺麗だなといえますか……」

「そうですね! エプロンなんか本当に似合つてて」

そういえば、お茶を用意するためにエプロンをつけていたが、それが綺麗となんの関係があるのだろうか。

キレイで言えばきつと、俺よりたづなさんやマックイーンの方がキレイだと思う。

まあ、俺はまがい物なのだし、比べるのも失礼か……。

「俺的にはかつこいいいって言われたんですけど……」

「いえ、可愛いです」

「そうですわね。間違いなく可愛いです」

即答で、しかも真顔で返されちゃもはや反論はするまい。小さくため息をついて、話を切り返す。

「そろそろ本題に入りましょう。理事長はなにか言っていましたか？」

「その事なんです、理事長は『猶予！ 時間がほしい！』と言っていました」

たづなさんは、理事長に預かったであろう扇子を開き、理事長の声真似で俺たちに伝えた。

「……トレーナーさんがその姿でも、トレーナーをできる用意をしているようです」

ほんのり顔を赤くして、たづなさんは扇子をいそいそとしましう。恥ずかしいならやらないでもいいのに……。

「なるほど……まさか偽の戸籍とかじゃないですよね？」

ははは、と乾いた笑いを浮かべて、マックイーンを見ながらそう言う。

「……」

たづなさんはその言葉に視線をそらした。まさかマジでその作戦でいくのか……？

「ならばわたくしも協力いたします！ メジロ家の力を使えば、偽物と言わず本物の戸籍でも用意してみせましょう」

待て待て、それは本当に犯罪なんじゃないか？ というかメジロ家はそのレベルの事ができてしまうのか……？

「メジロ家の力があれば、理事長も助かるはずです。この場合、マックイーンさんにバレたのは怪我の功名ですね」

いや止めて!?

貴女は止める立場でしょうに。たづなさんの事も段々とわからなくなってきた気がする……。

「そんな顔しないで、安心してくださいトレーナーさん。トレーナーさんは私が守ります」

「わたくしもですわ！ トレーナーさんの出来事はわたくしの出来事も同然ですのよ」

俺の諦め顔が、これからの不安かなんかに見えたらしい。こんな顔になってる原因は、目の前のあなた達なんですが……と言いつつ、俺の事を思ってくれる。

そんな二人の厚意を無碍にできないし、雇われの身で理事長にも逆らえない訳だ。

やる気が絶好調な二人を見てると、何とかなる気にもなるし、どんよりとした空気よりはマシだろう。

しかし、ウマ娘トレーナー。

いない訳じゃないが圧倒的に数も少ないし、トレセンでは教官を含めて数える程しか居ない。

能力あるウマ娘は自分で走ったり、上位のリーグに進む子も多く、わざわざトレーナーになろう。と言う子も少ない。

そもそも、トレーナーは狭き門である。俺だつて一回は試験に落ちたし、本格的にトレーナー活動する前に、チームで2年近く研修を積まなくてはいけなかった。

その後、運良くマックイーンと出会つてここまでこれたわけだ。

容姿端麗でモデルにもなれる。力仕事も問題ない。ダンサーなんて選択肢もある。

色々活躍できる分野があるのに、こちらを選ぶほうが珍しいのだ。

しかしだ。

……もし俺がウマ娘のままトレーナーになったら、俺のチームの奴らはトレーナーが変わる事にはなるのか。

「あの……たづなさん」

「はい？　なんででしょうか？」

マックイーンと白熱した議論を行っていたたづなさんに声をかける。

「もし俺がこのトレーナーになったらチームの子たち混乱すると思うんですよ。それなんですけど……。チームの子たちにだけでも、俺の状態を話したほうが良いんじゃないですか？」

遅かれ早かれバレルる事ではあるし、トレーナーが変わるのに隠せる事じゃないだろう。そう思つて俺は提案をする。

「確かにチームには隠せる問題でもないですからね……」

「皆さんわたくしのトレーナーさんを慕っていますもの……。やはり、情報を共有すべきだとわたくしも思いますわ」

マックイーンは俺の意見に同意してくれたようだ。

「それに、チームにはダイヤさんも居ますし、メジロ家とサトノ家が協力すれば、敵はありませんわ」

……なんか余計な言葉がついてた気がするが。

「俺はどうなつても良いんですが、あの子達はレース一回一回に命をかけて臨んでいます。やっぱり不安は怪我にもつながると思うんですね」

「分かりました。このあと理事長と相談しますね？」

携帯端末で理事長に確認を取るたづなさん。レスポンスが早くて助かる。

「でも、自分はどうなっても良いなんて言わないでください？ トレーナーの代わりは居ないんですから」

理事長に確認のメッセージを送ると、たづなさんは俺に困った顔をしてそう言った。

「ははは……気を付けます……」

「トレーナーさんはやりすぎの事がありますものね……」

「それはマックイーンもだろう？」

今ではすっかり新品になってしまった扉を指差してジト目で見つめる。

「あつ、あれは！ そのっ……返す言葉がございません……」

顔を真っ赤に反論しようとするマックイーン。しかし言葉が見つからなかったのか、耳を垂らして、しゅんとしてしまった。

「悪い悪い。俺を思つての事だもんな」

手を伸ばしてマックイーンの頭を撫でる。

「はっ、はううう……」

俺も幸せものだ。

掛かる事があるとはいえ、こんなにも慕ってくれる子が居るのだから。

「羨ましい……」

「なにか言いました？」

「何でもありませんっ」

そしてなぜかさっぽを向いて拗ねるたづなさん。……なにか対応を間違ったか？

♪——

そんなやり取りをしていると、たづなさんの携帯端末にメッセージの着信音が聞こえた。

彼女はそれを確認すると、ゆっくりと立ち上がった。

「理事長が会議をしたいとの事です。ひつじょーに名残惜しいですが、これで失礼しますね？」

「迷惑かけますね……」

不満そうな顔をするたづなさんに謝る。業務外の事をしてるのだから、不満になるのも当然だろう。いつか穴埋めをしなくちゃな……。

「トレーナーさん安心してください。わたくしは一緒に居ますので」

「あ、マックイーンさんの話も聞きたいそうなので、同行お願いしますね？」

「へ……？」

そう言うたとづなさんは、マックイーンを小脇に抱える。文字通りバッグのようのだ。そして、そのまま部屋を出ていこうとする。

本当にこの人の筋力どうなってるんだ……。

「離してください！ トレーナーさんにはわたくしが必要なのですの！」
「マックイーン……」

そんなにも俺を思ってくれてるんだな。必死にたづなさんから離れようとする。俺を不安にさせないためか……。

もとから優しい子つてのは知ってたが、ここまで必死になると、嬉し恥ずかしという感じだ。

マックイーンは俺に手を伸ばし――

「トレーナーさんが不安にならないためにも、色々なお世話から、あわよくばその流れでお風呂や添い寝、夜のお供をしなくてははいけませんのに!!」

「たづなさん。回収お疲れ様です」

「トレーナーさんっ!?!」

その手は握られることは無かった。握り返したら俺の貞操が危ない。

「台所に買ってきた食料を置いときました。お代は結構です全部理事長持ちなので」
「あ、わざわざありがとうございます」

俺は若干呆れ顔のたづなさんを玄関まで見送る。

「トレーナーさん。あんまりですわー!」

扉を出ていっても、マックイーンの悲壮感ある声が木霊していた。

「一心同体って仰ってたのに……！」

俺は悪くない。

……

……

……

たづなさんが置いていった食料で腹を満たした。しかし、ほとんどカップ麺。しかもラーメンとは……。

俺も料理に関しては無頓着だが、たづなさんの食生活が心配になってきた。

とにかく、腹も満たされ数時間が過ぎた。すっかり日も落ちて21時を回っている。

ここ数年はまともな休みもなく、いざ何もすることがなくなると、暇なとき何をしていたのだろうかと思いつけない。極度のワーカーホリックになってしまったかのようだ。

(暇だ……)

なにか無かったものか。と部屋の隅に置かれたカラーボックスを漁る。整理されていない事が、丸わかりな程に乱雑に物が入っている。

ほとんどがゴミ袋のような生活用品。ゲーム機の一つもあれば良いのに、ただ寝るための家という場所に、そんなものがあるはずもない。

最後の段を開ける。

いくつか物を退けると、箱が入っていた。ボール紙でできた箱には、ウマ娘用のシューズメーカーロゴが入っている。

「これは確か……」

もう2年前になるだろうか。

蹄鉄の整備に用いた講習に使った靴だ。もちろん俺が履けるわけもなく、ここに眠っていた訳だ。

「懐かしいなー。蹄鉄はめるときにマックイーンが指を叩いて大変だったな……」

箱から靴を取り出して、眺めてみると思い出が蘇る。箱に書いてあったサイズは24cm。ふと思立って、自分の足の横に並べてみる。

「おお……意外とぴったりじゃないか?」

ウマ娘用の靴を履く機会なんて、そうそうあるものじゃない。

片足だけ履いてみると、まるで自分のために買った様にぴったりだった。

白を基調に、薄いピンクのラインが入っているそれは、如何にもウマ娘用といった感じだ。

靴底には蹄鉄がはまっており、フローリングに足を軽く打ち付けると、ガチャガチャと音がなった。

「……」

……おかしい。

その音が耳に入ってから、いきなり無性に走りたくなってくる。

これもウマ娘の性なのだろうか？ 好奇心も相まって、しつぽが忙しく揺れる。

「もうすぐ門限も過ぎるし。他に人も居なそうだよな……」

少しぐらい外に出たってバレないだろう。浅はかな考えかもしれないが、好奇心は止められないのだ。

ウマ娘の体になったのだから、そりゃ走ってみたいと思うのは当然の事だろう。

もちろん、この体の限界を知っておくのは悪いことじゃない……。

これはテストだ。そう自分の中で理由をつければ、あとは早かった。

玄関で靴を履き、扉を少し開けてあたりを見回して、誰もいないことを確認すると。

「よし、行ってみるか……」

俺は闇夜に出かけて行くのだった。

黒い刺客・青い薔薇は微笑む

トレセン学園は日本最大のレース走者の養成施設だ。基本的な教養から、レースに係る専門のものまでを学習でき、さらにはライブパフォーマンスの為のトレーニングを行う。

そして、そのための施設も設置されており、広大な敷地面積を持っている。

なにせ、2000m級の芝コース。そしてダートコース。さらには坂路、ポリトラック、ウツドチップのコースまで存在する。

それに加えて、巨大な体育館、プール、もちろん校舎や各複合的な施設。

美浦と栗東のウマ娘寮とトレーナー寮に関係者寮も含めると、かの有名な遊園地よりも広い。

ここ一つで街と言っても過言ではない。

当然ながら、人がこの中を歩き回って移動するには広すぎる。通常は車や自転車。場合によってはセグウェイのような移動用の機材も用いる。

ではウマ娘はどうか。当然走るのである。

もちろん全力で走ることは許されていないが、駈歩ほどの速さなら施設内以外では怒

られることはほぼ無いだろう。

俺は今走っている。もちろん駈歩ほどの速度でだ。

かけ足と言っても、人間のそれとは少し違う。ウマ娘の駈歩の速さは分速にして約340m。時速に換算するとだいたい20km/hと言ったところだろう。

これは人で言うフルマラソンの速さとほぼ同じ速さであると言える。

ウマ娘の凄い点はこれより上の走法がある。

襲歩――

俗にギャロップと呼ばれる走法は人間で言う全力疾走だ。その速度は分速1000m。時速にして60km/hを超える。

こんなので衝突でもしたら、もちろん命はない。

だからこそ、レーストレーニングは整備されたトレーニングコースで、俺たちトレーナーと共に細心の注意を払って行われる。

(しかしすごいな……)

俺は今、駈歩で敷地内を走っている。

校舎の周りを回って、トレーニングコースへ向かう道のりだ。

鍛えてはいるが、トレーナー寮から学園までの通勤でもため息を出したくなる距離なのに、この体では全然疲れが出ない。

それどころか、耳や尻尾に当たる風を感じると心地よさも感じる。

防犯のために設置された照明のみの静かな世界。聞こえるのは俺の可愛くなった息遣いと、足を踏み鳴らす音。

走るのでこんなにも心地よかったか？

俺は初めて、彼女たちが見ている世界に触れられた気がした。

こうなれば、全力で走ってみたいとも思ってしまうもの。

もつと彼女たちの世界が見てみたい。

そうすれば、もつと色々彼女たちの為のトレーニングが思いつくかもしれない。

そんな思いを馳せながら、俺はトレーニングコースへと向かうのだった。

.....

.....

.....

時刻は22時過ぎ。

トレセン学園のトレーニングコース。

一周2000m近いコースは、日々の保守点検のおかげで芝もダートも完璧な状態に仕上げられている。

これも何やら、理事長が私財までつき込んだ結果らしい。あの人のウマ娘愛には頭が

下がる。

「照明も、簡易的なスタンド席まで用意されたここは、正式なレース場にも負けない。ウマ娘はここで週1〜2回のトレーニングを行っている。少ないように思えるが、全力疾走のトレーニングなんて、そうそう行えるものじゃない。」

「実際ウマ娘達のレースは、レース前と後で体重が数キロ変わってしまう程に過酷なものなのだ。」

「レース前の追いきりを除いて、週1〜2回が限界になる。それ以外は基礎トレーニングやライブの練習。トレーナーたちはその補佐を行うのだ。」

「俺はスタンドからコースを見渡して、思いに耽ってしまった。この場所はいくつもの光や影で満ちている。」

「だからだろうか。」

「鼻に感じる強いターフの匂い。感じ方が変わると、ここまで精神に影響してしまうものか。」

「俺は大きく深呼吸をすると、トレーニングコースに降りようとした。」

「やあーっ！」

「ふと耳に届く声。」

「俺は耳を動かしそちらに注意を向けた。」

視線の先にはコースを走る一人のウマ娘。もうとつくに門限は過ぎてはいるはずだが……。

目を凝らすと、それは見知ったウマ娘の姿だった。

とにかく今は彼女を止めないと。

俺は思わず走り出して彼女の元に向かった。

……

……

……

木の陰からそつとその少女を観察する。

少女の名前はライスシャワー。俺の担当ウマ娘の一人だ。

生粋のステイヤーで、長距離ではマックイーンと並ぶほどの実力者でもある。

その小さいバ体に似合わないほどに、彼女の走りは鋭い。そんな彼女が、なぜこんな時間に走っているんだろうか。

トレーニングメニューは事前に渡していたはずだし、それにはこんな時間に走れなんて書いてないはずだ。

彼女のことを考えると、何か心理的な理由かもしれない。しかし声をかけるにも、突然声をかけては事故の元だ。

俺は彼女が立ち止まるのを待って、ゆっくりと駆け寄っていく。

「門限は過ぎてますよー?」

今の段階では寮に帰すことを優先しなくてはいけない。

今日はもう遅いし、話をややこしくしないためにも、ここは自分がトレーナーであることは隠しておこうと思い、用事があつて通りかかったウマ娘ポジで行こうと決めた。

「ひゃわっ!? ごめんなひゃっ……うう、かんじやつたあ……」

……かわいい。

俺を見るなり驚き、ウサギのように大きな耳を垂らして、驚いたように謝る姿は実に保護欲を掻き立てられる。

いや、今はそんな場合ではない。

できるだけ優しい表情を作って、ライスの近くに立つと視線を合わせるように少し屈む。

「怒ってませんよ? でもこんな時間に自主練は危ないから帰った方がいいですね」

「うう……ごめんなさい……。ライス……何だか眠れなくなつて……」

今にも泣き出しそうな声をあげるライス。少し震える声は、何かしら不安なことがあつたときの声だ。

「寝れない理由……私で良ければ聞かせてもらえませんか?」

「へっ……？　だっ、だめだよ……。ライスに関わつたらきつと良くないことが起こるから……」

明らかに何かを気にしているときの仕草だった。トレーニングが上手いかなかったのだろうか。

このまま寮に帰すのも忍びない。ライスにもう一度微笑みながら声を掛ける。

「安心して？　私、実は悩めるウマ娘さんを助ける『謎のお助けウマ娘』なんだ。

不思議な力を持つてるから、不幸なんてヘッチャラなんですよ？」

「謎のお助けウマ娘さん……？」

我ながらこの言い方はバカっぽかっただろうか……？　ライスもポカーンとした視線でこちらを見つめてくる。

「ふふっ」

その後小さく笑って見せるライス。

少し落ち着いたように、こちらを見つめると話始める。

「あのね……ライスにはお兄様がいて……。あつ、お兄様って言っても、本当のお兄様じゃなくて……」

俺のことだ。

何か不手際があつただろうか？　とライスが紡ぐ言葉にハラハラする。

「それでね……？ 今日お兄様とトレニングの予定だったの……でもね……」
話しているうちに声のトーンが次第に下がっていく。

「お兄様……お風邪引いちやって……。それはきつとライスのせいなんだ……」

目尻に溜めた涙が溢れる。

「ライスが一昨日、お兄様からもらったペンダントを落としちゃって……。通りかかったお兄様が一緒に探してくれたんだけど、雨が降ってきちゃって……」

そういえば一昨日そんなことがあった。あの時は通り雨で誰も予想できなかつたし、ライスの責任ではない。

「ライスはお兄様に風邪をひいちゃいけないって言われて……。部屋に戻されたんだけど……」

そう、俺は探し続けた。

やっぱり悲しい顔はさせたくないし、ライスにこう言った顔は似合わない。

「その後、びしょ濡れになったお兄様がライスのペンダント見つけてくれて……。きつとお風邪をひいちゃったのも……。ライスの……。せいで……。ううっ……」

ライスはそこまで話終わると、言葉を詰まらせて涙を流し始めてしまう。

「それは違うっ！ ライスのせいなんかじゃないっ！」

俺にできることは、ただ声を上げて彼女を抱きしめる事だけだった。小さな彼女を包

むように抱きしめる。

「ふえっ……っ？」

「俺が勝手にやった事だし、通り雨なんて予測できないよ。ごめんなライス……俺嘘ついたんだ」

泣いて赤くなった瞳でライスは俺を見つめる。きよとんとした視線でまるで混乱したかのようだった。

「……お兄様なの？」

ライスは気づいたように、俺の胸あたりから顔を見つめてくる。

「隠すつもりはなかったんだ……でもこんな姿になったら気づいてくれないかもって思ってた……」

「少しだけお兄様の匂いにする……。ほんとにお兄様なんだ……!」

いつの間にかライスに抱きつき返される。離さないでとか、嫌わないで。と言った強さで離れる様子はない。

「ごめんなライス……っ？ 風邪なんかひいてないんだ。アグネスタキオンの実験事故に巻き込まれて、ウマ娘になっちゃったんだ……」

「そうなんだ……」

ライスは少し俯く。

「アグネスタキオンさん……お兄様を危ない目に合わせるなんて許せない……」
俺の胸にライスは顔を埋める。そして何かモゴモゴと呟いたようだが聞こえなかった。

「ごめんなライス……嘘ついちゃったな……」

「ううんっ！ ライスは大丈夫だからっ！」

優しい笑みを見せるライス。これならもう大丈夫そうだ。

「しかしまさかウマ娘になるなんて……」

「お兄様大変だったんだね……で、でも！ でもでも！ お兄様とっても綺麗だよ？」

「あはは……。ありがとうなライス……」

彼女なりの慰めのつもりなのだろうが、俺は苦笑で返すしかなかった。

彼女の頭を優しく撫でると、んっ、と小さく声を出して微笑む。

ライスのためにも、早く元に戻らないと……。

「さあ、そろそろ帰ろう？ ヒシアマが探しに来ちゃうぞ？」

「……や」

ライスと離れようとすると、思いつきり抱きしめられる。胸に埋める顔からこもった声がかえった。それは拒否の声だ。

こんなに甘えるライスも珍しい。

「ごめんねお兄様……ライスはダメな子だよ……。だって、ライス……。お兄様と離れたくないんだもん……」

俺の顔を見つめて少し涙声で話すライス。甘えん坊なライスも悪くないが、規則は規則なわけで……。

どうしたものかと悩むと。

「そういえば……。お兄様はどうしてここに……。？」

ライスは疑問を投げかけてきた。

そう、ライスのことですっかりと忘れていたが、俺は走りに来たんだった。

「えっと、せつかくウマ娘になったんだし、身体の限界を知るところかなって」

その言葉に、ライスは耳をピーンと立てて瞳を輝かせる。

「お兄様が走るのっ？　ほんと？」

「せつかくだから、ライスたちが見てる世界を少しでも体験したくてね」

ライスは俺を解放して、一歩後ろに下がって興奮気味に尻尾を振り回す。

「じゃ、じゃあ……。お兄様がライスと併走してくれたら……。ライスは寮に帰るよ……」

！

「併走か……」

どうせライスが帰った後に走る予定だったし、それも悪くない。

悪くないどころか、ダービーに出たばかりの現役最強馬に近いライスと走れるなんて、またとない機会だろう。

それなら。

「いいぞ、この体で初めてだけど……。よろしくなライス？」

よろしくなライス？」

「初めて……お兄様とハジメテ……」

ライスは少し顔を赤くして何かを呟いた。まあ、誰かと並走する時に、闘争心で興奮するのは悪くない。

掛かっているわけでもなさそうだし……。

「とりあえず5分くれ。アツプしないと怪我するかもだしな」

「あつ、じゃあ、ライスも手伝う！」

「そうか？　じゃあ頼むよ」

こうして深夜の二人きりのトレーニングが始まったのだった。

……

……

……

「2000mでいいよな」

トレセン学園の芝コースに立つ。

2000mにした理由は、ほぼ一周で、ゴール板からゴール板まで走ればいいからだ。ゲートもないし、他の補助もないため、それが一番わかりやすい。それに、長すぎず、短過ぎずの距離なのだ。

俺の適正距離がわからない以上、長く走りすぎるのは怪我の元だし、ライスにとつては短距離は適性はないしすぐ終わって退屈だろう。

「うんっ！ ライスも準備できてるよ……！」
ルルン気分で満面の笑み。

ここまでの笑顔をするライスは久しぶりに見た。いつも笑顔は見せてくれるのだが、どこか遠慮がちなのだ。

「えつとね……お兄様が先にスタートして……？ 5秒後ライスがスタートするから……」

「それじゃ併走にならないぞ？ そのままゴール板まで駆け抜け抜けちやったりしてな」
なんて冗談を飛ばしてみる。俺こんな性格だっただろうか……。

併走とはいえ誰かと一緒に走るとなると、闘争心が掻き立てられるような気がする。ウマ娘の意識がそうさせてるのだろうか。俺の根本にも、きつと走りたいという心が……。

いや、今は走ることに集中しよう。

「安心して……しつかりついてくから……♪」

「……まあいいか」

そう言つて俺はゴール板の真横に着く。

そして深呼吸してターフを見つめる。

静けさにまるで燃えたつかのように揺れる芝。

悪くない。

悪くないどころか心地よい。

「お兄様のカウントでいいよ？」

「そっか。じゃあ」

深呼吸をして息を整える。

「3、2、1」

そしてカウントをすると、俺は。

「スタートっ！」

思いっきり足を蹴つて飛び込むように前進する。

体が浮く――

そしてついた足をまた蹴り出す。

まさに飛ぶように走ると表現するのが正しい。

ウマ娘は1000mを1分ほどで走破する。これは1秒間に18m近くを走っている計算になるだろう。

一回のストライドは3m超える。

そして一秒間に6歩以上のピッチで走り続けるのだ。

まるで重機関銃のような音が響く。

(驚いた……。俺もその速度で走れてる……！)

どうやらこの体は見てくれだけではないらしい。ありがたいことに、トレーナーとして知識は頭に詰まっている。

教本通りに走り出せば、驚くぐらいすんなりと走り出すことできた。

風が頬を撫でる。

芝が宙を舞う。

足音だけの世界――

これがこんなに気持ちが良いなんて。

ずるい。

彼女たちはこんなに素晴らしい世界を見ていたのだから。

「っ――!？」

そんなことを感じて走っていたところ、後ろに冷たい感覚を覚える。
もう一つの足音。

それはまるでナイフのように鋭く背中を突く。

「ついてく……ついてく……お兄様に……！」

不敵に笑うライス。

それはレースでたまに見せる刺客としての顔。

ああ、この子に追われたウマ娘たちが、みんなして『怖かった』という意味が分かった気がする。

（嘘だろ、いつの間に詰められたっ!?)

音もなく外側の後ろに並ぶライス。俺が振り返ると、満面の笑みで返す。

「おにいさまっ！ たのしいねっ！」

無邪気に笑う姿は何とも可愛いが、瞳には間違はなく鬼が宿っていた。

ライスが隣に並んでくる。併走トレーニングとしては正しい姿だが……。

俺は現役最強格のウマ娘の能力を隣で目の当たりにしてしまった。

今の俺はさしずめ、初めてのG1で意気揚々と出走して『分からされた』ウマ娘といったところだろう。

気づけば、残り3ハロンほどの距離にゴール板が迫る。

「じゃあ行くね？ お兄様？」

ただ一言だけ、彼女は俺にそう言って、まるで弾丸が発射されたかのように飛んでいく。

ああ、なんて素晴らしい末脚なんだ。

置いていかれる俺は――

ただその姿を見つめるしかなかった。

彼女に遅れること数秒、ゴール板を走り抜けた。

タイムを測ってたわけじゃないが、おそらく2分8秒そこそこ。

一応トレセン学園の入学には問題ないタイムだとは思う。

「お兄様っ……………！ かっこよかったよ……………！」

息を切らして肩を上下に動かす俺と、余裕そうに声を掛けるライス。

こんなに余裕にされると、少しだけ傷つくが……………俺が育てたと思うと、誇らしさの方が勝つ。

「はあ、はあ……………いやあ、ライスは速いなあ」

「えへへっ……………お兄様がライスを強くしてくれたんだよ……………」

そう言ってもらえると、本当にトレーナー冥利に尽きる。

「さあ……………はあ、ふう……………。約束だぞ？」

「うんっ……。寂しいけど……。寮に帰るね？」

「ん、良い子だライス。つつ……」

ライスの頭を撫でようとすると、胸に少し違和感を感じる。何というか先端が……。

「お、お兄様……。？ どうしたの……。？」

「いやその……。なんか胸が……。つていうか……」

とつさに両腕で胸を隠すように胸を押さえる。走ってる時は興奮で気づかなかつたが。

「これは間違いなく……」。

「……。あつ」

ライスは何か気づいたように顔を赤くした。

「お兄様……。サポーターとかつけてなかったよね……。？」

「……」

やはりそのせいか……。

要は先端が擦れて痛い……。そういうことだ。

ウマ娘が走る時に受ける衝撃は人間と比べて大きい。当然胸も揺れる。俺の胸は、今や魅力的なぐらい大きい。

「ごめんね……。ライスのせい……」

「いや違う。これは俺のミスだ……。ウマ娘の体がわからなかった……。配慮が足りなかっただけで……」

「恥ずかしくて顔が溶けそうぐらい熱い……」

「お兄様……。ううん、お姉さまには、今度ウマ娘の体のことも教えてあげるね……。？」

「なんか犯罪っぽい発言だが……。あとお姉さまって……」

「だって、今はお兄様は綺麗なウマ娘。ライスたちと同じウマ娘だから……。お姉さま……。だめ……。かな……。？」

「ライスは上目遣いに俺に尋ねる。」

「そんな目をされたら断れないだろう。断ったら全国のライスファンに殺されかねない。」

「……。いや、良いよお姉さままで。それと、あまり変なこといっちゃダメだぞ？ 勘違いするファンとかもいるかもだからな？」

「お姉さまになら良いのに……」

「何か言ったか？」

「っ！ ううんっ！ 何でもないの……！」

「とんだ災難だった。いや、まあライスと走れてよかったが。」

「俺はヒリヒリする胸が服に擦れないように、胸を押さえる。明日には治ってくれと」

良いけど……。

「ほら、早く戻りな？ ヒシアマが今頃カンカンだぞ」

「あう……お姉さまも一緒に来てくれないの……？」

「そうしたいが、まだウマ娘になったことバレるわけにはいかないから……」

ライスは耳を垂らして、お願いの視線を送るが、それはさすがに断らないといけない。その視線を鋼の意思で跳ね除けた。

「……ううん、元はと言えばライスのせいだもんね。分かった。ライス一人で戻るね……？」

「偉いぞライス。近いうちにトレーナーとしても戻れるかもだから、安心してくれ」

わしやわしやとライスの頭を撫で回すと、ライスは満足したように笑みを浮かべて。

「分かった……！ えっと、もつとお話したいけど、これ以上話すとお姉さまも遅くなっちゃうから……。じゃあねお姉さま！」

駆歩で去っていくライスの後ろ姿を見送り、静かになった練習場を見渡す。

やはり走らないとわからないこともある。ウマ娘たちと同じ視座になったことで、ライスと走ることで見えるものもあつた。

もしかしたら、アグネスタキオンには感謝すべきなのか……？

いや……それは違うか……。

「っ……………あーもう……………」

胸のヒリヒリを感じながら、俺は誰にもバレないように寮に戻るのだった……………。

……………

……………

……………

ライスシャワー Side

ライスはあの後、お姉さまと別れて寮に戻りました。

ヒシアマさんにはいっぱい心配かけちゃったけど、ライスはいつも真面目だから、今日だけは許してあげるって言ってくれました。

遅くなったご飯とお風呂を済ませて部屋に戻ると、同室のロブロイさんが心配して。と言ってくれました。

ライスはいろんな人に心配をかけちゃったけど、今日だけは悪いなんて思いませんでした。

ライスはきつと悪い子です。

でも、お姉さまとの二人っきりの併走は、どんなものにも代えられない特別なものでした。

お姉さまとの二人っきりのことを思い出すと、思わず笑みが溢れてしまいます。

一緒に走ってくれたお姉さま。

ライスがびつたりと後ろについていくと、やっぱり驚いたお姉さま。

最後の直線で抜いた時、横目に見えた絶望したようなお姉さま。

レース後に声をかけると、悔しそうにするお姉さま。

はあ……お姉さま……♡

あの悔しそうな顔と、ライスを褒めてくれる優しい顔。

思い出すだけで、何だか背筋がゾクゾクつてして、もつと見てみたいって思っちゃう

……。

それにしても、ウマ娘になってもお姉さまはライスに勝てないんだ。

そっか……お姉さまはライスに勝てないんだ……ふふつ……。

じゃあライスが守らないと。

ライスに勝てないお姉さまは……弱いんだから……♪

「あの、ライスさん？ 何かあったんですか……？」

「ふえっ？ 何でもないよ……？」

きつとライスの顔に出ちやってたんだね。ライスはロブロイさんに何でもないよ。

と、いつも通り返したつもりだったんだけど……。

「嬉しいって顔してます。良いことあったんですね」

「いいこと……うんっ、ライスね……えっと、お姫様に会ったんだ」

ライスの言葉に、ロブロイさんはキョトンってしちゃいました。

でもお姉さまは間違いなく、絵本に出てくるお姫様みたいで……。

きれいな尾花栗毛のウマ娘さんで、ライスも思わず見惚れちゃうぐらい。

お姉さまがお姫様なら、ライスはお姫様も守る騎士様にならないとだよね。

うんうん、がんばるぞー、おーっ！

明日からが楽しみだなあ……。

初めてののお風呂

「何で！ あなたはウマ娘に生まれてこなかったのよっ!!」

「おい！ そんな言い方はないだろ！」

「私のっ、私は血統を残さないといけないのにつ!!」

「こんな子が産まれてきたからっ!!」

「……もう終わりよ。出て行って頂戴。ここまでは我慢できたけど、子供ができないなら意味はないわ」

「私はこの血を……残さないといけないの……」

「……いくぞ。ごめんなこんな親父で……。お前をウマ娘にしてあげなくて」

一人の男性が俺の手を引いて部屋を出ていこうとする。

振り返って見えた一人のウマ娘は、地面にヘナヘナと座り込み、すすり泣くのがあった。
そんな光景を俺は……。

……

……

……

「つ……。ゆめ……。か……」

嫌な夢だった。

おぼろげにしか覚えていないが、子供の時のもの。最近は全くと言って良いほど見る
ことのなくなっていた夢。

ため息とともにゆくりと体を起こす。頭をプルプルと振ると、長い髪の毛が追随し
て動いた。

「こつちも夢ならよかつたんだけどな……」

「トレーナーさん。魔されていたみたいですけど、大丈夫ですか？」

「ああ、大丈夫なだけどさ……」

横を見るとタオルを持っているメジロマックイーンと……。ニコニコでこちらを見
つめているサトノダイヤモンドの姿があった。

俺はマックイーンからタオルを受け取ると、顔の汗を拭った。

「トレーナーさん！ おはようございます！」

「やあダイヤちゃん……。君らなにナチュラルに人の家に上がり込んでるの……？」

てか今何時よ……」

外はまだ薄暗くて、朝早い時間だということが窺える。

「今はえつと……。5時ですわね。少し早いですけど、トレーナーさんが心配で……」

「トレーナーさん、本当にウマ娘になってるんですね」

あまり驚きを見せないダイヤ。マックイーンから事情を聞いていたのだろうか……この子たち適応早くないですか。

「で、何時からいるんだ？」

「えっと、今から一時間ほど前からですわ」

「トレーナーさんの寝顔いっぱい見ちゃいました♪」

「驚かされてる顔がそんなに面白かったのかよ……まあいいけどさ。合鍵とか渡してないはずなんだけど。『また』扉でも壊した？」

冗談っぽくマックイーンに言葉を向ける。

「あつ、あれはっ！ そのもう良いじゃありませんの！」

「マックイーンさん？」

「ああ、ダイヤちゃん。マックイーンはね、馬鹿力で扉もごっ！」

俺は口をマックイーンに押しえられる。

「それ以上言ったら怒りますわよ！」

「んぐっ、んー、ぷは。分かった分かった……で質問戻すけど、どうやってここに？ それと何か用だった？」

自分の体を確認するが、特におかしいところはない。部屋も普通に大丈夫だし、おそ

らく本当に自分の寝顔を見ていただけなのだろう。

「合鍵はたづなさんから許可を頂きましたの。トレーナーさんのサポートをしてあげて欲しいと」

「あと、トレーナーさんをお連れする準備を頼まれています」

「確かにありがたいけど……早すぎじゃない……？」

こんな夜明け前に来なくても良いのに。俺だつて彼女たちがいなければ二度寝する予定だったし。

「トレーナーさんっ！ 甘いですわー！」

「そうです甘すぎますー！」

俺の言葉に二人は興奮気味に返してきた。

「トレーナーさん？ ウマ娘がどれだけ身嗜みに力を使っているか分かってませんわね？」

そりやなつたのが昨日なんだから、分かるはずもないだろう。と言いたいところだが、確かにマックイーンたちの髪や尻尾は念入りに手入れがされている。

今日の前に座る二人を見ても、魅了されるように美しい茸毛。まだ部屋は暗いが輝くような鹿毛。それに対して、俺の髪はボサボサで……。

自分の裸体を見る事になる恥ずかしさから、昨日は風呂に入らずに眠ってしまった。

『身だしなみがだらしない』と言われても仕方がないだろう。

「トレーナーさんの事ですから、恥ずかしいとかでお風呂も入ってませんわね？」

「ん、くんくん。あ、トレーナーさん汗の匂いがしますね……嫌いじゃないですけど……」

「ダイヤさんっ!?!」

不意に近づいてきたダイヤに匂いを嗅がれた。いつもだつたらあまり気にしないが、汗の匂いがすると言われると顔が熱くなる。

「恥ずかしい……。という感覚に苛まれる。」

「マックイーンはマックイーンで顔を赤くしてる。これはいったいどう言った状況なんだ……?」

「そりゃ俺の体だけど、俺も健全な男なわけだし。その、異性というかわマ娘の体は目の毒というか。だから」

「ダメですわ!」

「ダメです!」

言い終わる前に二人に言葉を遮られてしまった。

「トレーナーさんには、ウマ娘の体のケアを教えて差し上げますわ!」

「そうです! せっかく綺麗なウマ娘になったんですから」

「……分かったけど教えるだけで良いからな？」

二人は顔を見合つて笑みを浮かべると

「もちろん『実践』で教えてあげますわ♪」

「もちろん『実践』で教えてあげます♪」

何でこの二人はこんなに息がぴつたりなんだ……。

「あと、朝食などもわたたくしにお任せくださいませ。メジロのウマ娘たるもの、料理も完璧にこなしますので」

「台所に置いてある袋。カップラーメンばかりでしたもんね」

あれはたづなさんが置いていったもののだが。とはいえ、自分もそこまで料理が上手いわけではない。

作つてくれるというならありがたい話。というか三年間一緒にいたけど、マックイーンが料理できるという話は聞かなかつたな。

「私はお料理苦手なので……私はトレーナーさんのお風呂のお世話しますね？」

「んなっ!？」

その言葉に耳をピクピクと動かして、驚きの表情を浮かべるマックイーン。何でマックイーンが俺より驚いてるんだ。

「だって、トレーナーさんにはおいしいご飯を食べて欲しいですし……お風呂から上

がって、おいしいご飯があった方がトレーナーさんも喜ぶと思うんです」

「そ、それはそうですけど、わたくしだってトレーナーさんと……」

「分業しましょう？ その方がもっとトレーナーさんを気持ちよくできるはずですよ」

この子は何で、こんなに誤解されるような言葉遣いをするのだろうか……。

「うぐぐ……。今日だけですわよ！ 次は譲りませんので！」

マックイーンは吐き捨てるようにそう呟くと、台所に去っていった。次って何だよマックイーン。

そして俺は何だかダイヤとお風呂に入る流れになっっているのだが……。

どうも俺がこの体になってから、同族というか距離を近くなれる分、何かおかしくなってるらしい。

「あのダイヤちゃん。気持ちは嬉しいんだけど」

「ダメです」

また言葉を遮られてしまった……。どうも俺は発言権すら無くなってきているらしい。

「一人ではさせません。ちゃんとその体に覚えてもらうんですから」

「その言い方は何か危険な空気があるからやめような……？」

もう腹を括るしかない。のだろうか……。ダイヤは俺の手を握ると、引つ張るように風呂場に連れて行くのだった。

.....

.....

.....

トレーナー寮は文字通りトレーナーたちの棲み家だ。もちろんトレセン学園の管轄で、トレーナーたちに部屋を提供している。その部屋も一人暮らしにはもつたない広さだ。

もちろん風呂も簡易的なものではなく、大人の男性が足を伸ばせるぐらい大きい。ユニットバスの割と高級な方のもを使っている。

こう言ったところはさすが中央と言ったところか。大事にされていると思えば、悪い気はしない。

簡易的な更衣室から扉を開けると、いつの間にか湯船にお湯が張られていた。

「ささ、トレーナーさん。一緒に入りましょうね♪」

「うん、えつと。やっぱ一人で」

「ダメです……!」

やはり拒否権なんてないらしい。

「ほら、お湯がぬるくなっちゃいますから」

「わわっ! ダイヤちゃん!」

俺が慌てるのも無理はないだろう。ダイヤは躊躇なく学生服を脱ぎ始めた。

俺が目を覆う前に。ちらりと見えた白い肌に思わず声を大きくしてしまった。

心臓が止まるかと思った……。

「もう、そんなに悪い体はしてないと思うのに……」

「そういう問題じゃなくてな……？ 俺は男なんだぞ……？」

「でも今はウマ娘さんです。問題ありませんよ？」

「そうか、それなら問題ない。」

「といくわけないだろう！」

「やっぱむりいっ！ ダイヤちゃんやめ」

「えいっ」

「わああっ!？」

最後の抵抗をしようとしたが……。目を覆っている手を無理やり下ろされてしまった。

今度はしっかりと見てしまう。

白い肌に、豊かな胸を覆う黒いブラジャー。そののせいか、年端も行かない少女のはずなのに、とことなく大人っぽい雰囲気醸し出している。

思わず自分と見比べてしまう……。大きさはあまり変わらないらしい。

少し顔を赤くするダイヤ。やっぱり恥ずかしかったのだろう。悪いことをしたと思うが……。

そういう映像や雑誌で見るその体よりもリアルで、質感とかまでもが脳にダイレクトに刺さる。容姿端麗なだけあって、目に毒どころか殺しにくる。

それと同時に……なぜだろう、羨ましいと思つてしまう自分もいた。

「流石にじつと見られるのつて恥ずかしいですね……」

「ああっ！ ごめん！」

さすがに配慮に欠けていた。年頃の少女の下着姿をジロジロ見るとか、なんて変態だ。

「まあ、トレーナーさんになら……良いけど……」

許してはもらえたのだろうか？ とにかくあまりジロジロと見ないようにしよう。頑張つてくれ俺の鋼の意思。

「ほら、トレーナーさんも早く脱いでください？」

「ああ、そうだよな。俺だけ脱がないのも可笑しいよな」

ため息をつきながら俺はジャージのファスナーを下げる。

「わあっ……」

ダイヤちゃんが俺を見て顔を真っ赤にする。

「トレーナーさん……大胆……」

大胆。

何のことだろうと胸に視線を下ろすと。溢れ出る胸。何もつけていない肌。

「……きやあつー！」

俺はとつさに腕で胸を隠した。すぐ女の子っぽい声が出てしまった。そう、俺は下着は何もつけていなかった。たづなさんが、咄嗟のことだったので合う下着がなかったと言つてたことを思い出す。

それに、昨日ライスと走つて胸が擦れて痛かったじゃないか……。

「ふふつ、隠さなくても良いんですよ？ トレーナーさん可愛いですね？」

「い、言うなあ……」

ああ、顔が沸騰しそうだ……。

……

……

……

「トレーナーさん？ 気持ちいいですかー？」

二人とも一糸纏わぬ姿で、二人で入るには少し狭い風呂場にいる。

ダイヤは俺に背中側から、胸を押し付けるように背中を洗う。俺の鋼の意思がしつか

りと発動してるのか、少しだけ慣れてきた。

いや、いつ戻れるか分からないのだから、慣れないといけない。これは生活のためなのだといい聞かせた。

「うん、あつ、気持ちいいよ……んっ……」

ダイヤの手が尻尾へとかかる。しかし尻尾を撫でられると、こんな感覚なのか……。背中に流れるような刺激を感じる。むず痒いと心地がいいの間に、思わず口から声が漏れる。

「トレーナーさん。しつかり覚えてくださいいね？　尻尾は敏感なんですから、丁寧にですよ？　付け根も」

「ひゃあっ!？」

付け根は本当に敏感らしい。背中を突き抜ける刺激に脳が震える。心なしか甘い声が風呂場に響く。

「裏側も」

「んあつ、ちよつ、だい……やあつ……」

我慢できないほどの刺激、なぜか体も熱くなる……。謎の感覚に思考がぼやける。

「毛もしつかりお手入れしてあげてくださいいね?」

彼女は教えるつもりだったのだろうが、連続的な未知の刺激に俺は力が抜けてしま

う。ヘナヘナと彼女に寄りかかりながら。

「ふああいいい……」

俺は気の抜けた声を発するのだった。

……

……

……

俺たちは少し狭いが、一緒に湯船に浸かる。俺が小さくなったせいか、二人で入れるぐらいにはスペースがあつた。

あの後、尻尾だけではなく、髪や顔や耳まで全ての手入れの仕方を教わつた。のぼせ気味で覚えていないところもあるが……。

今度は、ダイヤが俺に背中を預けるように湯船に浸かっている。

「少し狭いですね……。でもこういうのも嫌いじゃないです」

「そうか？ 俺はたまにはおつきい風呂に入りたいと思うけど」

「ウマ娘寮のお風呂はとっても広いですから。それにお屋敷のお風呂も大きかったし。私はこつちの方が新鮮で」

お嬢様は言う事が違う。

あまり気にはしていなかったが、ウマ娘界でも有名な名家のご令嬢が二人もいるんだ

な俺のチーム……。冷静に考えると、相当すごいことなんじゃないだろうか。

「サトノ家つてすごい名家だったよな。家族のことにはあまり深入りしない主義だったけど……。あれ？俺大丈夫？この状況とかバレたら殺されない……？」

「ふふつ、そんなことある訳ないじゃないですか」

ぎゆうぎゆう。と背中を俺の胸に押し付けてダイヤは笑みを浮かべた。

「私のもつとトレーナーさんにサトノ家のことを知ってもらいたいです。ゆくゆくは……。もつと深く……」

「そうなのか？俺は家のことはあまり深入りされたくないけどなあ」

「そういえば、トレーナーさんの家って……」

「あー、なんかのぼせてきたな。そろそろ上がるぞダイヤ」

「えー、まだいいじゃないですか」

「わがまま言う子は嫌いになっちゃうよ？」

「じゃあ、また一緒に入ってくれますか？」

体勢を変えて、俺と向き合うダイヤ。互いの胸が合わさる距離で、頬を膨らませていた。

「約束はできないけど。考えとく」

「……まあ合格です」

何とか許されたらしい。とにかくこうして俺の初めての風呂は終わりを迎えたのだが。

.....

.....

.....

「ブラをつけろと……？」

「つけないと走ったら痛いですよ？ それに美しさを保つには必須です！」

たづなさんとマックイーンとダイヤで選んだと言う下着が更衣室に広げられる。ああ、まさかブラとか女性物のショーツを履く日が来るとは思わなかった。

「さあ、どれを選ぶんですか？ これが私の一押しです」

たづなさんのは、だいぶ攻めたデザインでスケスケで却下。あの人マジで何考えてるんだ。後で抗議入れてやる……。

そしてマックイーンはスポーツタイプ？ だろうかあまり飾りつ気がない。選ぶんらこれだが、猛烈にプツシユをしているダイヤのものをみると。

「あの、それダイヤちゃんと同じデザイン……」

「？」

何か問題でも？ といった顔で首を傾げられてしまう。ダイヤと一緒にいると感覚

のズレで、俺が可笑しいのではないだろうかと誤認してしまいそうになる。

「マックイーンので……これなら一人で着けやすそうだし」

「そう……ですか……」

耳を垂らして、しょんぼりとするダイヤ。

「ううっ……せっかく選んだのに……」

ウルウルと瞳に涙を貯める。

「あーっ！ えっと、せっかくだから女性物の付け方も知つときたいなあー」

俺は涙に負けた。いやそのシヨンボリ泣き顔は正直言つて卑怯だろう……。

俺がそう言った途端、ダイヤは満面の笑みを見せる。……都合よく扱われたのだろうか。

ダイヤヤ恐ろしい子だ。

「じゃあ着けてあげますね〜♪」

ルンルン気分で俺にブラを着用させるダイヤ。

「んっ……やさしくな……っ？」

後ろでホックを止められ、肩紐を腕に通すと。

「よいしょっと」

「ちよっ、優しくくつてっ、言つたあつ……っ！」

ダイヤは容赦なく手を入れ込んで胸の形を整える。刺激に甘い声が出ってしまった……。

死にたい……。

「ん、ちょうどでしたね。ほら、こっちも履いて……」

同じデザインのショーツを渡されれば、もう諦め気味にそれを履く。

ぴつたりとした布の感覚は、面積こそ小さいものの、守られている感がある。

それに、今の俺にはこっちの方がぴつたりなのだ……悲しきことに……。

鏡を見ても、誰がこのウマ娘が男だったと思うだろうか。ブラをつけたことよって強調された胸はさらに女性味を増して、それを諦め顔で見つめる俺。

ブラもショーツも、悔しいが似合ってると思う。金髪に黒の下着は魔性の女感が出る。

ほぼ同じ身長になったダイヤと並ぶと、毛並みさえ揃ってれば姉妹だ。

「もつと見てたいですが、体が冷えちゃうので……。ささ、早く着替えちゃいましょうね？」

そう言って新しいジャージを渡してくるダイヤ。もう何があっても俺は驚かないし動じないだろう。何て言うんだっけ。不転……？

ここまで色々あったんだ。きつと精神力も鍛えられたことだろう。

……そう思いたい。

……

……

……

「随分とお楽しみでしたわね？」

着替えを終えてリビングに戻ると、マックイーンが仁王立ちで俺に笑顔を見せた。もちろんその笑顔は、真に笑っているわけではない。

エプロン姿で眉をピクピク動かしながら、どす黒い笑みを浮かべているマックイーン。そんなに一緒にお風呂に入りたかったのか？

「はいっ♪ とっても楽しかったです」

無邪気に油を注ぐダイヤ。おそらく悪気はないんだろうが……。

「勘弁してくれ……」

先程の不退転の決意は一瞬で消え去ったのだった。

三女神様。助けてください。

無理ですか……。

そうですか……。

お忍び？

「……」

ダイヤとお風呂に入った後に、髪を乾かされて、髪のカアや尻尾のカア。肌のカアマで教え込まれた。これを毎朝行わないといけないと思うと、気が滅入ってきた。

そうしてうちに、机の上には三人分の朝食が用意されていた。

伝統的な和食。いつも紅茶を飲んでるマックイーンだが、こういうのもできたのか。と感心してしまった。

「……」

そしてマックイーンの機嫌が悪い……。

ダイヤとのお風呂からこつち、すごく機嫌が悪いと言った感情が目に見えてわかる。絶不調とまではいかないが、不調といった感じだ。

そんなに一緒ににお風呂に入れたかったものか……ウマ娘になった俺の体にそんなに興味があるのだろうか。

「いやあ……マックイーンは料理の腕も良いんだな……」

恐る恐る声をかけるが、マックイーンはツーンと顔を逸らす。これはなかなか厄介な

ほど機嫌が悪い。

「マックイーンの夫になる人は幸せだろうなあ……」

「そ、そうですね！ 私は料理もさっぱりなので……」

流石のダイヤも空気に押しつぶされそうになったのか、焦りながら言葉を発する。

「それはどうも」

若干耳が反応したようだが、マックイーンの機嫌は褒める程度では直らないらしい。

作戦を変える必要がある。マックイーンが機嫌良くなるようなことあったか……。

このままでは、目の前に置かれた味噌汁すら喉を通らない。

「そういえば確か……」

「なあマックイーン」

「なんですの？」

キツとした視線で俺を見つめるマックイーン。

「駅前にスイーツバイキングの新しい店ができたらしいんだ。この事態が落ち着いたら、一緒に行かないか？」

「っ……」

「っ……」

耳と尻尾が反応する。表情も想像で若干笑みが抑えられないと言った感じ。

「誰とですよ？」

「え？ マックイーンと……」

チラリと横のダイヤを見つめると、何かを察したように首を横に振っている。

「俺の二人で……？」

「なんで疑問形なんですの？ まあ、合格点ですわね……。ふふっ……」

どうやら機嫌は持ち直したらしい。

「初めからそんなに怒ってません。ただ、トレーナーさんの困り顔を見たかっただけです」

俺はそんなに面白い顔をしていただろうか？ 確かに焦ってはいたが、自分の頬を触りながら少し恥ずかしくなって顔を隠してしまう。

「心臓が止まるかと思っただぞ……」

「わたくしとここまで駆け抜けてきた割には、弱い心臓ですわね？」

レースでハラハラする場面は確かにあったが、ここまでの緊張感は久しぶりだった。

「トレーナーさんの困った顔って可愛いですよね？ もちろん人の時から」

ダイヤお前もなのか。いや、君も今さっき、恐怖しながら首をブンブンと横に振ってたじゃないか。

「トレーナーさん？ スイーツバイキング楽しみにしていますわね？」

「ああ、落ち着いてからな」

とにかく今後どうなるかも分かってないわけで、この問題がクリアできるまでは、外に出ることもままならない。そんなことを考えていると、ぐうつとお腹が鳴る。

「あら、可愛らしい音ですわね？」

「ふふつ、トレーナーさんつたら」

「いやつ、これは……」

おかしい。いつもだったら朝食を抜いてもなんてことなかったのに。腹の音を聞く
と、空腹感が加速した気がした。ウマ娘の体っていうのは、なんて燃費が悪いんだ。

「ささ、トレーナーさん？ 冷めないうちどうぞ？ ダイヤさんも」

「ああ、何から何まで悪いな」

こんなにちゃんとした朝食はいつぶりだろうか？

ご飯と味噌汁。焼鮭に小鉢がいくつか。旅館で出るぐらいの朝食が用意されている。
お世辞抜きに完成度の高い朝食が用意されていた。

「じゃあ、みんなで食べるか」

「はいっ」

二人に顔を交互に見ると、手を合わせて。

「いただきます」

まず俺は味噌汁を手にとって吸ってみる。

「うまい……」

思わず声が出てしまう。ちゃんと出汁がとられているし、味加減もちょうど良い。

俺に実家と呼べる家はないが、お袋の味ってこんな感じなんだろうか。落ち着く味のため息までついてしまう。

「それは何よりです」

微笑むマックイーン。

うん、本当にマックイーンの夫になれる人は幸せだろうな。容姿端麗、料理もできる。何よりレースの彼女は最高に美しい。

しかしこの味噌汁の容器も、焼鮭の乗ってる皿もうちには置いていないものだ。

「お皿まで用意したのか?」

「料理の講師の方は、お皿も重要な要素だとおっしゃられてましたの」

確かに視覚でも楽しめるのは良いことだと思う。きれいなものは料理であれなんであれ良いものだ。少し話して俺はまた夢中で料理を平らげていく。

「しかしあれだな、ウマ娘ってほんと身嗜みは大変だよな……」

しばらく夢中で食べ続け、空腹が落ち着いてきた頃に、さっきのことを振り返るよう言葉に出す。

「マックイーンたちは、毎朝こんなことしてるのか?」

「ええ、メジロのウマ娘たるもの、どんな時も完璧じゃないといけませんもの」
「私も、でもお家では使用人の方がやってくれているので……少し大変ですけど」

マックイーンは胸を張って若干のドヤ顔を見せるが、ダイヤは苦笑いを見せる。お嬢様にもいろいろあるんだなあ。

「スキンケアとかはともかく、長い髪は難儀だよなあ……暑いし、いつそ切るか」
「!?!」

俺の言葉に空気が凍る。

あれ？ 今の発言にそんな地雷はなかったはずなのだが……。マックイーンなんて握っていた箸を落としている。

「だ、だめですわ!」

「トレーナーさん!何を考えてるんですか!!」

二人は俺に詰め寄って、肩をつかんでガクガクと揺らす。

「そんなにきれいな髪を切るなんて、なんでもつたいたいことをっ!」
「髪は女の命なんですよっ?!」

「だっ、だつてさ、手入れも大変だし……何より首筋が暑いつていうか……」

今の俺は、腰まで届くほどのウェーブのかかった金髪ロングだ。これを毎朝手入れしようと思うと、今日ぐらいの時間に起きないと間に合わない。

自慢じゃないがレースの日以外の朝は得意じゃない。できることなら切りたいものだったが、鬼気迫る二人の表情を見ると、切ることは罪なのか？ とすら思えてしまう。

「邪魔なら結えば良いじゃありませんの！」

「そうですよ！ 私たちがしてあげますから……！」

「でも手入れは……」

「私たちがします（わ）！」

「あ、え、はい……」

あまりの勢いに受け入れてしまった。まさか明日から毎朝押しかけてこないよな……。

そんなことを考えてしまったせいで、それからの朝食の残りの味はよく覚えていなかった。

……

……

……

「ふんふーん、ふーん♪」

マックイーンはルンルン気分で俺の髪をいじっている。とりあえず、髪を切ることはやめたのだが、邪魔にはならないように結ってくれるらしい。

後頭部に感じる軽く髪を引っ張られる感覚は、なんともいえないすぐったさを感じる。マックイーンはどこから取り出したのか、リボンで俺の髪を止めて。

「完成ですわ」

俺からは後頭部が見えないが完成したらしい。マックイーンは俺の肩に結った髪を回して見せる。三つ編みで、先の方が青いリボンで止められている。

一本の大きな三つ編みおさげ。確かにこれなら動きやすいが、自分でするとなれば難儀だ。

「ありがとうな。暑さは少しはマシンかな」

首に当たると、ふわふわの髪の手触りがなくなっただけでもありがたい。マックイーンは満足そうに笑みを浮かべている。

「どうかな？ おかしくない？」

立ち上がってぐるりと回って見せる。外面を気にする質ではなかったが、一応おかしくはないか聞く。

「もちろんとても似合ってます♪」

「はいっ、お姫様みたいですよ！」

二人とも肯定的な意見。お姫様か……悪い気はしないが、これからも慣れることはいだらう。

「そういえばお連れするって言ってたよな」

「はい、理事長室に連れてくるようにと」

「トレーナーさんの今後についてお話ししたいそうです」

今後。

どうやってトレーナーを続けるか。とかそう言ったことは早めに話し合っておきたい。理事長も即対応してくれるなんてありがたい。それはありがたいのだが……。

「どうやって俺を理事長室まで連れていくんだ？ 外見では完全部外者だし、不明なウマ娘なんて流石に問題だろ？ 学生以外がこのジャージ着てたら変だし……」

あいにく、女物の服を着る趣味はないので、他の服は持ってない。しかし、俺の不安をよそに、二人は満面の笑みを浮かべて。

「ちゃんと用意していますわ！ 変装すれば問題ないじゃないですの」

「そうですよ！ セレブのお忍びと言ったら、学園で私たちに敵う者はいないはずですよ！」

俺の今の心境を二文字で表すなら『不安』だ。

そもそも俺はセレブじゃないし、変装なんてしたらそれはそれで不審者だ。でもやる気の二人を止めるのも一苦勞だし、どっちにしろ学園には赴かないといけないわけだ。

理事長をこんなところに足勞いただくわけにもいかないし。

「時間もありませんし、着替えましょうトレーナーさん」

「はいっ、脱ぎ脱ぎしましょうねー？」

「いや自分でできるから」

にこやかに迫ってくる二人。俺は諦めつつも後ずさる。

「いえいえくおまかせください♪」

「そうですわ。優しくしてあげますので♪」

「やめっ」

.....

.....

.....

た。いつの間にか用意されていた姿見を見ると、それはそれは高貴なお嬢様が映っていた。

しっぽを隠せるロングスカートに、至るところにフリルがあしらわれた白いブラウス。大きな鍔の白い帽子。これは耳を隠す用途だろうけど。それにサンングラスって。もう完全にハワイ帰りの芸能人か何かじゃないですか。

「お綺麗です……トレーナーさん……」

「まさかここまで似合うとは……。私も驚きですわ……」

「さいですか……」

もはや何も言うまい。正直な話をすれば、ジャージの方がマシだったんじゃないだろうか。

「ここまで完璧に変装できるなんて……」

「はい、私たちの才能が恐ろしいです……」

この二人はもはやブレーキがぶつ壊れているようで。満足そうに頷きながら、ふんすと鼻を鳴らすマックイーンとダイヤ。姉妹かと思うぐらいに息が合っている。

「これじゃどう見ても違和感バリバリなわけだが……。ジャージでいいよもう。脱ぐからな」

「ええー!」

二人して声を合わせて残念そうな視線を俺に送る。

「せっかく……用意しましたのに……」

「そうです! 私たちががんばったのにつ!」

「うぐっ……」

二人とも顔を見合っとうるうると瞳を潤ませる。それを見てしまえば、謎の罪悪感が俺を襲ってくる。

「脱いでしまうんですか……?」

裾をちょこつと引つ張って、ダイヤは昔と変わらない視線を見せる。

「その姿とつても素敵ですのに……」

上目遣いにマックイーンは俺に問いかける。

「だあああ……もう！ 分かった！ 着て行けばいいんでしょー！」

俺はこの流されやすい性格を直したい……。これはいつの間にか、扱いやすいと思われてるのではないだろうか。やはりもう少し担当ウマ娘とは距離を置くべきだったか。

「トレナーさんっ！」

その言葉に二人は両方から抱きついてくる。そして俺を見つめる顔は満面の笑み。守りたいこの笑顔……。

「……」

距離は置けそうにもない。

……

……

……

暖かくなってきた風が駆け抜けるトレセン学園。

登校時間ということもあり、ウマ娘たちの黄色い声が聞こえてくる。なんとも微笑ま

しいことか。

「あの人ってもしかして超お金持ちとか……?」

「もしかしたら女優さんかもよ?」

葉っぱは深い緑に色づき、もう直ぐ暑い季節がやってくるんだろうなと思うこの頃。

「やっぱり? だってマックイーンさんとダイヤさんと一緒にいるもんね!」

「はう……綺麗な髪……。スカートの中で尻尾動いてるけど……なんで隠してるんだろ?」

「きつと王族のお忍びなんだよ……!!」

……ウマ娘の耳は良すぎか?

俺の耳には、帽子を被っているにもかかわらず、全部聞こえてくるんだが? 平常心

でいようとしても、無意識に尻尾は揺れるし。全部バレバレじゃないか……。

しかも目の前は、俺たちに道を作るように皆んな道の横に控えてるし。海を割ったモーゼか俺は……。

道の中心を歩いてるのが、俺とマックイーンとダイヤ。まあ、確かにこれでは貴族のお散歩にしか見えないだろう。おかげで誰も近寄ってこない。

「うーん、おかしいですわ……。こんなはずでは……」

「そうですねえ……。なんでこんなに避けられるんだろう……」

素性を聞かれないって点では成功してるだろうけど、なんとというか、別な意味で目

立ってしまった。

「とりあえず早く理事長室に行こう。これ以上目立ちたくない」

基本裏方でいた俺が、こんなに注目されることなかった。だからか知らないが、顔が熱くなつて直ぐにでも穴に隠れたいぐらいだ。

「そうですわね。登校の邪魔にもなりますし」

「ええ、早くいきましよう！」

「マックイーンさん！ ダイヤカーン」

早足でそこを去つていこうとしたところ、後方から聞こえる声。

「この声は……」

後ろを見ると、そこには駆け寄ってくるライスシャワーの姿があつた。

「ライスさんっ!？」

「まずいですよマックイーンさん！ ライスさんにはまだ……」

チームのメンバーにはまだ話していない事になっている。二人は間違いなく、ここで接触させればややこしくなると感じたのだろう。

ああ、ライスのこと話しておけばよかった。

「おはよう。マックイーンさん、ダイヤカーン」

「お、おはようございませうライスさん……」

「今日はお日柄もよく……」

二人の挙動が明らかにおかしい。なんとなくその言葉づかいにくすつと笑ってしま
う。

「ん……もしかして……お姉さま……?」

ライスは俺の顔を見上げて、首を傾げた。

「おはようライス。昨日はちゃんと眠れたか?」

「わあーっ、やっぱりお姉さまだ……!」

サングラスをとって微笑みかけると、ライスは満面の笑みで返す。驚愕するマツク
イーンとダイヤを尻目に、そんなやりとりに癒される。

「ど、どういう事ですの……?」

「説明してくださいっ!」

「いやそれがさ……。歩きながら話そうか」

ライスが俺の現状を知っている経緯について、歩きながら二人に説明した。

……

……

……

「まあそういう事なんだけど」

「そんなことが……またもや初めてを奪われるとは……」

「そんな……初めての併走をとられるなんて……」

「えへへ……」

なぜかマックイーンとダイヤは絶望の顔を見せていた。ライスはライスでもじもじと恥ずかしそうに頬を染めている。

「それにしてもお姉さま綺麗……。やっぱりお姫様だね」

「そりゃありがとうな……？」

キレイキレイと今日は何度言われただろうか。ライスも加わって賑やか？ な登校は今日の学園でのウマ娘たちの話題になるのだった。

それから俺たちは、足早に理事長用の裏口から校舎内に入り、ライスは用事があるからと別れ、マックイーンとダイヤとともに理事長室の扉を叩いた。

「歓迎！ 入りましたまえ！」

中からは声の高いロリボイスが聞こえてくる。その言葉に答えるように、俺は扉を開いて中に入った。

部屋の中には、微笑むたづなさんと、歓迎！ の文字の書いてある扇子を持ったちびっ子。

もとい、理事長が立っていた。

「感謝！ 二人ともよく護衛してくれたな！」

閉じて開けば扇子の文字が変わっている。毎回思うが、これの仕組みはどうなってるのだろうか。

「いえ、私たちはできる限りのことをやりました」

「理事長のお願いですから」

「おはようございますトレーナーさん」

「たづなさん。おはようございます」

互いに挨拶を交わし、理事長も云々とそれに肯く。

「うむ！ 体調に問題はないようだな！」

「はい、ご迷惑をおかけしてしまって」

「無用！ トレーナーを守るのも学園の義務！ この度は本当に申し訳なかった！」

理事長が正しい姿勢で頭を下げる。

「いやいや！ 事故は誰も予想できませんから！ 頭あげてくださいって！」

流石に頭を下げさせるわけにはいかないと、慌ててしまう。理事長は少なくとも悪くはないのだし。

「申し訳ない……アグネスタキオン君と話したのだが、君を戻す薬がいつできるかわからない。そして何より、彼女も生徒だ。研究だけというわけにはいかない……」

「……覚悟はしてましたけど」

とうとう聞いてしまった。覚悟はしていたが、実際言われるとなんと絶望感がある。いつ治るかもわからない。元に戻れる確証もない。少し諦め気味に、ははは……と笑ってしまおう。

「無念……しかし、研究の資金提供は惜しまない考えだ！ 希望を捨てずに待つてほしい！」

励ましてくれてるのだろう。ぴよんぴよんと主張する理事長はなんとも可愛らしいが。その言葉は虚しく響く。

「そして提案！ 君の成績は優秀であるため、トレーナー業務は続けてほしい！」

「と言っても俺は、住所不定、戸籍すらないウマ娘ですよ？ そんなの学園に置いて置くわけにはいかないんじゃないですか？」

「はははっ！」

理事長は小さい胸を張って笑い声をあげた。

「用意！ すでに戸籍や経歴の用意はできている！」

「はっ！」

思わず素つ頓狂な声を上げてしまう。無理もない。昨日の今日だったのだから。

いくら理事長がURAの運営までやってるとはいえ、そこまでの権力があるとは思え

なかった。

「協力！ 私の力と、メジロ、サトノ家の力があれば不可能はないのだ！」

「ええ、私も頑張りましたの。トレーナーさんはメジロ家からも高く評価されますので」

「サトノ家ですよ！ トレーナーさん以外ありえないって思ってます！」

驚いて開いた口が塞がらない。いやまさか、この三人が合わされば日本に敵はいないのか……。そんな家のご令嬢を二人も担当してるなんて、すこし背筋がぞくつとした。

「こほん、トレーナーさん？　そこでお願ひなんです……」

興奮した場を正すように、たづなさんは咳払いをする。

「トレーナーさんにはこれからウマ娘としての『名前』を考えてもらいたいんです」
「名前……ですか？」

それは流石に考えていなかったが、確かにウマ娘は随分と特異な名前を持って生まれてくる。文字通り生まれた時からなぜか名前を持っているのだ。

これは今でも解明されていない古来からの謎なのだが……一説には神秘的な何かが作用しているとも言われている。

「決まりはわかってますよね？」

「ええ、確か9文字以内でしたよね」

もするけど。

「そうですね……これ以上不安にさせるわけにはいきませんし」

風邪をひいたと言っただけで、これだけ掛かってしまう子もいるのだ。俺はマツクイーンを見て小さくため息をつく。チームの子たちは悪い子じゃないが、ウマ一倍共感力が高いというか……。

誰かを心配になって掛かりやすいところがある。

「準備はいいですね？ 私は書類の整理があるので同行できませんが……」

「準備ができてるかと言われると、どんな反応されるか分からないんで不安ですけど。たぶん……」

「たぶん……？」

「あの子たちを信頼してるんで大丈夫ですよ」

と言っても三人にはバレてしまったし、知らないのは後二人。マンハッタンカフェとゴールドシップぐらいののだが。

ゴルシに至っては、ちゃんと今日集まっているかも不安になる。昨日深夜に届いていたメッセージには

「ちよつと七大陸最高峰制覇してくるわ！」

という文字しか書かれてなかったし。しかし、俺が愉快な状態になってる時は必ずい

るし、今日も集まっていると願いたい。

「マックイーンさん。ダイヤさん。くれぐれもトレーナーさんをよろしく願いますね?」

「もちろんですわ! メジロ家の名にかけてお守りします!」

「私も任せてください!」

ふんすふんすと鼻息荒めに主張する二人。まあ、大ごとにならなければいいけど……。俺たちはチームへの説明のために、会議室へと向かうのだった。

会議室にて

チームアジエナ——

俺が昔研修を受けていた『チームハダル』の解体をきつかけに、その流れを汲んで作られたチームだ。

チームといつても、その活動が活発になったのは最近のことで、最初はマックイーンとの二人三脚（なぜかゴルシはずっといる）だった。

マックイーンが活躍するたびにメンバーが増えていき、いつの間にかステイヤーのチームと噂されるようになった。

そもそもハダルが中長距離を得意としていた事もあり、俺もトレーニングに関してはそれを中心に行ってきた。

国内の重賞。特にG1は中距離のものが多し。

例えば中央、トウインクルシリーズでのG1は中距離がジュニア・クラシック限定含めると10鞍あるが、マイルより短い短距離は二つしかない。ダートも同じように二つ。ゆえに一番注目の集まる中長距離が、トウインクルシリーズの花形と言えるだろう。

もちろん、短距離やマイルも面白い。

レース展開が早く、電撃の6ハロンを最高速度で走り抜けるウマ娘達の姿は見事なものだ。ダートも土煙舞うレース場の熱気がすごい。

……話がずれてしまった。とにかく、そんな花形ウマ娘を輩出するために作られた『ハダル』の流れを汲むチームが俺の指導している『アジエナ』なのだ。

そして俺は今、そんなチームメンバーが待つ会議室のドアの前で立ち尽くしている。

「トレーナーさん……？」

そんな俺を心配するようにマックイーンが俺の顔を見つめる。

「いやあ、柄にもなく心配というか……」

受け入れられなかったらどうしようとか。変な目で見られたらどうしようとか、そんな心配が頭を過ぎると、扉に手をかけたまま止まってしまった

「大丈夫ですよ。私たちのチームワークはその程度では揺るぎませんからね？」

「ダイヤさんの言う通りですわ。皆あなたを大切に思っているんですもの」

彼女達は確信を持った瞳で俺を勇気づける。

そうだ、ここまで一緒に歩いてきた子達じゃないか。そんな子達を信じずして、なにがトレーナーだ。

「そっくだよな」

意を決して俺は、扉を開けると部屋に入っていく。

瞳を閉じて深呼吸、再び瞳を開いて会議室内を見渡すと、ポツンと窓際に座っているウマ娘が一人。

一人？

「ライスとゴルシがない……？」

俺は思わず呟くと、窓際に座っていたウマ娘が少し目を見開いて、驚いた表情を見せる。ゆっくりと立ち上がると、こちらに歩み寄ってきた。

触れればどこまでも沈むような黒さを持ち、腰まで届く長髪。顔にかかった前髪はミステリアスに表情を隠す。

そんな少女の名前はマンハッタンカフェ。

学園でも相当な不思議ちゃんと言われているウマ娘だ。彼女は俺の目の前まで来ると、じつと顔を見つめて、微かに微笑む。

「トレーナーさんですね……？ おはようございます……」

「ん……？」

声をかけられれば一瞬思考が止まる。カフェは確実に『トレーナー』と発した。俺はこの姿になってから初めて会うはずなのだが……。

「え、なんで知ってるんだ……？」

この子の不思議さを見ていれば、未来を予知したとか、うちなる心を読むことができるとか言われても不思議じゃないが、俺は首を傾げるとカフェは頬を染めて言う。

「愛の……ちからです……」

「は？」

俺の両サイドで何か怒りの疑問符が聞こえたのは気のせいにしておこう。カフェもそう言つて顔を真っ赤にしている。

「冗談です……」

冗談で恥ずかしがるなら、言わなければいいのに。と思つたが言葉を飲み込む。

「タキオンさんに聞きました……。トレーナーさん……大変でしたね……」

そういえば、カフェはタキオンと親しくしてた様な気がする。カフェはタキオンが近くに来ると俺を遠ざけるから、実際親しいかは分からないが、俺以外と話するのはタキオンぐらいしか見たことがない。

しかし、だ。

「タキオンのやつ守秘義務とか知らないのか……」

タキオンのトレーナーにはすっかりしてもらわないと困る。俺の正体はバレるわけにはいかない……にしてもカフェにバレているとは。さっきまでの杞憂はなんだつたのだろうか。

「タキオンさんには……しつかり言っておきました……」

「そうかカフェ……手間をかけたな……」

彼女もきつと、タキオンに振り回されてきたのだろう。ほぼ俺と変わらない身長になった彼女の頭を、優しく撫で回す。猫のようにカフェは瞳を細めた。

「トレーナーさんっ！ 今はそんな場合じゃないのではなくて？」

ジト目で俺を見つめるマックイーン。そうだ確かにそれどころじゃない。あと一人伝えないといけない危険人物が残っているのだ。

「カフェ。ゴルシはどこ行ったんだ？ ライスもいないみたいだが」

「ゴルシさんは初めから来てませんでした……ライスさんはゴルシさんを探しに……」

なるほど、やはり来なかつたのか。予測はしていたが、会議室なんて面白くなさそうな場所にゴルシが来るはずがない。

「待つしかないですわね……でももうそろそろホームルームも始まりますし……」

「あう、もつとトレーナーさんと一緒にいたいのに……」

「私は……一時限目は自習なので……トレーナーさんとここで待つてます」

マックイーンとダイヤは恨めしそうな視線でカフェを見つめた。

「とりあえず、俺はカフェとゴルシを待つてるよ。今日は部室の方に集合してくれ。今後について話し合いたいからな」

今後について話し合いたいからな」

俺は二人に教室へ行くように促す。流石に俺のために授業を疎かにするわけにはいかない。

「もちろんですわ！ トレーナーさんくれぐれも危険な事はしないでください？」

「私たちが帰ってくるまでいい子にしててくださいいね？」

「俺は小学生か何かか……」

確かにウマ娘として生まれて間もないけど。それでも人としては四半世紀近く生きていたわけで……。今となつてはそう見える人なんていないだろうけど。

「ほらほら、遅れるぞ。ライスを見つけたら授業に行くように伝えといて」

「わかりました。それではまた午後……」

マックイーンは一礼すると、ダイヤと共に会議室を去っていった。

俺は思わずため息をつく。

「トレーナーさん……？」

カフェは心配そうに顔を見つめてくる。心配させまいとは思うが、24時間もたたないうちに色々起こりすぎて気疲れがすごい。ウマ娘の体は強靱だが、メンタルはどうしようもないらしい。

「ちよつと色々あつてな……。気疲れというか……」

「そう……ですよね……」

メンタル自体はそこそこ強い自信があったのだが、こんな変な状況に対応できる人がいたら是非とも代わってほしい。

「大丈夫……と言っても効果はないですよね……。でも安心してください……」

カフェはそういうと、すっかり細くなった俺の手をとり、ぎゅつと両手で包んだ。

「私たちはトレーナーさんを守ります……」

俺はなぜ、こんなにも優しい子たちに恵まれてるんだろうか。この子たちに優しくされる分、ちゃんと返せてるのか少し不安になる。

「ありがとうなカフェ。みんなに支えてもらえて俺は幸せもんだな」

「あなたと一緒に居れるから……私たちもきつと幸せものです」

カフェは虚空を見つめて。

「あの子もそう言っています」

「ああ、そこにいるのか。君もありがとうな」

カフェのいう『あの子』。カフェにだけ見えるお友達らしい。

もちろん俺には見えないが、きつといるのだろうと『あの子』にもお礼を言う。そんな言葉を言った瞬間、何だか部屋がすこし暖かくなった気がした。

「あの子も喜んでます……」

「それはよかった」

今思うと、カフェと出会うきっかけになったのも、この子のおかげだったな……。そんなことを思っていたら、カフェは俺の手をふにふにと弄る。

「そんなに面白いか？」

「面白いわけじゃないですけど……。本当にウマ娘になってしまったんだなって……」

「何か違うのか？」

未だに帽子をかぶっていて、ウマ耳とか尻尾は見せていないが、やっぱり人とは何かが違うのだろう。

「匂い……でわかります。すっかり変わってますね……。前も好きだったんですけど

……」

匂い。

人よりも優れた嗅覚を持つウマ娘は、微妙な違いも嗅ぎ分けることができるとは知っていたが……。俺は自分の腕の匂いを嗅いでみる。

「……わかんないな」

「自分では自分の匂いなんてわからないものです……」

そう言われると少し不安だ。

「変な匂いしてないか……？」

「そうですね……」

俺も臭いとは言われたくない。カフェに尋ねると、彼女は体を寄せて。

「ちよつ。かふえつ……」

「ん、くんくん……」

彼女は俺に抱きつくつと、首筋の匂いを嗅いでくる。くすぐつたさから俺は離れようとするが、彼女はそれを許さない。

カフェがこんなに積極的だったことはあつただろうか。二人きりの時も、隣に座つてきたりはしたが、感情をあまり表に出さない子だったし、スキンシップは他の子に比べて軽めだったはずだ。

やつぱり、俺がウマ娘になつたことで、距離に対するリミッターとかなくなつてるんじゃないだろうか。

「いい……匂いです……甘くて、優しい……すきですよ……う？」

カフェは耳をだらんと垂らしている。心底安心していると言つた表情を見せる。何とも可愛らしいが、顔を思いつきり胸に埋められるのは恥ずかしい。

「カフェ……」

「何ですか……？」

「そろそろ離れような？」

「……はあ」

ゆつくりと彼女の肩を押し、距離を取る。まさかため息をつかれるとは思わなかったが……。とにかく変な匂いはない。とのことで安心した。

「でも……」

「何か変なことがあったか？」

「ダイヤさんの匂いが強いです……気をつけてください……」

慌てて集中して自分の腕あたりの匂いを嗅ぐ。甘い匂い。確かにこれはダイヤから香っていた匂い。これが嗅ぎ分けられるあたり、俺も嗅覚が鋭くなってるのは間違いないようだ。

「気をつけてください……？ 私だからよかったものを……」

「ああ、気を付ける……」

気付かせてくれたのがカフェでよかった。俺の体からウマ娘の匂いがすると、みんな掛かりやすくなる。

競争心が強いウマ娘というのは、気に入ったモノに執着する。その対象が物品だったり、人だったり、ウマ娘だったりするわけだ。

自分の気に入ったモノに他の匂いがついているのを嫌がる側面もある。その状態は特にある時期ひどくなる。

彼女たちは人間と違い発情期があり、その時が一番執着心が強くなる。その時は薬を飲んで対処していると聞く。

俺も学術書で淡々と書かれていること以外は知らない。まさか本人たちに「発情期ってどんな感じ？」って聞く訳にはいかないし、デリカシー的にしたくないし。

とにかく、匂いについては気をつけなくては。

俺自体が敏感になったことは、ある意味アドバンテージと言えるかもしれない。体臭についてチエックできれば、みんなが掛かることも少なくともできるわけだし。

しかし、皆なぜ俺に執着するか分かりかねる。あまり面白い性格でもないと思うのだが……。

「他のメスウマの匂いなんてついて欲しくない……」

「カフェ？　大丈夫か？」

カフェは俯きながら、さっきからカフェが小さな声でぶつぶつと何か言っていた気がした。少し心配になって顔を覗き込む頃には、カフェはいつもの無表情に戻っていた。

「はい……えつと……、トレーナーさんそれ邪魔じゃないですか……？」

カフェは俺の被っている帽子を指差す。

ああ、確かに部屋に入っているのに帽子をかぶってるのも何かおかしいか。言われてみると、耳を動かせないからストレスを感じる。別にとつてもいいか。と帽子を取る

と、窮屈そうにしていた耳がびんつと立つ。

うん、開放感がすごい。

「はあ……へえ……」

カフェは俺の耳をみて、珍しく目を大きく見開いた。

「本当にウマ娘……。おそろい……」

カフェは俺の真似をして耳をびんつと立てて見せる。一緒に動きになんか恥ずかしいような気がしたが、微笑ましい姿に癒される。

「でも髪は私と正反対……。まるで太陽ですね……」

カフェは俺の結われている髪を撫でながらそう呟く。

確かに、この手の毛並みを持つているウマ娘は居ない。本当に数えるほどしかこのトレンセン学園にも居ないだろう。尾花栗毛はレースに出てくることも稀なのだ。

知ってる子だと、ゴールドシチュー。タイキシヤトルぐらいか……。

「俺は太陽って柄じゃないさ。カフェのその夜みたいなの毛並み好きだぞ？俺と並ぶと

夜空と月みたいだな……なんて」

少しくさい発言だっただろうか。カフェは案の定キョトンとしている。

「もう、貴方はいつもそうやって……」

からかっているように思われただろうか。褒めたつもりだったのだが。

カフェは耳を倒して顔をぷいつ、と逸らしてしまった。

「なんかすまん……」

微妙な雰囲気になってしまった。とりあえず話題をなにか変えなくては。

ズドン――

そう思った矢先、突然、会議室の扉が吹き飛ぶ。俺とカフェはそつちに注目した。

「ゴルシちゃん大登場！ パーティの会場はここかい♪」

なんでこのタイミングで登場してるんだ。突然現れたゴールドシップにあっけにとられる。

登山用のスポーツウェアに身を包んでいるところを見るに、まじでメッセージの通り山登りにでも行つてたのだろうか……。

「おーっ？ なんだなんだ？ おいおいシアトルコーヒーが絡まれてんぞ?！」

「マンハッタンカフェです……」

「なははーっ、こまけーことはいいのいいの。で、そいつ誰なんだ?！」

いつもなら本当に情報が早いんだが、こんな時に限って、ゴルシは何も知らないらしい。俺とカフェは顔を見合わせて、小さく頷く。

「ゴルシ。いつも扉を開けるときは静かにつて言つてるだろ?！」

「あ? 初対面で指図するとはいい度胸じゃねえかー。アタシに指図できるのはトレー

ナーだけって決まってるんだぜ？ しらねえの？」

「あの……ゴルシさん……。この方がトレーナーさんです」

その言い方は混乱を引き起こすだけだと思うのだが……案の定ゴルシは混乱したように変顔で首を傾げている。

「いやー冗談きついでココアさんや」

「カフェです……」

「こいつが？ トレーナー？」

ズンズンと歩み寄ってくるゴルシ。こいつこんなにデカかったか。と思っただが、俺が縮んでるのを忘れていた。

前に立たれると威圧感がすごい。誰かに見下ろされるなんて子供の時以来かもしれない……。

尻尾がだらんと下がって、耳を後ろ向きに倒してしまふ。

ゴルシは俺の瞳をじっと見つめて、少し驚く。

「その目。その強い目。いやまさか、お前ほんとにトレーナーなのかよ」

「目だけ見てわかるのか……？」

「つたりめーだろ。アタシがどれだけ見てたと思うんだよ。一心同体だろ？」

「それはマックイーンに言った言葉だと思うんだが……」

ゴルシは俺を足先から耳の先まで舐めるように見つめる。

「タキオンか……ゴルシちゃんのものに余計なことしやがって……でもまあ、これはこれでアタシ好みだ……」

小さく何か呟いたゴルシの目は、どことなく曇って見えたが、次の瞬間には思いつきりいつもの笑顔を見せる。

「うわっ!？」

ゴルシは俺を軽々と抱きかけると、思いつきり抱きしめて頬ずりしてくる。今の姿じゃ、ゴルシの方がお姉さんに見えてしまう。

軽々と抱き上げられて何だか情けない。

「こんな姿になっちまって……一緒に七大陸最高峰登頂しようって約束はどうなんだよ……!？」

「高尾山ぐらいで勘弁してくれないか……」

「ツインツインマッシュ高尾山……へへっ、何だよ……」

今なんか意思疎通ができていなかった気がするが……ゴルシは頬ずりすることを満足したのか、俺を地面に下ろして後ろを向いて小さく笑う。

「ガッツは無くなってねえみたいだな……ゴルシちゃん感動したぜ……!？」

ゴルシは一人で何か納得したようだった。もちろん俺は何も理解できなかったが。

「こうしちやいらねえ！ ちよつくら高所トレーニングいつてくるわ！」

「あ、いや、ゴルシ！ 授業！」

「ゴルシン！ ゴルシン！」

いやそれバクシンオーだろうと突っ込む前に、しっかりと扉を立てて走り去ってしまった。

嵐、いや竜巻が去っていったかのような室内。俺とカフェだけがポツンと残された。面白いやつなんだけど、絡むのにもカロリーがいるなあと、つくづく思うのだった。

「……行っちゃいましたね」

「……行つたな」

立ち尽くす俺たちを他所に、学園のチャイムは鳴るのだった……。

……

……

……

ゴールドシツプ Side

何だよ何だよ!! あーっ、くっそ、何だあの可愛いウマ娘はよーっ!

ゴルシちゃんのハートがズッキュンバッキュンしちやうじゃねえか……! しかもあの目、ゴルシちゃんが大好きなあの瞳。

(間違はなくトレーナーじゃなかよ！)

ああ、しかもあんなに綺麗なウマ娘になっちまって。ゴルシちゃんのハートが抑えられないじゃないか。抱き上げて抱きしめて、ドキドキした。

少し困った顔をするトレーナーは、絶世の美人で、このゴールドシツプ様にふさわしいウマ娘だ。いつものトレーナーも素敵だったけど、今の姿はもつといい。

身長差もちょうどいいじゃねえか。エスコートしがいがあるってもんだ。

あーあ、こんなに素敵面白ゴトが起きてるなら、ちゃんと集まればよかつたぜ。ゴルシちゃんがパーティに遅れたから、ダイヤやカフェの匂いがべつたりついてんじゃねえか。でも、思いつきり擦り付いて上書きしてやった！

そもそも、トレーナーの1番の担当はアタシになるはずだった。ずっと影から見つめて、隙あれば持ち帰る予定だったのに……マックイーンに先を越されちまったのは驚いた。

だけどそのおかげで難なくチームに滑り込めた。2着つてのは気に食わないけど、最終的に追い越せばいいって寸法よ。ゴルシちゃんは追い込み脚質だからな！

あのトレーナーの可愛い姿を想像しながら、アタシは学園を走り回る。あんな可愛いウマ娘、他が放っておく訳がないよな。

(安心しろよトレーナー)

このゴールドシツプ様がしっかり守ってやるからよ。

そしてレースでも魅了して、しっかりと釘付けにしてやるからな。ふふつ、面白くなってきたぜ！

最終的にはゴルシちゃんの嫁にしてやる！

「ゴルシちゃんの幸せ計画開始だなあ！」

俺の名前は

一時限目も終わって、カフェと別れた俺はアジエナの部室に籠もっていた。何か問題があっても困るから。という理由で実質上の軟禁を受けているような状態だ。

時間を持て余してしまうので、とりあえず溜まっている書類を片付ける。しかし、こんな状態になったのが上半期のレースが終わった後でよかった。

マックイーンの天皇賞・春の二連覇。

そしてライスの日本ダービーの出場も終わって、カフェは来年度からの本格参加予定だし、ゴルシは……好き勝手やってる。ダイヤは入ったばかりだからまだ調整中。

出場の決まっているレースのない今は調整時期なのだ。

これがレースの詰まっている時期だった場合、彼女達の負担にもなりかねない。トレーナーという立場上、それだけは絶対に避けなくてはいけない。

特にライスは大事な時期だ。

クラシック期の三冠路線というと、一生で一回しか参加できないレースが存在する。

皐月賞、東京優駿（日本ダービー）、そして菊花賞。ダービーから菊花賞までは少し期間がある。もちろん調整や成長の時期だから気を緩ませるわけにはいかないが……。

問題は山積みだ。

もう少しすると、夏の合宿時期も始まる。こんな体で合宿なんてついていくことができらなうか？

さらに理事長の言うように、戸籍が用意できたとしても、以前のようにトレーナーを続けられるのだろうか？ ウマ娘の体と人間の体じゃあまりにも違いが多すぎる。

「はあ……」

深いため息が部屋に響き渡る。

タキオンからは特に連絡もなく、戻る方法も分からないし時間がかかる。的なことを聞いてから、チームのメンバーにはなるべく見せないようにしたが、不安は残る。と言うかもはや不安しかない。

じつと机の上に置かれた『ウマ娘用』のジャージを見つめる。

あの後、その服装では動きづらだろう。とたづなさんが持ってきてくれたものだ。時間があまりすぎるものだから、書類整理も終わってしまった。ジャージを掴むと立ち上がる。

「着替えるか……」

最初の方は少しだけ興奮したが、自分の体と思うとあまり湧き立つものがない。着替えも彼女らに色々と触られて、ダイヤとはお風呂すら入り……なんか慣れてしまった感

はある。いや、慣れるべきではないのだが……。

俺は服に手をかけて脱ぎ始める。ぱさ、ぱさ、と床に着ていたものが落ちる音に続いて

ガチャ——

「あ」

「へ？」

俺は下着姿のまま扉を見ると、書類を持った女性の姿があった。

互いに固まること数秒——

「ごご、ごご！ ごめんなさいっ！ あの、すみませんでしたっ！ ノックもせずに！」

「あー、えつと……その、気にしてないので……扉を閉めてもらえれば……」

固まっていたため、女性は行動を完全に忘れていたのだろう。俺の姿は廊下から丸見えだ。さすがに恥ずかしいので、扉を閉めるように促す。

「あああつ！ ごめんなさいっ！」

ばんつ、と勢いよく扉を閉める女性。そして部屋に二人つきり。まずい状況かもしれない。

俺は不審ウマ娘。そして確か彼女はトレーナー。俺は脱いでるし、完全に変なやつだ。

「えっと、あの。アジエナのウマ娘さんですか……?」

「先に着ていいですか?」

「ああ! 私だったら、どうぞっ!」

答えに困る。何か答えなければ不審だし、答えても後で困るような嘘はつけない。俺はジャージを着つつ、内心答えを考える。

確か彼女は『桐生院』とか言ったか。トレーナーの名門家らしい。URAFファイナルでは彼女の担当したウマ娘と競り合ったこともあった。俺が表にあまり出ないだけあつて、交友関係は持っていなかったが……。

彼女がどこまで嘘に気付ける人間かも分からない。

こんなところで自分の交友関係の薄さが欠点になるとは思わなかった。彼女の少し赤くなった表情を確認しながら、小さくため息をついた。

「えっと、詳しいことはまだ言えないのですが……。お……私はアジエナのウマ娘ではありません」

とりあえず『俺』と言う言葉を封印して、言葉を始める。なるべく濁しながら、言えるだけの情報をつなげる。

「実はアジエナのトレーナーに少々厄介ごとがありました、その代わりで私がトレーナーとして参加することになったんです」

「ええっ?! トレーナーさんだったんですか? えっと、厄介ごととは……?」
びつくりして桐生院さんは書類を落としてしまう。

「すみません。理事長からまだ発表すると言われているんです。なので、えっと……
また後日、挨拶させてもらいますね?」

彼女の落とした書類を拾い上げると、彼女に渡す。そしてとりあえず申し訳なさそうにスマイル。

(納得してくれ桐生院さん……!)

「……わかりました」

一瞬考えた顔を見せるが、笑顔で俺に返して来る。うん、なんとかなったと考えよう。
「貴女にも事情があるんですね。でも、困ったら是非頼ってください!」

ギョツと手を握られる。桐生院さんの瞳はどこか輝きを持っているように見えた。

「貴女にとって私は『先輩』ですのぞ」

「え、あ、はい……」

……理解した。

彼女はどうかやら『後輩』ができたと喜んでいるようだった。たしか、俺と桐生院さんは同期のほぞだ。

三年間——

色々トレーナーが出たり入ったりしたが、彼女は名門つてこともあって、遠慮して話しかけてくる人も少なかったのだろう。きつと交友関係も多くはないのではないか？

「しかしウマ娘でトレーナーさんですか……。相当頑張ったんじゃないですか？」

「目標に向かつてがむしやらでしたから。頑張ったかと言われると……。それは貴女もですよね？ 桐生院さん」

「あれ、私のこと知ってるんですか？」

あ、やばい。

油断してたのか名前を呼んでしまった。彼女は少し驚いたように首を傾げる。とりあえず取り繕うように言葉を続ける。

「トレーナーの名門。桐生院家の桐生院葵さん。URAFファイナルでハッピーミークを決勝まで導いた敏腕トレーナー。知らないわけじゃないじゃないですか」

「そんな……。私はまだまだで……」

いやいや、と謙遜の言葉を顔を赤くして言う桐生院さん。うん、まだ話題を逸らすことが出来る。彼女はどうかやら褒められることに弱いらしい。

もう一押しだ。

「そんなことないです！ 私は貴女とこうやってお話しできる事、光榮に思います」
羨望の眼差しで彼女を見つめて、手を取ると。

「先輩……？ これからよろしくお願いしますね？」

魅惑のささやき。そして、少し上目遣いに訴える。

「は、はい！ なんでも聞いてください！」

桐生院さんは顔を真っ赤に、頷いて見せた。すまない桐生院さん。今は何も知らない後輩枠という事で、俺のことを許して欲しい……。

とりあえず話を逸らすことに成功。意外な話術の才能に自分自身驚いている。

あとは彼女がこの部屋を出て行ってくれば平穩が戻るのだが……ふと俺は、彼女が持っている書類を見る。

「そう言えば、桐生院先輩は何をしにここに……？」

「ああっ！ そうでした！ 今月の選抜レースの出走表を配ってたんです！」

そう言つて俺に書類を渡す桐生院さん。もうそんな時期なのか。とそれを受け取つて中身をぴらぴらと確認する。

「確かに受け取りました」

「もう少し話してたかったんですが……これを配らないといけないので……」

「今度ゆっくりお茶でもしてお話ししましょう？」

「そうですね。これからは会うことも多くなるでしょうし」

今にもスキップしそうなほど嬉しさが見て取れる桐生院さん。そんな彼女を見てる

と、騙してるようで少しだけ心が痛む……。

「それでは私はいきますね？」

「はい、これからまた今度。桐生院せんぱ」

「葵。でいいですよ？」

彼女は扉から出て行こうとすると、俺の声に一旦止まった。

「じゃあ、えつと……葵先輩」

「はいっ、ではまた！」

そして改めて俺の言葉を聞くと、彼女は部屋を後に行行った。ほぼファーストコンタクトで、下の名前で呼ぶほど仲良くなってしまった……。

どつと疲れが来たから、俺は部室のソファーに腰掛けて項垂れる。

「たづなさん……誰も来ないように手配してくださいよ……」

心の中の声が思わず出てしまったのだった……。

……

……

……

葵 Side

私はルンルン気分で廊下を歩いていきます。

書類を配っていたところ、なんと美しい尾花栗毛のウマ娘さんと出会いました。詳しくは話してくれませんが、トレーナーとして採用されたとか……。

最初は不審者かと思いましたが、彼女が嘘を言っているとは思いませんでした。嘘であれば理事長に聞けばすぐ分かることですし。

何より、信頼せずに交友関係を築けるはずありませんから。そして、私を慕ってくれる『かわいい後輩』なら尚更のことです。

葵先輩と呼ぶ声。

私を見つめる眼差し。

あの時感じた感覚は初めての感覚です。

「えへへ……」

あの可愛らしい声で『先輩』と何度も言われたことに顔が緩んでしまいます。きっとこれから大変なこともあるでしょうし、私が『先輩』として導いてあげなくては。

……そう言えばアジエナを担当すると言っていましたね。

「……………」

あのチームを……？

ターフの名優メジロマックイーン

日本ダービーで好成績を残したライスシャワー……。

さらに、デビューしてない子でも、模擬レースで名だたる現役ステイヤーを退けるウマ娘が所属してるチームを？

「もしかして私はすごく失礼なことをしてしまったのでは……」

いきなりチームを担当するとなると、彼女が新人だった場合、仰天な采配。まず有り得ないことだと思います。

私はチームをまだ持ててないのに、彼女はチーム持ち……もしかしてすごい経歴の持ち主なのでは……？

凄まじい先輩風を吹かせてしまったのでは……？

「ああああ……今度会ったら謝ろう……」

今までの気分の高揚は、一気に落胆に変わったのでした……。

……

……

……

ストレッチしたり、たづなさんが持ってきたお昼ご飯を食べたり。その他書類の整理までしつかり終わってしまった午後。

授業も終わり、部室にはメンバーが集まってきた。そして俺の目の前で、無言で何か牽制しあっている。

あのゴルシですらそうなのだから、異常事態だ。

「それで、トレーナーさんの名前ですが」

静寂を破つたのはマックイーンだった。彼女が言葉を発した瞬間、全員がそつちに注目して場が凍りつく。

「もう午後ですし、トレーナーさんも名前を思いつかないようですから、私たちも助力しようかと……皆さんいかがでしょうか？」

「「異議なし」」

俺の知らぬところで話が進んでしまっている。決定権はすでに彼女たちに委ねられてしまったのだろうか。

「まず、トレーナーさんの初めての担当ウマ娘は私ですし、我がメジロ家のトレーナーとしても有力視されていますから、トレーナーさんは『メジロ』の名がふさわしいと思いますの」

「はははっ、いい冗談だなマックイーン！ 流石のゴルシちゃんも笑っちゃったぜ」

ゴルドシップの言葉に、マックイーンは首をグイーツと傾げ、冗談なんて言つてないのだが。といった仕草を見せた。

「いえ、冗談などでは」

「やっぱり『サトノ』がついてた方がいいですよ？ だって最終的には私の家にくるの

ですし」

割り入るようなダイヤの発言。

「は？」

「んー？」

血管が浮き出るほど笑顔で怒っているマックイーン。なんですかー？ と言った表情を浮かべるダイヤ。一触即発だが、手を出さないとところが彼女たちは偉いと言えるだろう。

「……コーヒーの品種とかどうですか？」

「ライスはっ、えつと……この絵本のお姫様みたいなのがいいと思う……」

会議は踊る。されど進まず――

全員が全員、別々の意見を言い合い、誰かが退くという意思はおそらくない。

この場には譲歩という言葉がないのだ。そしてきつとその矛先は、いずれ俺に向くのだろう。

多分マックイーンが

『結局どれがいいかはトレーナーさんに決めてもらいましょう』

と言いついに違いない。

ここ数年付き合ってきたんだからわかる。俺ができることといえば、ここから退散す

ることだけだ。幸い皆は言い合いに夢中になっていいるから、まだ俺に注意が向いていない。

ゆつくりと、細心の注意を払いトレーナー室の窓を開けて、外に誰もいない事を確認する。

スリッパだが仕方がない。

すまないみんな。俺の名前はきつと自分が決めないとダメなんだ。特に『メジロ』や『サトノ』なんて恐れ多い。メディアになんと書き綴られるかわかったものじゃない。

部屋が一階で助かった。俺は部屋から抜け出して、なるべく誰にも見られないように駆け足で離れていった。

「で、トレーナーさん……あら？」

マックインが声を上げる頃にはその姿がなかった。

……

……

……

「うわあ、綺麗な人だ」

「生徒かな……。新入生とか……？」

「私知ってる！ 今日登校のときに……」

駆け足で走っていくと、流石に何人かのウマ娘やトレーナーに見られてしまった。あの空間の中で皆に問い詰められるよりは、マシと思いたい。

周りから聞こえる黄色い声を置き去るように走る。どこか静かなところはないだろうか。

学園だと校舎裏、体育館裏とかがいいだろうか……？ いや、むしろそういう所は、たまり場になりやすいか。正直まだ誰にも見られたくないのだが、外を走っている以上それは避けられない。

いつそのまま帰ってしまうか。たづなさんや理事長、チームメンバーには後で連絡すれば……。

「あれ？」

暖かな風が吹き抜けて、頬を撫でる感覚にハッと気付かされる。思考の海から引き上げられた意識は、違和感に気づく。

その違和感――

聴覚が鋭くなったからすぐに気づいた。

さつきまで聞こえていた、ウマ娘たちの声が聞こえなくなった。耳をぴくりと動かして澄ますが……何も聞こえない。

あたりを見ると、誰もいない。それも不自然なほどに。

「三女神像の前か……」

普段ならこの時間、下校する生徒やトレーニング前のウマ娘がこの辺りにいるはずなのだ。

静かすぎるが、それでいてなんだか温かい感覚も感じる。

違和感と不安からか、俺は無意識に、足で地面をずりずりと前掻きしてしまう。

とりあえず、気持ちを落ち着けるように瞳を閉じて深呼吸する。

深呼吸をすると、鼻腔をくすぐる懐かしい香り。

なんとも心地がいい。

心地よさに、意識が溶けるようだ……。

「あなたは、こちら側に来てしまったのですね」

「っ！」

瞳を閉じている時に、ふと聞こえる声に振り返る。そこには、白いワンピース……いや、ギリシャ彫刻が着ているような衣装の少女が立っていた。

耳と尻尾を兼ね備えた彼女は、おそらくウマ娘なのだろう。鹿毛で特徴的な大きな流星模様を持っている。

懐かしい香りは彼女からだった。

その表情は読み取りにくいだが、笑みを浮かべているように見える。

「えっと、迷子かな……? って、学園に迷子とかいるのか……?」

俺は彼女に近づこうとするが、歩み寄ってもその距離は縮まらない。白昼夢でも見ているのだろうか……?

「こちら側に来たのに、名がないのは不便でしょう?」

少女の優しい声は、まるで俺の心に染み込むかのよう。

「え? 名前……?」

少女とは思えない落ち着いた声に、聞き入ってしまう。どうしてこの少女が、俺が名前決めを悩んでいる事を知ってるのだろうか。眠気を感じるような心地よさが俺の思考を鈍らせる。

「そうですね……あなたは……」

そんな俺をよそに、少女は言葉が続ける――

スーッと心まで入ってくるような声色に、俺の瞳は虚に少女を捉える。

「星々を束ねる天球の王。あの子たちをどうかよろしく願いますね?」

まるで何かを届けるかのように、少女は俺に手を差し伸べる。

少女の手の中に光が灯り、そしてその光は俺と少女の間を漂う。それが俺の胸の中に入り込む。

「あなたは『レクスセレスティア』」

「っ！」

光が胸の中で弾ける。彼女が発したその名前に、頭痛を感じてふらつく。

そして、まるで心に刻まれたかのようにその名前が、昔から自分のものであったかのように感じる。

(俺は昔から、生まれた時から……)

「……さんっ！」

(『レクスセレスティア』この名前は俺の名前で……)

「トレイナーさんっ!!」

体を揺らされて俺はハッと意識をはつきりとさせた。俺を揺さぶる者の正体はマックイーンだった。

「トレイナーさんっ！ 大丈夫ですのっ!？」

心配そうな表情。周りを見ると様々なウマ娘たちが俺を見つめていた。

「大丈夫……だけど……えっと、俺は何を？ あの子は……?」

あたりを見回しても、俺に話しかけてきた少女の姿はない。いるのはマックイーンと、トレーニングに向かおうとしているウマ娘たちだけだ。

「ボーツと何にも反応せずに立ってたんですよ？ あの子……? 本当になんともあ

りませんの……?」

マックイーンは確認するように顔をぺたぺたと触る。頭を打ったとも思っただろう。

「いやなんともないよ」

自分で感じる体調の悪さはない。本当に心労で白昼夢でも見たのかもしれない。

しかし少女が言っていた言葉。

レクスセレスティア——

これは確かに俺の名前にちょうどいい。妙に納得いつてしまう。

まるで昔から自分の名前だったかの……ように……。

「あれ?」

そこで違和感に気づく。

その違和感にトクトクと心臓が強く脈打つ。对象的に、背筋が冷えるような血の気の引く感覚。俺はマックイーンの顔を見て、彼女の肩を両手で押さえる。

「俺の名前って……レクスセレスティアで合ってるよな……?」

いや、『合ってるはずがない』のだ。それなのに、俺は人だった時の名前を思い出せない。

「なにを言ってますの?? トレーナーさんは……という名前でしょう?」

「……誰だそれ」

思わず黙り込んでしまう。マックイーンの言った名前を聞いても、他人にしか思えないのだ。

マックイーンが嘘を言うはずがない。おそらく合っているのだろう。しかし、すつぱりと忘れてしまっている。まるでそんな人間、元からいなかったように。

「やっぱり頭を打ったんですのっ!？」

「そんなはずは……」

マックイーンが慌てるのも仕方がない。長年使ってきた名前を思い出せない。は大事故だ。

彼女はスマホを取り出して。

「じいやー！ 今すぐ病院に手配を！ トレーナーさんが!!」

マックイーンは呆然とする俺をよそに、捲し立てるように病院の手配をしていた。

すぐに学園に現れたメジロ家の使用人に連れられて、病院に行くことになるのだった。

……

……

……

「本当に異常はないんですのね？」

「はい、彼女は健康そのものですよ。脳波にもCTにも異常は見られません。血液検査も、内臓、心肺機能も全て問題ありませんよ。健康な『ウマ娘』です」

「そう……ですか……」

メジロの主治医の話を聞いて、マックイーンは胸を撫で下ろしていたが、納得はいいないようだ。

俺は体の隅々まで調べられて、あらゆる検査を受けた。疲れが溜まっているが、検査が終わる頃には、全くと言っていいほど頭痛もポーツとすることもなくなっていた。

「でも記憶の方はどうすれば……！」

「マックイーン」

不安からか医者に食ってかかろうとしたマックイーンを抑制する。これだけで検査して異常がないのだ。おそらく何を調べても今は無駄なんだろう。これ以上検査しても時間が無駄になるだけだ。

「体は大丈夫なんだ。名前以外はちゃんと覚えてる。今は様子を見よう」

「……わかりました」

納得いかない様子のマックイーンを連れて、診察室を後にする。

待合室にはたづなさんの姿が見えた。

「トレーナーさん！」

俺を見かけるなり駆け寄ってくる彼女。大声で名前を呼ばれば、俺は苦笑しながら、口の前に人差し指を立てて静かにのジエスチャーを送る。

「あつ、すみません……」

恥ずかしそうに頬を掻きながら彼女は話を続けた。

「検査の結果は……？」

「体はどこも問題ないです。ただ名前の方はまだ……他の記憶は大丈夫なんですけど……」

「そうですか……アジエナの子達にはしっかりと伝えておきました。みなさんついてくるって聞かなかったんですよ？」

「ははは……。ご迷惑をかけました……」

容易に想像できる光景に乾いた笑いが出る。慕われていることはもちろん嬉しいのだが。

「トレーナーさん。やはりしつかり入院して検査を……」

マックイーンが俺の手を引く。そして不安そうな表情で俺の顔を見つめた。

「出来る限りの検査はもうやっただろ？ これ以上できることはないし、マックイーンのおかげで体がどうもないことがわかった。今は良しとしよう」

「……ではせめて！ いつでも対応できるようにわたくしの家で経過観察を！」

「え？ メジロのお屋敷で？」

それは流石に申し訳ないし、恐れ多い。助け舟を出してもらえるようにたづなさんを見つめる。たづなさんは少し考えたように俯いた後に。

「そうですね。マックイーンさんの家ならば安心して任せられます」

「ちよつ、たづなさん!？」

まさか肯定されるとは思っていなかった。

「トレーナーさんは今日学園で目立ちすぎました。噂は学外まで広がっていて、マスクミも『謎のウマ娘』の情報をつかもうとしています」

本意でなかったとはいえ、学園のいろんな人に姿を見られたのが仇になったか。

しかしそこまで情報が広まるとは、本当にウマ娘関連の情報は早い。改めてトウインクルシリーズがどれだけ注目されているかを実感する。

「その点メジロ家のお屋敷ならセキュリティも完璧でしょうし、トレーナーさんの安全も確保できます。明日から休日ですし、戸籍の調整ができるまで……どうでしょうか？」

「

確かに、部外者絶対NGなメジロのお屋敷なら、俺の安全は確保できるだろう。たづなさんのその説明は理にかなっていた。

「俺なんかメジロ家にお世話になる資格ありますかね……？」

「……」

「……」

マックイーンとたづなさんは互いの顔を見ると、同じように呆れ顔をして。

「はあー」

二人は、ながーく深くため息をついてみせる。

「トレーナーさんにその資格がなかったら、この世界の誰も資格なしですよ」

「そうですわトレーナーさん。いきすぎた謙遜はいやらしいですわよ……？」

そういうった意図はなかったのだが。

メジロ家といえば、名門中の名門な訳で……前もお屋敷に行つた時に場違い感を覚え
た。そんな階級の出身じゃない俺にはもつたないほどこだ。しかし、背に腹は変えられ
ないか。万が一見つかつてマスコミに採まれるのも困る。

「……わかつた。世話になるよマックイーン」

「私は学園に戻つて理事長にその旨を伝えておきますね」

「お世話かけます」

「いえいえ、これが私の仕事ですから。では」

一礼して去っていくたづなさんを見送り、マックイーンと二人きりになる。

「では、車を手配致しますので、暫しお待ちを！」

どことなくウキウキしているマックイーン。ふんすふんすと鼻を鳴らして、尻尾が忙しなく揺れている。大丈夫かな……と不安を抱えながら、俺はしばらくメジロのお屋敷にお世話になることになったのだ。

メジロ家での日

夢を見た——

『私』はみんなに祝福されて生まれてきて、かの国のターフに立つて走る。

第4コーナーを回ると、『私』は後方から一気に7人のウマ娘を瞬時に抜き去る。

とても広いストライドで跳ねるように。

空を駆けるようなステップで。

風に揺れる尾花ススキのような金色の髪を見せつけて。

「まるで天馬スレイブニールだ」と称される末脚——

2位との差は4バ身。そのまま後方をちぎってゴール板を駆け抜けた。

ゴールインした瞬間、大歓声とともに迎えられる。

『一着はレクスセレスティア！ 天球の女王の驚異的な末脚！ 何者も彼女に届かな

かった!!』

『私』という勝者を告げる実況の声。

それに応えるように、『私』は人差し指を立てて、右手を天に突き上げる。まるでこの

ターフも、この空も全て『私』の物と言うように。

ウイナーズサークルには、母さんと父さんがいて……『私』の勝利を涙ながらに祝福してくれる。

それはとても幸せな時間で。

でも……。

心の中でそんな時は訪れることはない……わかっていた。

それでも私はそんな幸せな時間に身を任せて居たかった……。

……

……

……

俺は意識を覚醒させて、大きなあくびを浮かべる。

見つめる天井には天蓋が見える。

メジロ家に着いたあと、俺は疲れ切って沼に沈むように意識を落としてしまったのだった。心労からくる疲れだったのだろう。

ここはメジロ家のお屋敷。そしてここは俺にあてがわれた部屋。寮の部屋と違って、どこを見ても清潔で整理の行き届いているゲストルーム。天蓋付きのベッドに寝ている俺は、形容するならお姫様といったところか。

というか、本当にこんな王宮にありそうなベッドがあっただんな。物語の中だけの話

だと思っていた。

疲れ切っていたから曖昧だったが、起きて頭がすつきりすると、なんとも違和感を感じる。

「……俺はなんで着替えてるんだ？」

フリフリのワンピース系の服。いわゆるネグリジエといった感じの服装。

こんな天蓋付きのベッドに、尾花栗毛のネグリジエを着たウマ娘がいれば、さぞかし絵になるだろう。それが俺じゃなければの話だが。

まるで俺用にあつらえたかのようにピッタリの服。一体誰が着替えさせてくれたんだ……。

肩にかかる長髪を後ろに翻して、ベッドの縁に座る。動く揺れるベッドは凄くふかふかで、他人の家じゃなければ、あと数時間寝たい気分になる。

おもむろにベッドの近くに置かれたローテーブルを見る。髪を結っていた青いリボンが置かれていた。

この邪魔な髪を結ぶべきだが……あいにく俺は髪の手結い方をまだ覚えていない。さてどうしたものか。と思っていたところ。

ガチャ——

扉が開き、そこには見知った顔が立っていた。彼女は笑顔を見せると、部屋に入っ

てくる。

「お久しぶりです！ トレーナーさん！」

マックイーンから聞いたのだろう。彼女は俺をトレーナーと呼ぶ。

「ああ、久しぶりだねライアン」

なんとも元気なベリーショートの髪型のウマ娘。

彼女はメジロライアン。メジロ家のウマ娘で、マックイーンと死闘を繰り広げたウマ娘だ。素晴らしい未脚を持っている娘で、マックイーンの心の支えにもなってくれたライバルであり友であり家族。

俺とマックイーンを引き合わせてくれたウマ娘でもある。

学園では最近忙しくて、話す機会がなかったが、元気そうで安心した。

「元気そうで何より」

「元気だけが取り柄ですから！ えっと、話はマックイーンから聞いてます。大変でしたね……」

困った表情で頬をかくライアン。確かにこの状況は反応に困るよな。

人がウマ娘になったなんて、普通起こることじゃないのだから。

「この姿、ライアンは嫌いかい？」

俺は少し揶揄うように問いかける。

「いつ、いや！　とつてもかわいいと思います！　あっ」

ライアンは顔を赤くして、両手を大きく振って否定のジェスチャーを行う。相変わらず反応が可愛い。

「かわいいかあ……そっかそっか」

「その、意地悪も相変わらさずねトレーナーさん……。かなわないなあ……」

そっぽを向いてしまうライアン。俺が暇な時はこうやって話してたっけか。いつも通りの反応で、変わってなくて安心を覚える。

「しかし、起こしに来るならマックイーンだと思ってたよ」

「マックイーンがよかったですか？　へえ、そうですね……」

彼女は少しだけ寂しそうな顔を見せる。

「大人を揶揄わないの」

「えへへ！」

悪戯っぽい笑みを浮かべて、俺の隣に座るライアン。俺はワシャワシャとその髪を撫で直す。

「ふふつ、冗談です。マックイーンは昨日遅くまで秋川理事長と会議をしていたので、まだ寝てますよ。戸籍関係の話……っていつてました」

「それは迷惑をかけたな……」

「迷惑だなんて。トレーナーさんはメジロ家の支えになってるから、家族も同然なんですよ?」

それはなんとも嬉しい話だが、自分の教え子に手間をかけさせるって言うのも気が引ける。そんな苦勞をかけさせる事なく、マックイーンには走り続けてほしかったのだけだ。

「あたしだって、ドーベルもアルダンもパーマーも……。トレーナーさんを支えたいと思ってるんですから!」

「大袈裟だなあ」

気恥ずかしくて頭を掻いてしまう。

嬉しい言葉で、感情が揺さぶられて感動で涙が出てしまいそうになる。この体はやっぱり、そう言うところが弱くなってるのか……。

いけない。流されないようにしなくては。

「でもありがとうなライアン」

「えへへ、だからメジロの専属になる話。考えといてくださいいね!」

「マックイーンもそんなこと言ってたな……。考えとくよ」

「楽しみにしてますね!」

とは言ったものの、まだ俺にはやることがある。チームのみんなを放り出すわけに行

かない。それに『あの少女』にこんな名前をもらったのだから……。
数多^シ、星々^スを束ね^セる天球^スの王^ア——

トウインクルシリーズを走る彼女たちを見守るための名前なのだろう。

俺もその名前に恥じない働きをしなくては。

「あ、そうだった」

思い出したようにライアンは手をたたくと、開きっぱなしの扉に視線を向ける。

「ドーベル。隠れてないで入ってきなよ」

彼女が扉へ声をかけると、びよこつ。と耳だけ扉から出してこちらを伺っている。

「ドーベル……居たのか……。えっと、おはよう？」

俺も声をかけると、恐る恐る顔を半分だけ出してこちらを見つめてくる。顔は真っ赤にどことなく恥ずかしそう。緊張しているらしい。

ドーベルは極度の緊張症を持っている。

その緊張はどうかやら異性と関わる時に出てしまうものらしい。

俺も不意に話しかけた時に、思いつき蹴られて、10mぐらい吹き飛んだことがある。

やっぱり容姿はウマ娘でも、心は男な訳だし緊張しちゃうよな。

「ほら、ドーベル。確かめたいんだよね？」

「確かめたい……………」

「う、うん……………」

ライアンの声に恐る恐るドーベルは部屋に入ってくる。耳を後ろに向けて警戒している面持ちで俺に近寄ってきた。

…………蹴られたりはしないよな？

「や、やあドーベル。元気そうだね……………」

「えっと、その……………」

恐る恐る挨拶する俺に、ドーベルは言葉を詰まらせる。

初対面かと言うぐらい、互いにぎこちない雰囲気。

これは初めて会った時から変わらない。いま思うと全然関係が進展してない。

「っ……………」

「うえっ!？」

しばらくの沈黙の後、ドーベルはいきなり俺に抱きついてくる。飛び込むようにだったので、俺は困惑の声を上げ、胸に顔を埋めているドーベルを見ることしかできなかった。

俺もなんだか顔が熱くなる。

「ドーベル！ 混乱してるからってそれは……………」

ライアンも顔を真っ赤に彼女の行動に驚いている。しかし一番驚いてるのは俺だ。握手はおろか、少し触れただけでも蹴り飛ばされていたので、嫌われているのかと思ってしまうぐらいだった。

しかし今はどうだろうか。俺に抱きついたまま、うつとりとした表情を浮かべて、上目遣いに俺の顔を見ている。

「緊張はしない……トレーナーさんを嫌いなわけじゃなかった……よかった……」

「それは……なにより……？」

困惑する俺をよそに、ドーベルは安心したように耳を垂らして、尻尾を左右にゆつたりと振っている。

「……ドーベルは確かめたかったんですよ」

困った俺に解説するようにライアンは声をかける。

「確かめるって何を……？」

「トレーナーさんを見て緊張しちゃうのは『トレーナーさんが嫌い』なのか。それとも『男性だから緊張しちゃう』のか。その反応を見ると、後者だったみたいですね」

それでドーベルは『よかった』と言ったわけか。

しかし、ウマ娘になったことで、彼女との関係も改善できたと考えるとなんと……。よかったか悪かったかでいえば、よかった方なのだが釈然としない。

「なんとも複雑だけど」

ドーベルの黒い髪を、手櫛で梳くように優しく撫でてみる。

「んっ……♪」

小さく嬉しそうな声をあげる彼女。触っても蹴られない。うん、これはこれでよかったと言うことにはしておこう。

いつもクールに見えていたが、ドーベルは意外にも甘えん坊らしい。

しかしだ……。

「そろそろ離れてくれると嬉しいなあ」

流石に、こんな美少女に抱きしめられていると、恥ずかしいと言うかなんと言うか。

こう、精神的に反応してしまう。

「あつ、私ったら……その、ごめんなさい……！」

ばつ、と素早い動きで俺から離れるドーベル。俺は、ふうと心を落ち着けるようにため息をつく。

「さて、ドーベルも用事が終わったことだし……トレーナーさん？　一緒に朝食でもどうですか？」

恥ずかしがる俺たちの雰囲気吹き飛ばすように、ライアンはそう提案してきた。場の空気を変えてくれるのは嬉しい限りだ。

「せっかくだから頂くよ。っとその前に」

俺はローテーブルにあるリボンを掴み、目下の問題を切り出した。

「えっと、髪を結つてくれないかな……まだ慣れてなくて……」

いつか自分でできるようなろうと思いつつも、二人に頼る。

「そんなことなら、いくらでもまかせてくださいよ！」

「わ、私！ 部屋からセット用のブラシをとつてくるから！」

凄まじい瞬発力で部屋を後にしていくドーベル。

「そこまでしなくても……って、速いな……いい足だ……」

「やっぱり一番最初に見るのそこなんですわトレーナーさん……」

俺をあきれ気味に見るライアンだった。

……

……

……

華麗なるメジロ家の朝食は本当に優雅なものだ。しっかりとバランスが考えられているが、なんとも彩りが多く。野菜からタンパク質までそろっている。

しかしそれだけではない。

廊下の大理石の床や、絨毯もそうだが、この部屋の大きな机。窓からはしっかりと日

差しが入ってくるように設計された明るい部屋。装飾の隅々までしつかりと凝られている。

そんな雰囲気、さらに朝食に優雅さを添えてくれる。

ここまで付き合ってきたが、メジロ家の生活スペースまでは入ったことはなかった。

王族級の生活をしてるんだな。と呆気に取られている。

「俺、テーブルマナーとか知らないんだけど……」

極力、メジロ家とのイベントは拒否してきたツケが回ってきた気がする。前に呼ばれた社交パーティーにも、緊張から途中でお暇したし。

「いいんですよそんなの！ 好きなようにやってくださいー！」

ライアンはそう言うが、大量に並ぶ食器やテーブルの近くには給仕が控えている。庶民がいきなりこんなところに来るなんて、やっぱり拒否した方が良かったか。

「それに、マックイーンと一緒にいるんですから、これからこう言うことも覚えなないと。もつともな話だが、こう言う堅いのが嫌だからここまで拒否ってきたわけで。」

年貢の納め時か……。

俺はぎこちない動きで席につく。

ライアンは慣れている。と言う感じで俺の向かいに。ドールベルは俺の隣に座った。

「サポートするから大丈夫ですよ。セレスさん」

「……俺の名前を知ってるんだなドーベル」

「せっかくの新しい名前だし……。積極的に呼んでみようかなって……。いやでした？」

「嫌じゃないんだけどさ」

それ以外の名前も思い出せなく、しつくりこないわけだし。と口に出しそうだったがぐつと飲み込んだ。

それからドーベルにテーブルマナーやら何やらを教えてもらいながら朝食は進む。

この体になってから、身嗜みやこう言ったことまで覚えることが多すぎる。

実に自分がだらしない生活をしていたか。そんなところまで実感するとは思わなかった。

「凹むなあ……」

「どうしたの……何か嫌だった……?」

思わず声に出してしまったみたいだ。それを心配してドーベルは俺の顔を覗き込む。

「自分の生活の自堕落さがね。トレーナー業を優先すると手が回らなくなるなあって」

「トレーナーさんはやりすぎなんですよ。一番遅くまで明かりがついてるのはアジェナの部屋だって聞きますし」

ライアンも苦笑を見せる。周りには極度のワーカーホリックにでも見られているのだろうか……。

全てに対策してトレーニングを考えたり、レースを考えたりと、考えることも多いト
レーナーはみんなそうなんじゃないだろうか。

担当バ達をレースに出してしまえば、俺にできることは応援以外ない。だからこそ、
出走するまでに全力で応えるのが俺の使命なわけだし。

「もう少しだけ自分を優先してもいいんじゃないですか……？」

「そうだけ、トレーナーは頑張りすぎつからよ！一緒にカブトムシ取り行こうぜ！

インドネシアまでな！」

「俺はそう言うの興味ないしなあ……ん？」

危うくいつもの雰囲気の流れられるところだった。

「……なんでお前がいるんだゴルシ」

いつの間にかひとり増えている。そして何食わぬ顔で椅子に座っているゴルシ。

何気なく会話に紛れてくるから、気づかなかつたが……。メジロ家のセキュリティは
完璧じゃなかったのか？なぜか周りの給仕さんたちも平然としている……？

「やあ、ゴルドシップさん。久しぶり」

ライアンも何食わぬ顔で挨拶をするんじゃない……。ドーベルはまたか……みたい
な顔で頭を抱えてるし。

「どこから入ってきた……？」

「それは太古の昔からメジロに伝わる抜け道があつてな。その由来は石器時代の話になるんだけどよ。ああ、クロマニヨン人は元気にしてつかない……」

憂いの表情で窓の外を見つめるゴルシ。

黙つていれば美ウマ娘なのに、神は実に惜しいことをする。

頭がバグリそうになりながら、話を続ける。

「それはいいんだけどよ。ゴルシちゃんはこのを届けにきたつてわけよ」

ゴルシはドーンと現金輸送箱のようなアルミケースを机の上に置く。

鍵を開けるとその中には書類などが入っているようだった。

「ちよいと理事長に頼まれてな。流石に断れねえし」

俺はその中身を取り出して目を通す。

戸籍の証明書と社会保険関係の書類。『この国のウマ娘』であるすべての証明書が揃っていた。

パスポートすらもだ。

そしてその名前は『レクスセレスティア』になっていた。このケースに入っていたのは、一人のウマ娘をなす情報の全て。

「一晩で……？　嘘でしょ……？」

どれだけの権力をかざせばこんなことになるんだ。取り敢えず逆らわないようにし

ようとは思う……。

「いやあ、マックイーンも頑張ったみたいだしな！ 鼻が高いぜ」

なんでお前が威張るんだ。とツツコミを入れたくなる。ライアンやドーベルはメジロ家が協力すればさも当然。と言うような表情を浮かべる。

「カバーストーリーも入ってるからよ。しつかり覚えとけよってさ」

いったん俺はケースに全部の書類を戻し、蓋を閉めた。

「とりあえずこれは預かるけど……。ここ数日、理解に及ばないことが起きすぎて……」

「ははっ、運命だつて諦めな？」

立ち上がって隣に立つゴルシは、頭を抱える俺の肩をバンバンと叩く。

「あら、みんな揃って……。つて、ゴールドシップさん!? 貴女はなんで!？」

そうしているうちに、起きてきたマックイーンも合流すると、さらに賑やかになる。

俺はそんな騒がしさの中で頭を抱え続けるのだった。

……

……

……

ライアンとドーベルは用事があると言って別れ、ゴルシは相変わらずどこかに消えていた。

俺とマックイーンは部屋に戻ると、ベッドの上に書類を広げて確認していた。

とりあえずこの書類の中身を確認しないことには、来週からの復帰に支障をきたすからだ。

ゴルシ曰く、カバーストーリーなるものが存在するらしいが、書類の他に入っていた分厚い資料がそうなのだろう。

「えっと、なにになに……?」

まず戸籍を確認する。戸籍上の母は……。

「秋川やよいさん……。ん?」

秋川やよいという人物については俺もよく知っている。むしろ知らない方がおかしいだろう。

秋川やよいはURAの理事長にして、トレセン学園のトップでもあるいつも理事長と呼んでいるあの人だ。

まさか同姓同名というわけじゃないだろう。

「なあマックイーン? お前は昨日は理事長と会議したって言ってたよな?」

「はい、その通りですわ」

何か疑問でも。というような凜とした表情で首をかしげるマックイーン。

「じゃあこの戸籍の母。なんで理事長の名前になってるんだ?」

「ああ、そのことでしたら」

ぼんと手をたたいて、マックイーンは俺に説明を始めた。

「簡単にいうと、敵をなるべく作らないためですわ」

「敵を作らないためか……」

言いたいことは俺にもわかる。

身元が定かではないウマ娘が、いきなりG1ウマ娘の所属しているチームのトレーナーになるなんて、仰天の采配だからだ。

やつかみや嫉妬、不満といった感情が生まれるのは仕方がないこと。それを少しでも軽減したい。というのが理事長の考えなのだろう。

あの皆から慕われている理事長の娘ともなれば、口出しする勇氣のある者も少なくなる。もちろん、それで全部なくなるわけじゃないだろうが。

「なるほどな……。養子つてことにしてるんだな」

カバーストリーリーなる書類を読み進めていくと、俺は孤児のウマ娘で、その卓越した観察眼を買われて理事長に引き取られる。そしてトレーナーとしての教育を受けたと。

レースの出走はせずにトレーナーの道に進んだ。そのため、知名度は高くない……。

しばらくはメジロ家やサトノ家で修行を積んだ後に、特別推薦枠でトレーナー資格を取得。

俺とは似ても似つかないエリートコースであるわけだが、大丈夫なのだろうか？

「びつくりするぐらいの天才ってことになってるけど大丈夫か……？」

「トレーナーさんにびつたりじゃないですの」

「そうなのか……？」

満面の笑みで答えるマックイーン。

理事長が許可したのであれば、これ以上俺がとやかく言うわけにもいかない。

一晩でこれだけを揃えてくれたのだから、俺も来週にはトレーナーに戻るべきことなのだ。感謝するべきことなのだ。

しかし、俺がまさか理事長の娘になるとは。

「カバーストーリーの書類はしっかり覚えてください。との事でしたわ」

「そんなに長くないからそれは難しくないけど」

「その内容は限られた人物しか知りません。最終的にはそれも焼却処分しますので」

そう言いながら、マックイーンは俺の持っている資料を指差す。

こんな会話の内容のせいとか、どこかに潜入するスパイのような気分だ。まあ実際、トレセン学園に身分を偽って潜入することには変わりないのだが。

「先が思いやられるよ」

「あら、トレーナーさんはこんなことで折れてしまいますの？」

マックイーンは俺の隣に座ると、肩を寄せてくる。

「今までこれ以上の事も、一緒に乗り越えてきたでしょう？」

俺を安心させるように笑みを浮かべる彼女。今まで何度この笑顔に勇気づけられただろう。

俺は隣にいるマックイーンに軽く肩を寄せる。彼女は少し驚いた顔をする。

今まではこちらから積極的に、寄り合うことはしなかったからだろう。マックイーン
の驚いた表情は、すぐに恥ずかしそうな笑みに変わった。

「俺。弱くなったかも」

「そんなことありませんわ。貴方様は姿が変わろうと、わたくしのトレーナーで、大切な人ですから」

マックイーンは尻尾をペシペシと俺の尻尾に当ててくる。それに返すように尻尾を彼女の尻尾に重ねた。

「皆ちやんとついてきてくれるかな」

「当然ですわ。私たちは『天球の王の元に集った星』ですもの」

「……そっか」

間髪入れずに返してくるマックイーン。その言葉を聞いて安心した。来週からは心機一転、頑張つて行こう。と心に誓う。

「しかし、トレーナーさん？」

気分も落ち着いたところに、問いかけてくるマックイーン。落ち着いたその声は、どことなく怒気を含んでいるものだった。

「ドーベルにマナーを教わつたらしいですが……。前にわたくしがお教えしましたよね？」

言われてみれば、社交パーティーに無理やり連れて行かれた前に、そんなことを教えられたような記憶もある。でも随分と前だったから記憶が曖昧だ。

「わたくし、誠心誠意お教えしましたのに……。これはもう一度レッスンが必要ですわね……………」

「えっ?」

「貴女の新しい経歴のこともありますし、この休日はずっと『淑女』のためのレッスンをいたしますので、覚悟してくださいませ?」

俺は素早く立ち上がり。

「急用を思い出したので学園に」

「これが急用ですわ」

しかし、マックイーンにしっかりと後ろから抱きつかれて動けない。

なんなんだこの腕力は……。ウマ娘になつても鍛えたウマ娘には勝てないらしい。

「さあ、じっくりと教え込んで差し上げます」

「…………お手柔らかに」

マックイーンの怖いほどの笑顔の前に表情が引きつる。

これから行われるであろうレッスンに、俺は恐怖を覚えるのだった。

【おまけ】 トレーナーさんの設定

おまけにトレーナーさんの諸所の設定を。

本名： ■■■■

名前：レクスセレスティア Rex Celestia

毛並み・髪型：尾花栗毛で後ろで三つ編みに結っている。

身長：161cm

体重：増減なし

スリーサイズ：B84 W52 H80

・設定

理事長の養子であるウマ娘。

トレーナーとしての卓越した才能を認められて、急病のために入院したトレーナーに代わって『チームマジエナ』のトレーナーとなる。

幼い頃からトレーナーとしての英才教育を受けており、その能力はトレセンのトレ

ナーたちの中でも引けを取らない。

その実は、チームアジェナの男性トレーナー。

アグネスタキオンの『遺伝子を活性化させる薬』の実験事故によって尾花栗毛のウマ娘になってしまう。

その過去について知っているものは少なく、あまり話したがらないため未知な部分もある。

トレーナーの腕については、メジロマックイーンを天皇賞・春の連覇まで導いた敏腕トレーナーであり、複数のウマ娘を担当している。

しかし、表立って目立つことはせず、問題が起きた時ばかり（天皇賞秋の降着処分など）その姿がクローズアップされるため、周りのトレーナーやマスコミの評判は良くない。

基本的にはマックイーン的能力で勝たせてもらっている。と言う評価らしい。

担当ウマ娘は

- ・メジロマックイーン
- ・ライスシャワー
- ・マンハッタンカフェ

・ゴールドシップ

・サトノダイヤモンド

である。

■もし走者としてゲームで使えるのなら

【ミスカンサス・スレイプニール】レクスセレスティア

レア度：星3

初期能力

スピード スタミナ パワー 根性 賢さ 70 115 62 90 11

3

成長率

スピード スタミナ パワー 根性 賢さ 0 100 0 0 20

バ場適性

芝 ダート A C

距離適性

短距離 マイル 中距離 長距離 G E A A

脚質適性

逃げ 先行 差し 追い込み F D B A

固有スキル

星を司る天球の王 最終コーナーで後ろの方にいると、冷静な判断でコースを見極め速度を上げる

欧州産駒の馬をイメージしてるので、不良バ場が得意という意味も込めて、ダートは少し得意めになっています。

大体の能力はマックイーンとどっこいどっこいといったところでしょうか。中長距離、おそらくクラシックディスタンスを得意とするような感じですね。

成長率が賢さよりなので、癖がありそうですね。使う人はいるんでしょうか……。知り合いにそのうち勝負服のデザインでもしてもらおうかと思えます。

新しい日の始まり

一日が経過した昼下がりのメジロ家。

『私』はソーサーを持ち上げ、紅茶に口をつけて一口飲み込む。動作から高貴さが滲み出るほどに優雅な動きで味と香りを楽しんでいた。

音を立てずにそれを机に置くと、対面に座るマックイーンへほほ笑みを向ける。

「美味しい紅茶ですねマックイーン」

「……ええ」

眉をピクピクと動かして、マックイーンは『私』に不満げな態度を見せる。

「あの、トレーナーさん……?」

「どうしましたライアン。何かおかしいことでも……?」

首を傾げ、ほほ笑みを浮かべる『私』に、ライアンも顔を真っ赤にして言葉を濁らせる。『私』はマックイーンに言われた通りに、礼儀正しく動いているにすぎないのだ。

「マックイーンをいじめるのほどほどに……」

「……わかったよ。元はと言えばマックイーンがめっちゃくちやレッスンを詰め込んだの

が悪いんだからな？」

小さくため息をついた後、俺はいつもの口調に戻す。言ったように、元はと言えばマックイーンがいろいろなレッスンを詰め込んだのが悪い。

社交的なマナーから、はてはダンスのレッスンまで……。この休日は全てそれに注ぎ込まれた。もちろん休む時間もなかったぐらいに。

わずかばかりの抵抗をと、そのレッスンを全て飲み込んで『淑女』を演じて見せていたのだ。

しかしそれを見せつけられれば、マックイーンは、俺のいつもと違う姿に調子が狂ったようだった。

「悪かったよマックイーン……ちよつと意地悪すぎたな」

「その通りですわ！ まったく、トレーナーさんだったらからかい過ぎです……！」

「ふふつ、言葉まで『お嬢様』にする必要はなかったか？」

「だって、調子が狂うじやありませんの……完璧すぎて……」

あれだけレッスンを詰め込まれれば、誰でも完璧になつてしまふだろう。休む間もなくマナー、マナー、マナー。金持ちの家に生まれなくてよかった。と心底思う。

「ほんと、私たちよりお嬢様つて感じで……」

今まで静かに席についていたドーベルも、お世辞だろうが俺を褒めてくれた。

「マックイーンたちの指導も完璧だったからな。でもおかげで学園でもボロを出さず
できそうだ」

これだけお嬢様が板に付いていれば、学園でも完璧な『ウマ娘トレーナー』を演じる
ことができるだろう。そう言ったことを考えれば、メジロ家にお世話になったのは正解
だったかもしれない。

おそらく明日は顔見せになるから、忙しくなるだろう。俺から俺に引き継ぐわけだ
し、引き継ぎ業務はないにしても、いろんな人からの質問責めにあう可能性もあるわけ
だ。

俺はもう一度紅茶を一口飲んで、気持ちを落ち着かせる。

すぐくではないが、緊張している。言うなれば転校して初めての登校を言った
心境だろう。

まさかこの歳になって、こんなタイプの緊張をするとは思わなかった。

「マックイーン？ 明日からも頼むぞ？」

「それはお任せください。何があっても守りますので！」

マックイーンは椅子に座りながら、興奮気味に尻尾を振る。

俺にはおしとやかに、尻尾の先まで意識を集中して。と言っていたくせに、随分とは
したない姿を見せるじゃないか。

そうやってメジロ家の面々と談笑していた時だった。

♪

俺のスマホの音が鳴る。画面を見るとたづなさんからの着信だった。

「失礼」

俺は席を外して、廊下に出るとスマホを耳に当てる。

『とれ……さん……こんば……』

「あの、たづなさん声が小さいような……」

スマホが壊れたのだろうか？ 俺は耳からスマホを外して首を傾げる。

『トレーナーさん！ スピーカーモードにしてくださいっ！』

「あっ……」

精一杯の叫び声をあげたのだろう。鋭い聴覚は、小さなスピーカーからの声を捉えた。

そうだ、今の俺はウマ娘。本来、人の耳がある場所に当てたって聞こえるわけじゃないか。俺は慌てて、スピーカーモードに切り替える。

『トレーナーさんっておちよこちよいなんですね』

クスクスと少しだけ笑いを含んだ声で、たづなさんは言う。

「しっ、仕方がないじゃないですか！ まだ慣れてないんですから……」

カーツと顔が熱くなるのを感じる。耳の位置が違う事を理解しておくべきだった。

『ふふつ、直に慣れますよ。つと、そう言うことを言いたいんじゃないかなかった……』

話が逸れてしまったことを修正するように、小さく咳払いをするたづなさん。

『トレーナーさん。体調は万全ですか?』

「特に問題はないですよ。元氣そのものです」

『それを聞いて安心しました。明日からの業務は問題なさそうですね』

ウマ娘トレーナーとしての初日。

たづなさんの言葉でその事実を確かに感じる。

「マナーレッツスンで全然休めませんでしたけどね……まあ、ウマ娘の体は丈夫なのか、そこまで疲れも感じませんけど」

『今日はしっかり寝るようにしてくださいね。それと、明日の予定なのですが……』

いくつかの業務的な報告を受けて、メモアプリでそれを記録していく。

『明日の全校集会でトレーナーさんには、就任の挨拶をしてもらいます。考えといてくださいね?』

俺はどうやら就任挨拶的なのをしないといけならしい。

新たにトレーナーとなるものは、新年度に全校生徒の前で自己紹介をするのだが、俺は中途なので特別にその機会を作ってくれるのかなんとか。

ひっそり過ごしたい俺には、ありがた迷惑と言った感じだが……それもルールなので仕方がない。

「わかりました。他には？」

『その……実は明日から理事長が地方に出張になり、私もついていくので……』
「えっ？ 居ないんですか!？」

てつきり、初日はサポートしてくれると思っていたので、驚きの声を上げてしまう。

『でも安心してください！ 生徒会のみなさんにサポートして頂けるので』

「……ルドルフ達ですか。ならまあ」

一人のウマ娘の思い浮かべる。彼女なら大丈夫か。と胸を撫で下ろす。

俺がどんな状態かは、生徒会にも伝わっているらしい。彼女たちはすっかり者だし問題ない。むしろ心強い味方かもしれない。

「わかりました。なんとかやってみます」

『よろしくお願いしますねトレーナーさん』

挨拶を交わした後、俺は通話を切ってマックイーン達の元に戻る。少しため息をついて席に座ると、不安そうにマックイーンは声を上げた。

「どうしたんですの？」

「別に問題があったわけじゃないさ」

「電話の内容はなんだったんですか？」

興味津々にライアンが質問する。俺は軽いかいつまんで彼女達に説明した。

「出張なんて急な……。まあ、元から予定があつたんでしよう」

「生徒会がサポートしてくれるそうだ。ルドルフとは面識があるし、それはあまり心配してないんだけどな」

「セレスさんは会長さんともお知り合いなんですか？」

俺があまりに親しくルドルフを呼ぶものだから、ドーベルは興味を持ったように聞く。

「研修を受けたチームでちよつとね」

チームハダルで俺が研修を受けた時のことだ。

俺は一時期ルドルフのサポートを務めていたことがある。マックイーンを担当してからは、忙しすぎて疎遠になっていたが。

「へー、マックイーンのライバルって訳だね」

少し揶揄うようにライアンが笑うと、マックイーンは頬を膨らませてそつぽをむいてしまった。

「とにかく」

俺は部屋の雰囲気に戻すように大きく言う。

「今夜寮に戻って準備をしないとだし、マックイーン達も門限までには帰らないといけないだろう？」

「そうですね。外出届は今日の夕方までですし」

「明日からはまた忙しくなるけど、よろしくな」

明日からは忙しくなりそうだ……。

……

……

……

夜になり部屋に戻ってくると愕然とした。

何の変哲もなかった、一人暮らし独身男性の部屋はいつの間にか、20代の女性が使っているような部屋に変化していた。

ふわふわなベッドに、シックで高級そうな装飾のドレッサー。その中には女性トレーナー用の衣装と、トレーナー用のジャージ。下着一式などが入っている。

それだけはなく、お出かけ用の少し洒落た服も入っていた。あまりの部屋の変化に、頭がクラクラする。

なんと言うことでしよう。凄まじいビフォーアフターだ。

カーテンすらも全て変わっていたのだから、まるで狐につままれた気分だ……。

辺りを見回すと、リビングセットの机の上に、新品のスマホと一通の手紙が置かれていたのを見つけた。

俺は手紙を取り、それを広げて読んでみる。

『謝罪！ 君がこんなことになってしまったお詫びがしたくなかった』

達筆な文字で書かれた手紙を俺は読み上げる。

『贈呈！ 君は私の娘となったのだから、部屋の備品は母である私からのプレゼントだ！ 是非とも有効活用して欲しい！』

その文字にきよとんとしてしまふ。

自分は母親からプレゼントなるものを貰ったことはない。

物心ついて自分で考えられるようになった頃には、親父が一人で育ててくれていたし、親父が死んでからは知り合いの家を転々として、何とかこの年齢まで生きてきた。

そんな訳で家族のプレゼントとは無縁だったのだ。

「母親……か」

そう思うと、俺は初めて『母親』からプレゼントをもらったことになるだろう。

手紙の続きを読むと、最後に、いつもの口調と違う言葉が書かれていた。

『親愛なるセレスへ、私は君を幸せにしてあげたい。血縁の関係がなくとも、君は私の娘だ。だから私のことは本当の母と思って頼って欲しい。これから大変だろうが、共に歩

んで行こう。愛してるよセレス。私の娘……」

それを読み終えると、何とも言えない感情がこみ上げてくる。じんわりと胸を温かくする。そんな感情に、手紙を胸に抱えた。

「お母さん……」

今度会って、二人きりになった時はそう呼んでみてもいいかな。

俺はそんなことを思いながら、その手紙を大切に封筒に戻して、新調されたタンスに大切に片付けるのだった。

……

……

……

なんと清々しい朝だろうか。と言ってもまだ朝も早く、日が昇る寸前。俺は教わった通り、シャワーも浴びて、スキンケアも、髪やしつぽのケアも終えた。

美しく煌めく尻尾に、我ながらうっとりとしてしまう。

髪もおさげに結って、いつもの姿の完成だ。

あとはパジャマからトレーナー用の服に着替える。

白のブラウスに、黒系のベスト。ビジネスライクな服装だが、日本人離れた容姿と、素晴らしいまでのプロポーションのおかげで、見る分にはモデルそのものだ。

俺は鏡で胸元のリボンを整えて、王冠を模した模様の耳キヤップ^メをつけて。
我ながら完璧な出来だ。

「ん、今日もかわいい」

姿見に対してウインクしてみせる。

もちろん同じように鏡のウマ娘もその仕草を見せる。

「……」

しかし、そこで俺は違和感に気づく。

「あああつ……」

がつくりと膝から崩れ落ちて、地面に両手をつける。

何ノリノリになつてゐるんだ。何が今日もかわいいだ……。

可愛い服装やリボンや耳の飾りに何ときめいてるんだ。

この姿でいると、男としての要素が消えていく気がする。

……でも、着飾るのも悪くない。と思つてる自分もいる訳で。いや、こんなに恵まれた容姿ならそう思うのも仕方ない事だ。

大丈夫だよな？ 戻つたとき女装癖として残らないよな……？

「不安だ……」

しかし落ち込んでもいられない。数分だけその落ち込みにひたると、頬をポンポンと

叩いて立ち上がる。

「今日のスケジュールを確認しないと……」

俺はスマホを見ると、まずは溜まっているメッセージアプリを立ち上げる。

ほとんどはチームメンバーの伝えたいことや雑談。たづなさんの業務連絡などなどが書かれていた。

まずはたづなさんからのメッセージを読む。

内容はスマホはこれを使わずに、理事長が用意したものを使ってほしいとの事だった。おそらく手紙と一緒に置かれていたスマホのことだろう。

身バレを防ぐための措置らしい。

「おお、アプリや連絡先まで入ってる……」

新しいスマホの電源をつけて電話帳を確認する。

チームメンバーだけではなく、たづなさんや理事長のプライベートな番号まで追加されていた。落とさないように気をつけなくては……。

あとは、今朝は理事長室ではなく、生徒会室へ向かってほしいとの事だった。たづなさんのメッセージはそれで最後だ。

次はメンバーのメッセージを見る。

マックイーンとダイヤは、今朝は用事で来れない……と。毎朝世話になるわけにもい

かないから、これは大丈夫だと返信する。

俺はメッセージを見ながら、理事長が用意したであろう『ニンジンジュース』を冷蔵庫から取り出してコップに注いだ。

カフェはいいコーヒーを手に入れたので午後と一緒に。との事だったので了承する。ニンジンジュースを飲みながら返信作業を続ける。

ライスは今日からのトレーニング楽しみだと書いてあったので、俺も楽しみだよと返信。

可愛らしい言葉に癒やされながら、飲み終えたコップをシンクに置いた。

ゴルシはカツオの一本釣りに目覚めて、その奥深さを一万文字ぐらいの文章で書いてあったが、最後の方が切れてたので寝落ちした模様。

読み物として面白いから結局最後まで読んでしまった……。返信は保留。

あとは今日のスケジュールを確認して、前のスマホの電源を切り、新しいスマホをポケットに入れた。

「つと、くんなもんか……」

そんな朝のルーチンワークを終えると、冷蔵庫から昨日の夕食の残り物を取り出して温めて食べる。

残り物と言っても、マックイーンが用意してくれたものだ。いつもの適当な食事より

はしつかりしている。

時計代わりに、随分と大きくなってしまった薄型のテレビの電源を入れる。

理事長……。お母さんが随分と奮発してくれたらしく、こんな高級なもの貰っているのかと罪悪感も覚える。

食事を終えて、つけっぱなしのテレビの時計を見ると、すでに登校時間となっていた。テレビの電源を切る。

俺は大きく深呼吸をすると。

「そろそろ行くか……」

気合を入れ直して、昨日の夜のうちに用意したカバンを肩にかける。

玄関に向かって、女性物のローファーを履くと。

「大丈夫……上手くやれる。まずは生徒会室へ……」

俺は新たな生活へと扉を開けるのだった。

【人物設定】

登場人物の話まとめ1

■ チームアジエナ

・レクスセレスティア（トレーナーさん）

この物語の主人公で元人間のトレーナー。アグネスタキオンの実験事故でウマ娘になっってしまう。

現在は理事長の娘で、トレーナーとしてトレセン学園に採用されたことになっている。

めんどくさがりではあるが、観察眼とトレーナーとしての指導の力は非常に高い。

人の時はメディアにあまり姿を出さず、何か問題があったときだけ率先して説明に出ていることで、あまりメディア受けが良くない。

・メジロマックイーン

トレーナーと三年前から組んでいたウマ娘。かのメジロ家の出身。

トレーナーと一心同体で頑張ってきた結果、天皇賞・春連覇という偉業を成し遂げる。自分が引退したあとは、メジロ家の専属トレーナーになると疑わない。

愛がすごく重い。

・ゴールドシツプ

かなり弾けている言動を見せるウマ娘。黙ってれば超絶美人。走る姿も美しい。

チームのムードメーカー的な立ち位置だが、気が向かないと練習にこないし、現在はデビューを保留中。時々トレーナーを拉致って遊びに行く。

愛がかなり重い。

・ライスシャワー

おどおどした雰囲気を見せるウマ娘。トレーナーのことを本当の兄……今は姉のよう慕っている。おどおどした自分を変えてくれるのはトレーナーしかいない。と彼のスカウトを受けることにした。御伽噺が好き。

最近ではトレーナーがウマ娘になっても自分に勝てないことを知ってしまった。

愛がそこそこ重い

・マンハッタンカフェ

不思議ちゃん。いつもお友達と話している。

みんなに気味悪がられていたが、トレーナーが見えないはずなのに『お友達』を自分と同等に扱ったことが嬉しくて、彼の下で走ることを決めた。

あの人だけが自分を認めてくれると、ご執心の様子。

いつの間にか部屋にいることがある。

愛はそこそこ重め。

・サトノダイヤモンド

かのサトノ家のウマ娘。学園には入ったばかりだが、かなりの実力を持っている。マックイーンの追っかけをしていたため、トレーナーのことは小さい頃から知っていた。

トレーナーが昔してくれていた肩車やおんぶをしてくれないことが不満。急成長したから仕方がないが。

最終的にはトレーナーが自分の家に来てくれると思っている。

愛はまだ軽め（自覚してないだけか……？）

■その他

・駿川たづな

トレーナーと数少ない交友関係を結んでいる人。

トレーナーの過去までは知らないが、酒の席でぼろっと漏らしたことを心配して、ずっと友人関係を続けている。思いつき言葉には出さないが、トレーナーに特別な感情を持っている。トレーナーがウマ娘になってからはその感情を表に出すことも多くなったとか……。

めちやくちや足が速い。あと愛も重い

・秋川やよい

トレセン学園および、URAの理事長を務めるちびっこ。子供……と言われるが実年齢は不明。この物語では、トレーナーを養子に迎えられるぐらいの年齢……だと思われる。何故かそう言った話が表に出ないので、知ると殺されるのでは？と言われている。

実は海外に行った母親に代わり、理事長を務めているのだとか。
素晴らしい愛情の持ち主。

・桐生院 葵

トレーナーの名家、桐生院家の生まれ。

何にでも忠実で、基本を忘れない性格。

安定した育成で、ハッピーミックと共にURAファイナルに辿り着いた敏腕トレーナー。

セレスの正体を知らないため、彼女を『すぐく努力して採用されたウマ娘トレーナー』
と知っている。ファーストコンタクトで先輩風を吹かせたことが黒歴史らしい。

皇帝との再会

朝日が差し込むトレセン学園通学路。

まあ通学路と言っても、寮のある敷地と道を一本だけ隔て、学園に通じているので、駅から歩くとかそう言った類ではない。

しかし、学園の敷地は広い。校舎までたどり着くのは一苦労だ。

直線の桜の並木道が校舎まで続いている。

登校時間だけあって、周りを歩く生徒たちの数は多い。しかし、俺はもう恐れる必要はない。

今日から正式にここのウマ娘トレーナーとして採用されてるのだから。もう姿を見せつけても問題ないのだ。

問題はないのだが……。

「ぎゃー、ぎゃー、ぎゃー、ぎゃー、ぎゃー……！ お姉さま……！」

「ええ、ぎゃー機嫌よう」

「きゃーっ！ 挨拶してもらっちゃったー！」

……俺はいつから、お嬢様学校のお姉さまになってしまったのだろうか。

さつきから、あり得ないほどの視線と、声かけに晒されているのだが、その全てが創作物にありそうな『お嬢様の挨拶』なのだ。

きつとみんな、俺のことを、どこかのお嬢様と勘違いしてるんだろう。

マックイーンに教わったように、尻尾の先まで意識を集中して、お上品を装って歩いていたせいかもしれない。まさか、今更変えるわけにもいかないのです、このまま突き通すしかなくなりました。

羨望とか、好奇の目に晒されるとはまさにこの事。平常心を保つしかない。と歩みを進めていく。

「お姉さまーっ！」

そんな黄色い声に混ざって聞こえてくる声。

振り向くと、とてととと走ってくるライスの姿を見つける。その顔は満面の笑みだ。

「あら、ライス。おはようございませす」

「……？」

「ライス……？ どうしたの……？」

「はわあ……おひめさまだ……」

ライスはキョトンとした表情をした後に、カーツと顔を赤く染めた。その理由はきつと、俺の口調に慣れていないからだろう。

「……あのな、一応外ではこういうキャラで行こうかと思つてき。その方がバレにくい
だろ?」

ライスの大きな耳元で、そつと小さくささやく。彼女は納得したように、うんうんと
頷いた。

「とつても素敵だよ! お姉さま!」

「ふふつ、ありがとう」

ライスの頭を撫でると、なぜか周りから歓声が上がる。舞台の主役になったようで恥
ずかしい。

とりあえず、ここから離脱しないと身が持たない。

「行きましようか。ここに居たら皆さんの登校の邪魔になつてしまいますし」

「そつ、そうだね……」

ライスも周りの視線に気づいたのか、その耳を垂れさせて警戒しているようだった。
彼女と一緒に足早にその場所を離れる。

「どうやら就任のあいさつをしないといけないみたいなのよね……」

歩きながら、気が重い。といった感じを見せ付けるように言い放つ。

「全校集会でだよね……? お姉さま大丈夫? 緊張しない?」

ぴつたりと隣にくつついて歩くライス。

俺の歩幅にあわせていたせいか、歩き辛そうにしていたので歩幅を合わせる。

「緊張はするけど、まあ、みんなやることだものね」

「ライスが手伝えたらなあ……」

「気持ちだけでもらっておくわ。一生に何回もやることではないし……でも」

「でも……？」

「さつきみたいなのに、好奇の目で見られるのは、一生慣れないかも」

「どこぞの百年に一度の美ウマ娘とか、雑誌に載ってるモデルとかはなぜ平気なのだろう。鋼の心臓でも持つてるんだらうか。」

俺はきつと、一生慣れることはないだろう。

「ライスが守るから安心して？」

「それは頼もしいわ。本当であれば、私がライスの騎士様になるべきなのだけれど」

「いや、お姉さまはどう見てもお姫様だよ」

ぼそつ、何かを呟くライス。

「ん、何か言ったかしら？」

「ううん！ なんでもないよ？ほんとだよ？」

他愛ないやりとりをしているうちに、校舎の近くへとついた。

ライスと一緒にいたおかげか、あまり声をかけられずにすんだので助かった。一人

だったら、もつといろんな娘に声をかけられていたかもしれない。

ライスが騎士様というのも、あながち間違つてないかもしれない。

「じゃあライス。私は生徒会室に向かわないといけないから」

「うんっ！　また後でね？　お姉さま！」

ライスはそういうと、尻尾を揺らしてとととと駆けっていく。なんであんなに一動作一動作が可愛いんだろうか。

いつまでもその後ろ姿を見守っていたいが、そういうわけにもいかない。

「さてと、行きますか……」

俺は足早に職員用出入口へと向かうと、なるべく声をかけられないルートを選択して、生徒会室へと向かう。

わざと主要部から一番遠く、人が通りにくい階段を上がり、人がいたら避けながら生徒会室の扉の前へと着く。

ここ数年、会いに来れずにいた『この部屋の主』に、一体どんな言葉をかければいいのか考え、小さく深呼吸して、扉を軽くノックする。

「どつどつ」

凜々しい声が、しつかりと聞こえた。俺は部屋へと入っていく。

前に来た時と一寸たりとも変わらない生徒会室。あの女帝様が整理しているから当

たり前か。と思いつつ、椅子に座って笑みを浮かべているウマ娘と目があつた。「随分と可憐なお客様だね」

周りを見回すと、彼女以外はいないらしい。

「エアグルーヴは集会の調整を。ブライアンも今日は珍しく手伝っている」

俺の視線の意味を感じ取ったのか、彼女は聞いたわけでもないのに答える。

ゆつくりと立ち上がり、こちらへと距離を詰めてくる。

「それで可憐な尾花栗毛のウマ娘さん。私に何かご用かな？」

あまり変わらない身長になってしまったせいかな、彼女の視線をダイレクトにうける。

「やめろよルドルフ。話は聞いてるんだろ？」

俺はそんなやりとりで、腕を組んでジト目で彼女を見つめた。

彼女の名前はシンボリルドルフ。

もはや説明不要なほどの名バだろう。

彼女の功績は『無敗三冠』

そして前代未聞の『7冠』までを達成している。

10人に聞けば10人が名バと言うであろうウマ娘が彼女なのだ。

「ふふ、姿は変わっても、相変わらずだねトレーナー君」

いつもの凛々しい姿からとは思えないほどに、可愛い笑みを見せるルドルフ。

「ルドルフも相変わら」

「ルナ」

言い終わる前に、ルドルフは俺の口到人差し指を立てる。

「……ルナも相変わらずで安心したよ」

ルナとは、彼女が信頼している人にだけ呼ばせている名前だ。

どうやら、彼女が小さい頃に呼ばれていた名前で、その髪の日日月のような流星に由来するらしい。

この名前を呼ぶことを許されているのは、この学園でも、ハダルの先輩と俺ぐらいらしい。

「だいたい2年ぶりぐらいか？」

「正確には2年と48日ぶりになるね」

そこまで正確に覚えているとは、少し背筋が寒く感じる。

「どうだ？ ドリームトロフィーは、やっぱり楽しいか？」

「ああ、みな名バばかりだ。とても心が踊るよ」

彼女は学園にいながら、トゥインクルシリーズからプロリーグに移籍している。

競争ウマ娘は基本的に、トゥインクルシリーズで成績を残し、衰えが緩やかな場合プロ

リーグへと進む。

それがドリムトロフィーリーグなのだ。

「しかしだ……」

「んっ……」

ルナは俺の顎に手を添えて、クイツと持ち上げて顔を近づける。いわゆる『顎クイ』と
言うやつだ。

まさかこんな事されるとは思っていなかった。

そして、澄んだその瞳を見てしまえば、かーつと顔が熱くなる。

ダイレクトに彼女の匂いを感じて、思考が乱される。

今までは絶対にされなかつた行為に、俺は顔を真っ赤にしてしまう。

「凄凄切切。ゴールに君がいないレースは実に寂しいよトレーナー君」

「ルドルフっ……」

「ルナ」

「るな……やめろよからかうのは……」

吐息が絡まるほどの距離。

彼女から視線を逸らそうとするが、離してはくれない。

恥ずかしさからか、耳を垂らしてしまう。

「私はてつきりプロリーグに行っても、君がハダルを引き継いで、私と共に来てくれると

思っていたのだが……」

ゆつくりと手を離すルナ。ようやく解放されて、俺は彼女に背を向ける。

「俺には勿体ないよ。先輩の威光を借りるのも、皇帝の隣にいるのも」

「行き過ぎた謙遜は良くないよトレーナー君。君がいたから私は怪我から立ち直れたし、ハダルのトレーナーも救われた」

「あれは……がむしやらだったただけで」

2年間――

ハダルで過ごした2年間。俺は最終的にはルナの補佐的立ち位置にいた。

怪我して焦っていた彼女の治療を補佐して、彼女の成績不振で荒れていた、先輩を殴り飛ばして立ち直させたりと……。

今では考えられない様な、熱い事をやっていたのだ。

「そのがむしやらに私は惹かれたんだよ」

ルナは後ろから俺を抱きしめる。

またもや突然のことに、耳がピンつと立ってしまった。

背中に感じる温かさ。体の柔らかさに無意識に尻尾が揺れる。

「君は私の威光ではなく、自らの力でウマ娘達を育てようとした。結果、ターフの名優や素晴らしいウマ娘達を発掘してきた」

耳元で囁くルナの声はどこまでも優しい。

「結果は示せた。もう私の元に戻ってこないかトレーナー……。いや、セレス？」
なんとも甘い誘いだ、俺はルナの手を振り解いて、少し離れた。

「まだ」

俺にはやるべきことがあるんだ。

ルナの誘いは嬉しかったが、俺はそれを受けるわけにはいかない。

「やるべき事は終わってないんだ。俺の新しい名前は、星を司る天球の王レクスセレスティア」

ルナに向き合って、確かな眼差しで見つめ返す。

「俺のもとに集ってくれた星たち。彼女たちが輝ける手助けをしなくてはいけないんだ」

あの子達の信頼を裏切れることは絶対できない。

「だから……すまないルナ」

俺の言葉に目を見開くも、瞳をとじて満足そうに笑む。

「君は今……いや、生まれながらにして王なのだね」

「彼女たちが幸せになる手助けをしたいだけのお節焼きだよ」

ルナは少し考える仕草をすると、俺の頬に手を添えて。

「トレーナー君は私の夢を覚えているかい？」

「すべてのウマ娘の幸福……だったか？」

ルナの補佐に立ったときに聞かされた言葉だ。皇帝は言う事が大きいなと思ったのを覚えている。

「そう。つまるところ、私も相当なお節介焼きと言うことだよ」

優しい笑みを浮かべたまま、頬を軽く撫で回される。その手は温かい。

「そして、君はいまウマ娘だ」

「なんだ？ 俺の幸福も願ってくれるのか？」

冗談ほく言うが、ルナは真剣な表情で俺を見つめ。

「もちろん。君にも幸せになってほしい。それは君が人だった時から思っていたけれどね」

「よせよ恥ずかしい……」

そんな事を惜しげもなく言えるから、勘違いされるんだぞ。と言いたくなかったが飲み込む。

しかし、俺が本当にウマ娘だったら、間違いないなく靡いていただろう。

そんな話をしているうちに予鈴が鳴った。

「ふむ、楽しい時間というのは早く過ぎるものだね。この位にしておこう」

頬から手が離れたとき、少しだけ名残惜しく思ってしまった。これが彼女の魔力だ。

「そろそろ集会の準備ができる頃だろう」

ルナは表情をキリツとさせて、いつもの皇帝としての顔を見せる。

「では行こうかセレストレーナー。準備はいいかな？」

「もちろん。行きましよう皇帝様」

俺も深呼吸をすると、気持ちを切り替えるのだった。

.....

.....

.....

壇上の脇にある控え場所に行くと、そこには見知った生徒会の残り二人が立っていた。

エアグルーヴ、ナリタブライアン。この二人は生徒会を構成する重要なメンバーだ。

特にエアグルーヴの事務処理能力は、俺なんかよりよっぽど高い。もし可能なら秘書にしたいぐらいだ。

そう思うトレーナーは何人も居るだろう。

「会長……にわかに信じがたいが……本当に？」

「ああ、そうだ。彼女がトレーナー君。改めレクスセステイアだ」

「ふむ」

少し眉をひそめて近づくとエアグルーヴは、俺の顔をまじまじと見て、突如として耳を触ってくる。

「ひゃわあっ!?!」

「っ、変な声を出すなたわけっ!」

敏感な部分をいきなり触られてはそうなるだろう。と抗議の視線を送る。

「驚いた……本当なのだな……」

「ちよお……」

コリコリと耳をさわる手つきに、俺は情けない声を上げる。

「エアグルーヴ。そろそろやめてやらないか?」

「はっ、すみません会長……」

「ふああっ……」

背中を駆け抜けたむず痒さに、俺はその場にぺたんと座り込む。なんてことをするんだこの女帝さまは。

「大丈夫か?」

意外にも心配してくれたのはブライアンだった。彼女はしやがみ込んで肩に手を置くと、優しくさすってくる。

「す、すまん、やりすぎた……」

エアグルーヴも顔を真っ赤にして、視線をそらす。そんな顔をするぐらいならやらないで欲しかったのだが。

「エアグルーヴ。皆を待たせているから、そろそろいいだろうか」

「つ……はい、会長っ！」

ルドルフの言葉に、表情をいつものようにキリツと戻して、俺に手を差し伸べて立たせてきた。

「準備はできています」

「さすがだなエアグルーヴ。では手筈通りに進めるとしよう」

「ふう……」

「トレーナー君も息を整えておいてくれ。私が呼んだら出てきて挨拶を頼む」

何回か深呼吸をして息を整えると、頷いて意思を示す。

「それではその段取りで。行ってくるよ」

ルドルフはそう言うと、そのまま壇上の脇から出ていく。

少し聞こえていたウマ娘達の会話が静まりかえり、ルドルフが流暢に話し始める。

相変わらず手慣れている。あんな風に話せるのなら苦労はないだろう。俺はその姿を見守りながら、壇上の脇から、こそっと体育館を見つめる。

この体育館は、ファン感謝祭などのイベントでも使われるほど広く、トレセン学園の

全員、約2000人のウマ娘と職員を収容可能だ。

イベントではコンサートホールにも使えるぐらい、音響にも力が入れている。なんでも理事長が私財をつぎ込んで改修を行っているとか。

おかげで、マイクを使っているとはいえ、ルドルフの声もよく通る。

一番奥にいるテレビ局のようなカメラを構えてる人たちにも……。

あれ……？

「なあ、エアグルーヴ」

「なんだ？」

「なんか奥の方に報道陣いない？」

いかにも報道関係者のような人たちが、最後方に陣取って、カメラを壇上へと向けている。

「ああ、それがどうかしたか？」

エアグルーヴは、さも当然といった感じに言ってみせる。

「なんで……？」

「なんでって……はあー、貴様いい加減自覚したらどうなのだ」

「自覚……とは？」

エアグルーヴは、大きくため息をついて俺をキリツと睨む。どうやら余計なことを

言ってしまったらしい。

「お前はあメジロマックイーンの名優を育て上げた有名トレーナーだろうが」

「それが……？」

「はぁー。たわけが……」

さらに大きいため息をついて、呆れ顔でこちらを見つめる。

「お前はインタビュアーなどから逃れてきただろうが、そんなマックイーンの所属しているチームのトレーナーが変わるのだ。メディアも、その後のトレーナーが誰なのか、気になるのは当然だろうが」

「そんなもんなのか？」

「そんなものだ。マックイーンの天皇賞春の連覇以降、アジエナは注目のチームの一つなんだぞ」

言われてみれば、あれ以降インタビュアーの依頼が殺到していたはず。マックイーンに負担がかからない数は受けていたが、俺へのインタビュアーは極力控えていた。

正直、苦手でもあったし……。

「理事長曰く、トレーナーの透明性も視野に入れたいらしくてな。学園の方針に従いたいなら、今後はメディアの取材もしっかりと受けることだな」

「うわぁ……」

「なんだその間の抜けた顔は」

めんどくさい。と言葉を続けようと思ったが、エアグルーヴの喝に飲み込む。

しかしまいった。適当に挨拶を乗り越えようと思っていたが、理事長お母さんの顔もある。

これだけメディアが来てるのだから、下手なことはできない。

実にめんどくさいが、頬を軽くポンポンとたたいて気合を入れる。

「では、登場してもらおう」

前挨拶が終わったのか、ルドルフはこつちを見て軽く微笑む。

「ほら、行ってこい」

「………気張るなよ」

黙っていたブライアンも俺の背中を押してくれる。少しよろけるように壇上に出ると、俺はゆつくりとルドルフのもとへと向かう。

ルドルフは俺にマイクを譲る。それを受け取って正面を見ると、大量のウマ娘の視線を一点に受ける。

様々な反応を見せるウマ娘達。

「はー」と感嘆の声をあげるだけのもの。

顔を真っ赤に染めるもの。

なぜかわからないが、羨望のような視線をくれるもの。

俺はルドルフの方を見ると、小さく頷いて見せる。

「……私っ」

キーン――

緊張していきなり声を出すと、マイクがハウリングしてしまう。

一発目から失敗してしまったことに、顔がカーツと熱くなり、真っ赤に染めてしまう。

「えへへ……。えっと、失礼しました……」

えへへ。と声を上げ苦笑を浮かべ、いつもの癖で頭を軽くかく。

「はうううっ」

それを見て、最前列の生徒が顔を真っ赤にして倒れてしまった。

両サイドの生徒がしっかりと支えて、その場から引きずられていく。

……集会で倒れる子いるよね。うん。

「初めましてみなさん。今日からトレーナーとして、このトレセン学園に採用された、レクスセレスティアと申します」

つかみは大事だ。テンプレート通り、丁寧な言葉で続ける。

「日本最高峰の走者養成機関で、みなさんと共に頑張れることをとても嬉しく思います。私は前任のトレーナーから引き継いで、チームアジエナを担当することになります」

そう言った瞬間、記者席から大量のシャッター音が聞こえてくる。

「……でも、もし相談があるのなら、チームに関係なく頼ってもらっても構いません」
とりあえずいい子ちゃんを演じるように、言葉が続けた。

「私はウマ娘でありながら走者ではなく、トレーナーとしての道を選びました。でも、心はいつも、走者である皆さんと同じようにターフの上にあります。共に切磋琢磨していきたいと思っています」

言葉としてはこんなものか。と一度、体育館の全体を見回して。

「まだまだ未熟ですが、よろしくお願いします」

そしてマックイーンに習ったように、完璧なお辞儀をして見せる。

1テンポ遅れて、トレーナーの席から拍手が起こり、それが伝播して体育館を包み込んだ。とりあえず挨拶は成功といった感じか。

「皆、静粛に頼む！」

ルドルフの声で拍手は徐々に減っていく。

「セレストレーナーありがとう。今回の全校集会の内容は以上になる。記者席が退出した後、皆、個別の指示に従ってくれ」

手慣れた様子でルドルフは俺の退出を促し、あとの挨拶を実行していく。

控えに戻った俺は、深くため息をついて、二人に迎えられた。

「ふん、なんだできるではないか。いつもそうあれば言うことはないのだがな」

「だいじょうぶか」

エアグルーヴ、ブライアンが、二人なりにねぎらいの言葉をくれる。一日分ぐらい疲れたが、まだ朝も始まったばかりだ。

「ふふ、実に凜としていたな。まさに音吐朗朗。素晴らしい挨拶だった」

俺に遅れてルドルフが戻ってくると、ぽんと頭を撫でられる。子供扱いされて恥ずかしいが、言い返す気分にもなれなかった。

これからはメディアの取材も受け入れなくてはいけないのか。そう思うと気分もさらに重くなる。

「あとは頼んだよエアグルーヴ、ブライアン」

「わかりました」

「ああ」

そう言われると、彼女達二人は撤収作業の手伝いへと向かって行った。

「さて、トレーナー君。とりあえず君は以降は職務についてほしいのだが……」

「ああ、何か問題でもあるのか?」

何か含みのある言い方に質問すると、ルドルフは少し考えて。

「何かあったら生徒会室に逃げ込むといい。サポートできるのは、君のチームメンバーと生徒会だけだからね」

「まあ、考えすぎだと思うが。ありがとうなルナ」

お返しに。と少しだけ背伸びしてルナの頭を優しく撫でる。彼女は少し恥ずかしそうに苦笑して見せた。こう言う表情は年相応なのにな。

こうして俺のお披露目は、滞りなく終わったわけだ。

これからが大変なことになることも知らずに……。

始動

朝の挨拶の緊張もとけて、俺は自分のチームの部室に向かうために歩いている。

ウマ娘になってすぐは、周りをみる余裕もなかったが、いま見てみると身長も随分と変わったせいか、いつものトレセン学園が違って見える。

まだ集会が終わったばかりで、静かな校内。

あと十数分もすると、生徒たちの声で埋め尽くされるのだろう。

あまりそういうのは得意ではないので、俺は足早に自分の職場に戻ろうとしていたのだが。

「セレストレーナー！」

後方から聞こえる声に俺は振り向く。

俺のはや足についてきたのだろう、少しだけ肩を上下に揺らして息をしながら、こちらを見ている。

名前も知らない若い男性トレーナー。

そもそも、俺は交友関係をあまり持っていなかったせいか、知ってるトレーナーの方が少ない。

とりあえず挨拶をしておくか。

「はい、なんででしょうか……？」

俺の声に、男性トレーナーはパーッと笑顔を見せる。

「えと、その！ よければ俺が学園の案内を！」

「え？」

突然の申し出に、返答に困ってしまう。

友人といった関係を、たづなさんぐらいしか持つていなかった弊害だろう。

バツ、と手を差し出して頭を下げる彼の姿は、さながら告白のワンシーンのようだった。

しかし困った、いまさら学園を案内されても時間の無駄だ。しかし、この申し出を断つても不自然だろうか……？

「やめろ。お前には荷が重すぎる。是非私と」

そしてまた一人。男性トレーナーが現れる。この人は確か歴が長いベテラントレーナーだったか。

しかし、この姿になった途端、人気が上がるといいうのもやるせない話だ。

「いや！ 俺と」

「俺が！ 俺が案内します！」

「ふざけるな俺が先に……」

対応に困っているうちに、大量の男性トレーナーに囲まれてしまう。

正直、大声で「お前たちそんなに暇じゃないだろう」と叫びたい気分になってしまう。

俺なんかにかまって、なんのつもりなんだろうか。

もはや、言い合いの喧嘩にすら発展したその場所で、俺は途方に暮れる。

ただ苦笑いをあげるしかなかったのだが。

「ああもう！俺がセレストレーナーと一緒に行くんですっ！」

「っ！」

一番最初に話しかけてきた若いトレーナーが、俺の手を無理やり掴む。

思わずその手を払おうとした瞬間だった。

「何をしてるんですか貴方達は!!」

凜とした声には、怒りの感情が乗っていたように聞こえる。

その声に、囲んできた男性トレーナーの輪が割れて道を作る。

その道の先に立っていたのは『葵先輩』だった。

「セレストレーナーが困ってるじゃないですか！大勢で取り囲んで……なんのつもり

です！」

「あつ、いや」

「俺たちはただ親切で」

その声に、ようやく俺が困っていることに気づいたのか、男性トレーナー達はその輪を解いていく。

助かったと思うと、ハアと思わずため息をついてしまう。

自分より身長の高い人たちに囲まれ、手を掴まれたときには、同性であるはずなのに思わず恐怖心が出てしまった。

ウマ娘の敏感な耳には、言い争いの声が強く響いて、逃げてしまいたいほどだった。少し慣れたつもりでいたが、まだまだらしい。

「セレストトレーナー。いきましよう」

そんな男性トレーナーたちに怯むことなく、葵先輩は俺の手を優しく握ると

「大丈夫ですよ」

と小さく囁いて微笑み、俺をその輪から連れ出してくれた。輪の中心であった俺の存在がなくなると、トレーナー達はその場から解散して行った。

「怖くありませんでしたか?」

「いえ……という嘘になりますかね……。あんなこと今までなかったので……」

その場から離れるように、廊下を歩いていく。

少し歩いて、階段の近くまで来ると葵先輩は俺の手を離す。

「やっぱりみなさん物珍しいんだと思います」

「ウマ娘トレーナーがですか？」

「この学園には数えるほどしかいませんから。それに」

葵先輩は少し言葉にするのか悩んだのか、少しだけ考えるそぶりをして言葉を止める。

「それに？」

言い淀んだ言葉が気になって聞き返す。

「えっと、セレストレーナーはその。綺麗ですから」

綺麗。ここ数日言われ続けた言葉だ。

彼女の言う通り、いろいろなウマ娘を見てきた俺が見ても、俺の尾花栗毛の髪は、神々しいほどに美しい。

しかし、言い寄られるほどの容姿だとは思わなかった。周りの評価は、自分の評価とは随分と違うらしい。

「ふふっ、素直に褒め言葉として受け取っておきますね？」

言われ続けた言葉でも慣れることはない。彼女の言葉に微笑み、言葉を返した。

「あつ、いやその！ はい……！」

葵先輩は顔を赤くしながら返してくれる。

とにかくだ。彼女があの場合から、上手く連れ出してくれた事には感謝しなくてはいけない。

「助かりました。あの場合どうすればいいか分からなかったのです……」

「お邪魔かなとは思ったんですが、困っていたようだったので」

「そんなことはないですよ！ 本当に助かりました！」

この機に、俺は人付き合いも覚えた方がいいのかもしれない。ウマ娘としてのあの場の切り抜け方も……。

「あの、セレストレーナー」

「ん、なんででしょうか？」

「あのっ！ あの時は名のあるトレーナーとは知らずに無礼な振る舞いを！」

「いやいや！ 頭をあげてください！」

思いつきり深々と頭を下げられて、謝罪されるとは思わなかった。そのまま地面に埋まってしまいそうな勢いだ。

「アジェナの後任と言うことは、相当な実力者のはず……考えればわかるはずなのに、先輩風を吹かせてしまって……！」

頭を上げて。といつても葵先輩は深々と頭を下げたままだ。このままマントルを突き破られても困るので、俺は彼女の頬を両手優しく包み、頭を上げさせる。

「セレストレーナー……?」

「いくらチームを担当したとしても、私が葵先輩の後輩だと言うことは変わりないです」
「いえ、でも……」

葵先輩は納得していないように、視線をそらす。納得させるためには……。

「……ではこうしましょう。先輩後輩はやめましょう。今日からは一緒に中央トレンのトレーナーなんですから」

葵先輩はキョトンと首を傾げる。

「私は先輩を『葵さん』と呼ぶ事にします。これで上下関係はなしです」

「セレストレーナー……」

「これからは先輩後輩じゃなくて、友達として、ライバルとして……」

俺は手を差し出して握手を迫る。

「一緒に頑張っていきたいんです……だめ……ですか?」

「そんなっ! ダメなわけないです!」

俺の言葉に、葵さんは首を思いっきり横に振って、俺の手をぎゅつと掴んできた。

俺たちは握手を交わして、互いに恥ずかしげに微笑み合う。

あんな場面を助けてくれる人なんて、そうそう出会えないだろう。それに、女性関係の友達も作っておかないと不自然だし、この機に仲良くなるのも悪くない。

「よろしくお願いしますね？ 葵さん」

「っ……………」

「葵さん？」

「はっ、はい！ えっと、よろしくお願いします！ セレストレーナー！」

気づけば、葵さんは顔を真っ赤にさせていた。そろそろ暑くなる季節だし、ずっと手を握ってるのも迷惑だろうと手を離す。

「えっと、葵さんも私を『セレス』って呼んでくれませんか？」

葵さんが呼ぶ俺の名前が気になったので、その事についてきりだす。

自分だけが『葵さん』と呼んで、彼女がトレーナーつけて呼んでくる事に違和感を覚えただけだ。

友達であるならば、そんな肩書き必要ないだろう。

「あっ、そ、そうですよね！ えっとその。セレス……………さん……………」

その反応を見るに、俺と葵さんは、友達いない仲間としてよく似ているのかもしれない。

「ふふっ、はい。これでお友達ですね」

互いの初々しい反応に思わず笑ってしまう。

「……………はあ、その笑顔反則です」

小さく呟く葵さん。

何を言ったかまでは聞き取れなかったが、なんとか打ち解けられたみたいだ。

「あ、そうだ。葵さん？ もしよければ学園の案内をお願いできますか？」

さつきも、その案内の権力で揉めたわけだ。ここで案内されとけば、他の人の案内を断る口実にもなるし、葵さんが見てるから、案内されたと言う事実も作ることができる。

「もちろんいいですよ！ 元からそのつもりでしたから！」

胸を張って答える彼女は、随分と頼もしく見える。

「ついてきてください。まずは……」

俺は彼女に案内されるがまま、ついていく事にするのだった。

……

……

……

あの後、葵さんにみっちりトレセン学園中を案内されたのだが……。

人の身で、この学園を隅々まで案内するとなると、相当な労力を必要としたのだろう。最後の方は葵さんも疲れた様子を見せていた。

彼女のおかげか、他の人に声をかけられることはあまりなかったが、悪いことをして

しまっただろうか……？

その後、書類の整理を言った葵さんと別れ、俺は一人、部室に戻ろうと思ったのだが……スマホの時計を見ると、もう12時を示していた。

「……お腹すいたな」

燃費の悪い体は、「朝ぐらいの食事では全然足りない」と言うように腹の虫が鳴る。

この空腹を抑えるためには、売店やカフェテリアに行くしかないだろうが……。

(また囲まれるか……?)

朝あれだけ囲まれたのだ。

今、ウマ娘がウジャウジャいるあんな場所に行けば、確実に囲まれてしまうだろう。

俺はいわば『注目の転校生』みたいな状態なのだから。

しかし、わざわざ学園の外に食事しに行くのも骨が折れるわけだ。さてどうしたものか。

「トレーナーさん。ここにいらしたのですね!」

「トレーナーさん! こんにちは!」

悩んでる俺にかけられる声。振り向くとマックイーンとダイヤの姿があった。

「こんにちは二人とも。もしかして探してた?」

誰に見られてるかも分からないので、口調を崩さず俺は言葉を掛ける。

「ええ、トレーナーさん。もしよければ、わたくし達と昼食をとりませんか？」
「朝に囲まれたと聞いて心配してたんです！」

本当に情報が早い。朝の出来事はとっくに伝わっているようだった。

彼女達の申し出は本当にありがたい。まさに渡りに船だ。

「今まさに困っていたところなの。喜んでご一緒させてもらうわね」

「えへへ、やった！」

ダイヤは俺の隣に立って、腕にぎゅつと抱きついてくる。

おそらくガードしてくれているつもりなのだろう。

「だ、ダイヤさん!? わ、わたくしも！」

逆サイドに立って、マックイーンは俺の腕をぎゅつと抱きしめる。

完全防備……ではあるが、なんと動きにくいことか……。

「二人とも……離れてもいいのよ……?」

そんなに近づく必要はないと思うが、二人が離れる様子はなかった。

……

……

……

トレセン学園のカフェテリアは、24時間営業。とはかないものの、10時から20

時ぐらいまでは開いており、この学園の食事情を一挙に担っている。

基本的にはビュッフェスタイルで、学園の生徒と関係者は無料で利用することができる。これも地方にない中央の特権といったところだ。

バランスの取れたメニューや、オリジナリティを持ったメニューも存在するため、飽きることはまずないと思われる。

2000人近い数の生徒の、しかもウマ娘の胃袋を満たすために、昼間は修羅場となっている。本当にここの調理師の方々には頭が上がらない。

「今日も大盛況ね……」

俺は何気なくカフェテリアへと入り込んだのだが、その瞬間、周りの視線がこちらに集まる。

視線が刺さる。

それが悪意じゃないにしても、これだけ大量に向けられれば、いい気持ちではない。

ざわざわと聞こえる声は、おそらく俺を噂している声だろう。

そんなに気になるものなのだろうか？

「セレストレーナーも昼食ですか！ どうですか俺と一緒に！」

そんな中、若くチャラそうな男性トレーナーが俺に声をかけてくる。

こんな雰囲気なのか声をかけられるあたり、相当なKYか自信家と見える。

両サイドの番犬——

いや、猛馬が見えないのだろうか？

ウマ娘というのは所有物に対しての執着が強い事ぐらい、トレーナーであればよく知っているはずだろう。

「いえ、私は……」

「いいじゃないですか！ ほらほら」

「少しよろしいでしょうか？」

マックイーンが俺とその男性トレーナーの間に割って入る。いつものように凜とした態度で対応しているが、鞭のように激しく揺れる尻尾は、まるでハエを払っているかのようにだった。

「セレストレーナーに用事があるなら、メジロ家を通していただかないと困ります」

「あ、もちろんサトノ家も通してくださいね？」

「はあ？ なんだそれ……？」

二人の気迫に、男性トレーナーは少し押され気味に困惑している。

あまり興奮して、二人のコンディションに影響がでて困る。

「二人とも、そのあたりで」

「トレーナーさん？」

「私はこの二人と食べると決めてるんです。ごめんなさいね？」

マックイーンとダイヤを抑制して、申し訳なきそうにトレーナーに断りを入れる。

「あー、そうっすか。じゃあまたの機会に……」

マックイーン達の不快そうな表情に気づいたのか、男性トレーナーは残念そうに去っていった。

「もう、あんな人には、ちゃんと言い聞かせないといけないんですよ？」

「そうですわトレーナーさん。トレーナーさんに寄り付く虫はわたくしが……」

「はーい、そこまで。あまり怖いこと言っちゃダメよ？」

俺は二人の頭を軽く撫でる。これ以上先は怖くて聞きたくなかった。

「それより早くお昼ご飯を食べましょう？ お昼休みが終わってしまうわ」

二人を引き連れ、俺はビュツフエスタイルの大量に供給されている料理を選んでいく。

巨大な人参ハンバーグに、ロールパンを六個ほど……それにサラダに人参ジュース。

人の頃は、こんなに食べられない。と思っていたが、このくらいなら間違いなく食べれてしまう。ウマ娘の胃袋恐ろしやだ。

「私もトレーナーさんと同じのを」

ダイヤは俺と全く同じものをトレーに乗せていく。

「好きなものを食べていいのよ?」

「トレーナーさんが好きなものが、私の好きなものなんです!」

ダイヤは昔からそんな感じだ。俺が食べてるものを欲しがったり、苦いコーヒーを無理して飲んでみたり。そういうところは背伸びしたい年頃なのかもしれない。

ふと横を見ると、マックイーンは何を選ぶか唸っている。

マックイーンはどちらかという太りやすい体質だ。

いわゆるバ体調整が難しいということ。特にレース前なんて気性が悪くなる時もあるぐらい、頑張って体重を理想に近づけている。

ウマ娘のレースは『I k g ーバ身』と言われるほどにシビアだ。だから、マックイーンには食事制限を言い聞かせているのだが……。

その結果がこの唸りなのである。

まあ、吟味するマックイーンをおいとして、置かれている料理に目を戻す。

本場に様々な料理が置かれている。主食、主菜、副菜にデザートまで。いろいろなものに目移りしてしまう。

……しかし、マックイーンに制限を科している手前、これ以上はやめておかなければ。(あ、でもデザートにあのモンブラン……)

手を伸ばそうとすると、その手をマックイーンに掴まれた。隣を見ると、涙目でマッ

クイーンは俺に訴えている。

「鬼！悪魔！」

「わかったから離してくれないかしら」

マックイーンを宥めながら、俺たちは席を探す。あいにく、この時間は生徒達で埋め尽くされているが。

「トレーナーさん」

「お姉さまー！」

俺を呼ぶ声に、その方向を見るとカフェとライスを見つけた。

「席を取っておくようにお願いしましたの」

ふふんと、褒めると言わんばかりにマックイーンは言う。マックイーンは本当にこう言うところの手際がいい。

「助かったわマックイーン」

俺たちは呼ばれるがまま、円形のカフェテリアのテーブルにつく。

「待つてなくてもよかったのよ？」

どうやらライス達も食事を待つてくれていたようだった。

「えへへ、どうせならお姉さまといっしょがいいなあって」

「はい、一緒がいいです……」

「たまには悪くはないかもしれないわね」

忙しい時は適当な食事で済ませていたが、この体になってからはそうもいかないらしい。

明らかに人よりも消費カロリーが多いのだ。

たまにはではなく、このカフェテリアを毎日使うことになりそうだ。

ともかく、今は腹が減っている。

目の前の食べ物を、いち早く胃の中に流し込みたい気分だ。そう思った瞬間、くうーとお腹が鳴る。

「あらあら……」

ニヤニヤと俺を見るマツクイーン。

「ふふっ、お姉さまかわいいー!」

そんなお腹の音にすら瞳を輝かせるライス。

「トレーナーさんつたら……」

あまり表情に出さないが、軽く笑むカフェ。

「可愛いですっ!」

スマホで写真を撮ろうとするダイヤ。

「あー、あー、聞こえない。とにかく食べましょう!」

穴があつたら入りたい。今までお腹がなつただけで、ここまで赤面したことがあつただろうか。

恥ずかし紛れに声を出して流れを変える。

「それじゃ、いただきます」

俺の号令に続いて、みんな同じように「いただきます」と言うのと食事を始める。

こうやって大勢と食事を囲むのはいつ以来になるだろうか。互いの食事を見ると本当に個性が出ている。

ライス小さい割にはかなり食べるし、マックイーンはなんとかカロリーを抑えて、お腹いっぱいになる選び方をしている。ダイヤは育ち盛りなのか俺の倍ぐらい持つてきてるし、カフェは俺と同じぐらいだろうか。

トレーナーとウマ娘としての距離感を保っていたから、食事を邪魔しないようにしていたが……これからは一緒に食べるのも悪くないかもしれない。

カロリーの計算方法こそ教えていたが、実際、見てる方がアドバイスできるかもしれない。

三年もやってるのに、今更気づかされることもあると痛感する。もちろん彼女達が嫌じゃなければなのだが。

「あ、そういえばゴールドシップは……？」

そして今気づいたのだが、ゴルシの姿が見えない。

朝のメッセージ以降、全くと言っていいほど音沙汰がないのだ。

「たぶんナカヤマフェスタさんあたりと勝負でもしているかと……」

「マックイーンにも連絡がないのね。あなた達は？」

席に座っているチームメンバーにも聞くが、みな首を横に振るばかりだった。

夕方のトレーニングのこともあるから、少し話し合っておきたかったのだが……。

「……まあいいわ。今日のトレーニングのことなだけけれど」

食事を行いながら、今日の予定について話し始める。

皆、俺の話を集中して聞いてくれる。本当にいい子達だ。

「マックイーンはライスとのトレーニング。ライスの菊花賞に向けての体づくりを基本に。マックイーンは補佐について頂戴？ 資料は今日中にまとめるから、その通りに」

「わかりましたわ」

「うんっ、ライス頑張るよ」

マックイーンは天皇賞・春以降、年内は休養の予定だ。

あまりにもハードなスケジュールを続けていたため、メジロ家の意向でそういう方針になった。

マックイーンは功績を立てすぎてるのだ。今年の宝塚記念にも推されていたが、回避

の運びになっっている。

ちようにいい機会だから、ライスの補佐という形で協力して貰うことにした。こう言ったところはチームの利点だろう。

「カフェは来年に向けての走行フォームのチェックと、基礎トレーニング。私が補佐するわね」

「はい、わかりました」

カフェは小さくコクつと肯く。

本格化こそ迎えていないが、カフェは現役G1級のウマ娘と競ることができるほどに仕上がってきている。このままいけば、来年には問題なくデビューできるだろう。

「ダイヤは……基礎トレーニング以外はチームの補佐。あなたは体を作る時期だからね」

「はい、トレーナーさん」

ダイヤはまだまだ本格化とは程遠い。

同期で入ってきたキタサンブラックの方が、早く成長している感じもある。彼女はその『キタちゃん』と走りたがっているが……どうなるか。

しかし、今は焦る時期じゃない。怪我さえなければ闘う機会はあるのだから。

「ゴルシについては……。考えておくわね。今後のことも含めて」

小さくため息をついて、ここにいないゴルシについて思う。

素晴らしい足は持つてるのだが、楽しいこと優先でやってしまう性格である。

もちろん、走ることも嫌いではないだろうが、集中力にムラがあると云ったところ。

まあ、それも彼女のいいところかもしれない……い……のか？

「とにかく、授業が終わったら各自アツプは済ませておくように。お昼のついでにミーティングになっちゃったわね」

「かまいませんわ。こう言ったところで済ませられれば、その分トレーニングに回せますもの」

マックイーンの言葉に肯くメンバー達。

本当に、素直でいい子達が集まってくれたものだ。あとは俺の指導力にかかっている。

「アジエナの再始動ね。まずは菊花賞」

俺はライスを見つめる。

「うん、お姉さま！」

「菊花賞は勝つわよ」

「うん！」

俺の言葉に、ライスは表情に鋭さを見せる。

ライスはダービーを経て、精神的にも成長を見せている。これが続いてくれば菊花賞はきつと……。

俺たちは決意を新たに、チームを再始動させるのだった。

青鹿毛のバリスタ

「ごめんなさいね？」

「はい……わかりました……」

アジエナの部屋。

シヨートヘアのウマ娘は、残念そうな表情を浮かべて部屋から退出していく。申し訳ないと思いつつも、彼女の申し出を断った。

このトレセン学園でウマ娘を受け持つためには、スカウトをするのが一般的なのだが……。

稀に、トレーナーに対して猛アタックをしてくるウマ娘がいる。そう言った類のものは『逆スカウト』と言われている。

マックイーンが結果を出し始めた当初は、何回か逆スカウトを受けたことがあるのだが、俺が断りすぎたせいで、それもそのうちになくなった。

噂を聞いた限りでは、話しかけづらいついかなんとか。

しかし今はどうだろうか？

俺はウマ娘で、彼女達と同じ存在。近い距離にいたことができるようになった。

いわゆる、話しかけやすい状態にあるのだ。

「はあ……」

15人――

この1時間で現れたウマ娘はその数にのぼる。全員に断りを入れるのも骨が折れる。彼女達の熱意は素晴らしい。

「必ずG1で勝つ」とか、「あなたのもとで輝きたい」とか。

熱意ゆえに、俺が断りを入れる前に、各々独自のアピールで俺にプレゼンする。

もちろん俺だって、できることなら全員を受け持って、彼女達の力になりたいと思ってるのだが……。

指導にはキャパシティが存在する。

トレーナーの中には10人以上を受け持つものもいるが、あいにく、俺はそんな化け物ではない。

いや、もしかしたら、ウマ娘としての強靱な体を持った今では、それも可能なのかも
しれない。

しかし、いくら体が強靱でも、ついて回るのが時間という概念だ。

トレーナーの仕事時間は1日に9〜13時間程度だとして……。

俺が現在担当している人数は5人。一人に1時間の時間を使ったとして5時間。

残り4〜8時間は残ってるし、担当増やせるんじゃないかね？　と思われるかもしれないが、それは違う。

トレーナー業務はウマ娘のトレーニングだけではないのだ。

出走の管理、書類業務、器具の保守点検、会議に、研究や分析……と、このように多岐にわたる業務をこなさなくてはいけない。

トレーナーは外部の人間が思うより、ハードな業務なのだ。

ネットを見れば、ウマ娘達とイチャイチャできて羨ましい。なんて意見も見かけるが、そんな人にはぜひ内情を知ってもらいたい。

現状、トレーナーの数は圧倒的にウマ娘より少ない。

ゆえに、実力のあるトレーナーは多くのウマ娘を担当することになる。

実力あるトレーナーほど、仕事の拘束時間が長くなるため、正常な思考を持っている人ほど、早く脱落していく。

もちろん、脱落の理由は体調的な面の方が多い。

3年続けられれば優等生。5年続けられればもはやベテラン。10年続けられれば神格級だ。

こう言った激務も、トレーナーの慢性的な不足に拍車をかけている。

とにかく、長年この仕事を続けられるのは、相当なもの好きか、頭のネジが吹き飛ん

でる者たちなのだ。

……それはきつと、俺も例外ではないわけだが。

逆スカウトラッシュも終わり、静けさを取り戻したアジエナの部屋。

俺は机の上に書類を広げて、書類の整理を始める。

何枚かに軽く目を通して、優先順位を決めていくのだが、そんな中、一つの書類に目が止まった。

「うわ、公開練習は今日だったか……」

トレセン学園には、外部のメディア向けに、月に何回かの公開練習を行っている。

トウインクルシリーズは勝負事ではあるが、エンターテイメントとしての側面もあるため、そう言ったマスメディアの恰好の取材対象でもあるのだ。

有名な走者になれば、特集記事や番組が組まれる。

芸能界には、トウインクルシリーズ出身の、ウマ娘タレントや女優が数多く存在している。

トウインクルシリーズは、そう言ったスターを産む土壌にもなっているのだ。

しかし、まいった……。

今日の取材対象は、間違いなく俺になるだろう。

自意識過剰というわけではないが、今日1日トレセン学園で活動してわかったことが

ある。それは自分が思った以上にスター性を持ち合わせているということだ。

おもむろに、スマホで『うまったー』を確認する。

お昼のニュースで、朝の挨拶が放送されたのだろう。

トレンドには『尾花栗毛の姫』やら『美ウマ娘トレーナー』やら『#セレスちゃんカワイイ』やら……俺のことであろう話題で埋め尽くされていた。

精神衛生上よくないし、俺はスマホを片付ける……。

さて、ネットもこんな状況だからこそ、今日の注目の話題は『レクスセレスティア』で間違い無いだろう。

つまり俺は公開練習に出るとどうなるかというところ。

「囲まれるよなあ」

気が重い。

いつそのこと、ルナにでも護衛を頼むか。彼女ならうまく記者を捌いてくれるだろうし。

……これ以上仕事を増やすのは彼女に悪いか。

コンコン——

どうするか考えていると、扉をノックする音が聞こえる。

これが何かの勧誘やセールスなら「間に合ってます」で終わるのだが、おそらくはま

た逆スカウトだろう。

「はあ、どうぞ」

小さくため息をついて、俺は扉の向こうの人物に声をかけた。

「やあやあトレーナー君。ご機嫌なようだねえ」

俺の疲れをもった顔を見るなり、ニヤニヤと笑い、白衣の袖をクルクルと回しながら入ってきたウマ娘。

「アグネスタキオン……」

「なんだい？ つれないねえ。せっかく私が訪ねてきてるといふのに」

俺の不満そうな言葉遣いに、彼女はさらに顔をニヤつかせる。

彼女は独特のねっとりした声でそう言い、俺の前に立つと、手を顎に当てて考えるポーズをする。

「ふうん。体調は良いようで安心したよ」

「ご機嫌伺いもいいんだが、戻るための薬品はできたのか？」

「急すぎは良くない傾向だ。そんな簡単にできると思っているのかい？」

タキオンはやれやれ。と言った感じのオーバーなりアクションを見せる。

「で、いつ頃までにできそうなんだ？」

「そのことなのだが、実はあまりにもサンプルが少なすぎてねえ」

彼女は懐から試験管やらサンプルの採取用のピンセットやらを、書類の散らばった机の上に広げる。

「早期完成のためにも、サンプルを取らせてくれないかと思ったのさ」

「サンプル？ 髪の毛とかか？」

「髪の毛、皮膚の一部、爪、唾液に……まあ体液一通りといったところかな」

「……本当に実験に必要なんだよな？」

しかも体液一通りとは何だ。嫌な予感しかしない。

「まあ、それで早く完成するなら……。何をすればいい？」

「まずは服を脱いでくれ。もちろん下着もね」

「服をね……ってえっえええっ!？」

突然何を言い出すんだこいつは!? まさかのお願いに叫んでしまう。

「まったく、いきなり叫ぶとはどういうことだいモルモット二号君」

「いや、だって! お前、脱げって……あと俺はモルモットじゃない!」

「問題があると思ってるのかい? 今は同族だろうに」

「それでも問題ありだろ! 何が楽しくて、お前に裸体を晒さないといけないんだ!」

「タキオンは相変わらず、何か問題でもあるのかね? と言いたげな顔で見つめてくる。」

やっぱりウマ娘の中でも、こいつはかなりネジが飛んでいるんだろう。倫理観を親の腹の中に残してきたのだろうか？

「安心したまえ。瞳を閉じているうちに終わる」

タキオンは、袖から手を出してワキワキと指を動かして俺に迫る。

俺は椅子から立ち上がると、壁際まで逃げる。しかし無情にも、そこには窓もなく逃げることが叶わない。

「さあ、観念したまえセレス君？」

「あんっ、ちよっ、やつ、やめろー!!」

俺の声は虚しく響いて……。

……

……

……

「もうお婿に行けない……」

無理やり服を剥かれて、体のありとあらゆるところを触診されて、サンプルも取られた……。

実験動物ってこんな気持ちなんだろうか？ 人間としての尊厳を失ってしまったよ

うな気がする。

床にぺたん。と座り込む俺。はだけた服装は、第三者が見ればあらぬ誤解を受けそうな状態だ。

「嫁に行けばいいじゃないか。君なら引く手数多だろうに」

人の気持ちも知らないで、タキオンはサンプルを懐にしまっていく。

満足そうに微笑んでいる彼女……あとでタキオンのトレーナーに報告してやろうと心に決めた。

「私の用件は済んだからね。誰かがこないうちに退散することにしよう。それじゃ」

ギイ——

上機嫌な彼女の終わりを告げる音。

部屋の扉が開く音が響く。

「タキオンさん……何をやってるんですか……?」

ギコギコ。と油を差し忘れた歯車のように、タキオンが振り向くと、開かれた扉から、月のような目を見開いて見つめるウマ娘の姿が。

「か、カフェじゃないか! 奇遇だねえ!」

明らかにタキオンの顔が引きつる。

おそらく彼女からしたら、一番会いたくない相手なのだろう。

「何をやっていた。と聞いているんです」

胸をはだけさせている涙目な俺と、タキオンの引きつった顔を、カフェは交互に見て、無表情ながらも、相手を殺せそうなほどなプレッシャーを放つ。

ガリガリと、床が削れるほどに前掻きをするカフェは明らかに不機嫌だ。

「いやあ……トレーナー君の薬のためにサンプルをね」

「そうなのですかトレーナーさん……？」

最初からタキオンに聞く気はない。と言ったように俺に問いかけるカフェ。

無理やりあんなことをされたのだ。タキオンには少しお灸を据えてやろう……。

「ぐすつ、タキオンに無理やり……」

演技ではあるが、グスツと泣く真似を見せて、そんなことを呟いてみる。

ベキツ——

床の一部が軋む……。

「アグネスタキオン」

すーっと、部屋の温度が下がっていく。

ああ、これは『あの子』も掛かっているんだらうなあ……。

「なっ、なんだい？ よそよそしく……」

カフェは本当に怒っている時、相手の名前をフルネームで呼ぶ。しかも呼び捨てで。

これは以前、カフェの大切にしているコーヒー豆に、タキオンが薬品を振りかけて、ア

マゾンのようなコーヒーマシンの木の密林を生み出した時以来の出来事だ。

そうとうに掛かっているみたいですねこれは……。

「少し時間を貰いますトレーナーさん。コーヒーマシンの後はその後にしましょう」

「お湯沸かしとく……?」

「いえ、私がするのでゆつくりとしてください。さてアグネスタキオン」

「な、なんだいい……?」

縮こまつてるタキオンをみるのは久しぶりだなあ。と、そんなことを思いながら服を着直す。

カフェはうちのメンバーの中で、唯一手加減ができる子なので、お仕置きは任せても大丈夫だろう。

「行きますよ……」

「はっ、はなしたまえっ！ ちよっ、袖を結ぶのはやめーろー!」

カフェは、タキオンの持て余す袖を背中中で固結びにすると、彼女の首根っこを掴んでずるずると引きずっていく。

「とれーなーくうんっ!」

タキオンはそのまま、ずりずりと部屋から連れ出されてしまった。

ウマ娘にされてから、何か仕返しできないものかと思っていたが、意外なところで果

たせてしまった。

「タキオン……これであいこにしよう……」

とりあえず、彼女のトレーナーへの報告はやめといてあげよう。

……

……

……

がり、がり。とコーヒーマルが豆を砕く音が部屋に響く。

20分ぐらいいした後、カフェはいつもと同じ雰囲気です。部屋に戻ってきた。『おしおき』の内容までは聞かなかったが、大丈夫だったか？ と聞けば。

「はい、お話しただけです。暴力は嫌いですから……」

と返されたので、たぶん大丈夫だろう。カフェは嘘をつかない子だし。

カフェはコーヒーマルを用意していく。要領良く、手慣れている。

むかしはインスタントコーヒーマルを飲んでいたのだが、カフェが来てからはほとんど彼女が淹れてくれている。

初めは彼女の持ち込みのハンドドリッパー用の機材で。

いつの間にか直火モカの機材に、サイフォンが増えていき、部屋の一角はまるで町の小さな喫茶店のようになっていた。

「エスプレッソマシン置きませんか？」と彼女に言われたが、そこまでしたら本当に喫茶店になってしまったので却下した。

彼女の残念そうな顔を見たときには、少し心が揺らいだのはいい思い出だ。

「もう少しですから、待っててください」

彼女はペーパーフィルターをドリッパにセットし、湯通しするとそのお湯を捨てて、容器を温めるために再びお湯を注ぐ。温度計でドリッポットのお湯の様子を確認めると、適温になったのか小さく肯く。

ドリッパに挽いたコーヒー豆を入れると、デジタルスケールを用意し、容器のお湯を捨てて、全てをセットして準備完了。

カフェは手慣れているように、コーヒーの抽出を始める。

お湯が豆に触れた瞬間、香りが弾ける。

蒸らし40秒――

それが終わるとお湯を注ぎ……。

1分20秒、2分10秒、と三回に分けてお湯を注ぐのが彼女流のハンドドリッパだ。

彼女曰く「素人である以上、基本に沿った方がいい」との事だった。

もつとも、彼女のコーヒーに対する考えは、素人を超えているのだが……。

3分と少しすると抽出が終わる。

コーヒーを注ぐカップを残ったお湯で温めると、それを捨てて。抽出が終わったコーヒーを軽くスプーンでかき混ぜる。

そして2つとも同じデザインのカップに注ぐと、ソファアで寛ぐ俺の前に、コーヒーを差し出してきた。

人の時よりも強い香りを感じる。

少し甘く、しつかりと豆の匂いのするコーヒー。

カフェがいつも嗅いでいる匂いと、同じ感じ方なのだろうか。

「ありがとうカフェ」

カップを受け取ると、カフェにお礼を言う。

「いえ……」

そういうと、カフェは俺の隣にぼふつ、と座ると肩を寄せる。

「あっち座っていいんだぞ？」

向かいのソファアが空いている。と指してみるが。

「ソファアが……いいです……」

「……まあ、それでいいならいいんだけどさ」

寄りかかるように、すりすりとは軽く体を擦り付けてくるカフェ。

小動物のようで可愛い。犬というよりは猫系だろう。

主人と猫……。

いや、互いにお揃いのカップを持っていると、姉妹のようにも見えるだろうか？
「とにかく、いただくとするよ」

コーヒーを一口。

その瞬間に口に広まる軽い苦味と、酸味を感じる。しかし、それは後に引くことなく、スツと消えていく。

「豆の甘い香りに落ち着きを覚えると、耳がぺたんと倒れてしまう。」

「ん、今日もおいしいよカフェ」

「それはなによりです」

「酸味が独特だし苦味より強いから、えつと……昔飲んだことあったな……これは……
キリマンジャロ？」

「トレーナーさんもわかってきましたね」

「どうやら正解だったらしい。」

カフェは毎回、いろいろなコーヒーを俺に提供してくれる。そのおかげか、俺も少しはコーヒーに対しての造詣が深くなった。もちろんカフェには敵わないが。

「そりゃカフェがいろいろ飲ませてくれたからな。ただでさえ趣味がない俺の、数少ない趣味だよ」

「では……一緒の趣味ですね」

そう言うと、カフエは小さく笑む。

最初は表情を見せない子だと思っていたが、一緒にいると意外にも豊かな笑みを見せてくれる。

カフエはちびちびとコーヒーを啜りながら、俺に体を擦り付ける。彼女はコーヒーを一気に飲むと、お腹が痛くなってしまうらしい。

一口飲んで、俺に尻尾を軽く当ててきて、そしてまたコーヒーを一口。まるでかまって欲しい猫のような仕草を見せ、なんとも微笑ましい。

俺はこのゆっくりと流れる時間が大好きだ。

心休まる時間の一つだと言っても過言ではない。

カフエの尻尾の催促に、俺は金色の尻尾をカフエの尻尾に重ねるように動きを止め、彼女の頭をポンポンと撫でてみる。

カフエはびくつと体を奮わせると、撫でやすいように耳を倒した。

「いきなりはだめですよ……う」

「そっか、悪かった」

撫でたことを注意されるが、カフエは逃げるとか避けるとか、そう言った行為は見せない。むしろ撫でられたいように、頭を擦り付けてくる。

こう言ったところも猫っぽいなあ。と思いながら、俺は彼女の頭を撫で続ける。
そしてゆったりとした時間が過ぎていくのだった……。

坂路の申し子

くつろぎの時間を終えたら、今度は仕事の時間だ。

俺はトレーナー用のジャージに着替えて、チームメンバーよりも一足先に練習場へと足を進めていく。

トレーニングの時間までは、もう少しあるが俺にはやることがある。

それはほかのウマ娘の練習の偵察だ。

担当のライバルとなるウマ娘を見つけ、走り方を解析するのも、トレーナーである俺たちの重要な役目である。

親しいトレーナーが多ければ、わざわざ見なくても情報を集める手段があるが……。

俺は自分の目で見えて、感じて、それを自分なりに考えるのが好きなのだ。

断じて！ 友達付き合いが下手なわけじゃない。

俺は、聞いただけでは理解できないことがあると思っっている。

目で見たからこそ、走者の息づかいや小さな変化を理解できる。

そうして初めて彼女たちの一部を理解できる。とも思っている。

たづなさんに話したら「本当に真面目ですな」と言われたのを思い出す。

トレーナーたちが、ウマ娘たちにしてあげられることは多くない。

もちろん理論を教えたり寄り添うことはできるが、一度走り始めれば、彼女たちは世界で一番孤独な存在になる。

ターフ上にライバルはいるが、助けてくれるものはいない。

だから俺は彼女たちがレースに出るまでに、できる限りの事をしたいと思っている。

「さてと……」

俺はストツプウオッチを握りしめる。

練習場へと繋がる通路を抜ければ、記者たちから質問責めに合うのだろう。

さて、早々とその質問に答えて、偵察の時間を確保することにしよう。

「よし……」

「よし、じゃない。おいたわけ」

「えっ、エアグルーヴ？」

突然かけられた声に振り向くと、そこには腕を組んだエアグルーヴが立っていた。

「またもや俺は気付くことなく、歩き続けていたらしい……」

「いつから……?」

「本当に気づいてなかったのだな。はあー、まったく考えすぎだ」

「えっと、ははは……」

考えすぎると周りが見えなくなるのは、俺の悪い癖の一つだ。

その言葉を聞くにおそらく長い時間、彼女を無視してしまったのだろう。

「こほん。何か用事かしら……？」

誰に見られているかも分からないので、俺はエアグルーヴに丁寧に戻す。

「会長から言伝だ」

「ルドルフから……？」

「記者たちには『邪魔をしないようお願いしておいた』だそうだ」

「おお……」

思わず感心の声が漏れてしまう。さすが会長様は根回しが早い。

言わなくても、俺がして欲しいことが分かってるのか……？

「会長の配慮だ。失望させないように励むことだ」

「ええ、ルドルフにはありがとうと伝えといてくれるかしら」

「ああ、ただ……」

「ただ？」

「練習後に取材の時間を作っている。記者たちも手ぶらでは帰れんからな」

「うへえ……」

「何がうへえだ！ シヤキツとせんか……。まったく、会長の顔に泥を塗らない様にな」

最後にそう言うと、エアグルーヴは足早に俺から離れていく。

「あ、ありがとう……はあ……」

練習後の取材のことを考えると、今から気が重い。彼らも仕事だし仕方がないが……。

まあ、練習中に話しかけられるよりマシということにしとこう。

とにかく、気を取り直して練習場へと向かわなければ。

……

……

……

晴天の練習場。

エアグルーヴの言っている通り、記者たちは遠目に俺を見たり、写真をとるだけで近

寄っては来なかった。

ありがたい限りだ。

ターフやダート上ではいくつかのチームと、まだデビューしていないウマ娘たちが、教官の指導を受けて練習を行っていた。

「上がり3ハロンは……と」

俺は自分のノートに、走っているウマ娘のタイムをまとめていく。

来年デビューするカフェのライバルになりそうなウマ娘を、何人か見つけることができた。

公開練習は偵察の場にちようどいい。

メディアに存在感を見せるために、いつもより大幅に気合を入れて走る娘がいるからだ。

レース並みの一杯で走る娘もいるから、見ていて面白いし参考になる。

「お、あれは……」

双眼鏡で坂路の方を眺める。

もの凄い速度で坂路を走っていくウマ娘。

彼女の足は怪物と言っても過言ではない。

普通であれば、坂路をあれだけの全力で走ることにはできない。

彼女が努力で手に入れた肉体。

坂路の申し子。

その名は、ミホノブルボン——

ライスシャワーの最大のライバルにして、俺たちが超えるべき最大の壁。

彼女は実にクールで、トレーニングを着々とこなしていく。

そんな姿から『サイボーグ』と形容されるが、まさにその通りだと思う。

「ふむ……さすがだけど……」

ブルボンはいつとも変わらないパフォーマンスを、記者たちに見せつけている。並大抵の努力では彼女に勝つことはできない。

記者が口を揃えて言う言葉だ。

無敗で二冠を手に入れた実績も相まって『シンボリルドルフの再来』とまで言われている。

しかしだ……。

俺の見解は記者たちのそれとは異なる。

「あっ……」

双眼鏡で見られていることに気づいたのか、ブルボンは俺を凝視してきた。

さすがに練習風景をじろじろ見るのはまずかったか。

彼女は強面なトレーナーと話すと、駈歩で俺に近づいてくる。

何を言われるのか。と身構えてしまう。

「セレストレーナー」

彼女はあまり抑揚のない声で、俺に声をかける。

実を言うと彼女と話すのはこれが初めてだ。

ライスがクラシック期に入ってから話すほど暇ではなかったし、過度に接触したく

なかったこともある。

もちろん、練習は偵察していたが……。

「えっと初めまして。ミホノブルボンさん」

「なるほど、私の名前はすでにご存知なのですね。さすがはライスさんの新トレーナー」
彼女は小さく肯くと、抑揚なく続ける。

「不躰ながら、ライスさんの新しいトレーナーがどんな方か……気になったのでマスターに挨拶の許可を貰ってきました」

俺は、遠くで見つめる強面なトレーナーの顔を見る。

すると彼は礼儀正しくお辞儀をするから、俺は会釈を返す。

そしてブルボンに視線を戻し、話を続ける。

「日本ダービー。見事な勝利だったわ」

ライスを振り切つての一着は、見事としか言いようがなかった。

中盤まではいいいペースだったのだが、最後の直線で見事に振り切られた。

彼女は本当に素晴らしい末脚を持っている。

「いえ、まだまだです。私には、たどり着くべき目標があります」

彼女はクールに言い放つ。

「菊花賞……ね」

「はい。私の目標はクラシック三冠。そのために綿密な計画と、トレーニングを積みましました」

クラシック最長距離――

平地の競走で言うなら、三番目に長い距離のレース。

クラシック最終戦でもあり、数多くのウマ娘の三冠の夢を飲み込んできたレース。

それに挑もうとする彼女は、表面は冷静だが内なる闘志を持っているようだった。

だが……それも……。

「ブルボンさん。あなたは私たちの最大の敵で壁でライバル」

俺はきつと、菊花賞で彼女の夢を奪うことになる。

これだけ頑張っているのに、彼女に菊花の栄誉はもたらされない。

様々な理由から、俺はそれを確信してる。

「こんなこと言うのは、変かもしれないけれど……頑張ってくださいね?」

俺の内なる心を悟られないように、彼女に笑顔を向けて言ったのだが……。

「……」

ブルボンは俺の言葉を聞いて、少し考える仕草をする。

そして静かに口を開いた。

「……解析。あなたの言葉に、ステータス：悲しみを検知しました」

その言葉に、俺は思わず目を見開いてしまう。

隠したつもりだったが、どうやら滲み出てしまったらしい。

ウソ発見機でも内蔵してるのだろうかこの子は。

「何かを隠していると推定。マスターからは意見の一つでも貰ってこい。と命令を受けています。遠慮せずにどうぞ」

ここまで見透かされるとは思っていなかった。

再び、彼女のトレーナーを見ると仁王立ちでこちらを見ている。

「さあ、どうぞ」

彼女は俺の真意を聞くまで、退く気はないようだ。

俺は覚悟を決める事にした。

心に閉じ込めておこうとした言葉を解き放つ。

俺は小さく深呼吸をして、一言放つ。

「あなたは菊花賞でライスに勝てない」

無表情だったブルボンだが、この一言にびくつと表情を少しだけ変える。

耳をピンとたてて、数秒瞳を閉じると表情を戻した。

「理由を伺っても良いでしょうか」

さすがクールな性格だ。

この子の心の乱れなさは、レースでも相当なアドバンテージなのだろう。

「そうね……。貴女のレース映像を見て思ったのだけれど」

結論を言いつばなしじゃ流石にかわいそうだし、俺は説明を続ける。

「あなたが、菊花賞でライスに負ける二つの理由を見つけたの」

「聞かせてください」

ブルボンは食い気味に俺に理由を尋ねる。

「……一つ目。あなたの適正距離では長距離を走れない。これはきつと貴女も知ってるのよね。いえ、貴女が知らなくても、貴女をここまで育てたトレーナーが知らないはずがないわ」

俺の見立ては当たっていると思う。

ブルボンのトレーナーは強面で寡黙だが、ウマ娘のことをよく見ている。

ブルボンの走り方を見れば、マイルから、せいぜい2400mぐらいが限界だということ、理解しているだろう。

それでも走らせる理由は、おそらく『ブルボンの願い』を尊重してるのだ。

「はい、それは存じています。私の元々の得意距離はマイルから中距離です」

「それでも走る理由は？」

興味があった。

それを理解して走ろうとする彼女の決意に。

俺の質問に、ブルボンは自分の胸に手を当て話し始めた。

「私は努力は限界を超える。と信じています。これは父とマスターも同じ考えです。私は限界を超えたい。私はその理論を証明したい。そのために走っています」

俺を強く見つめる瞳には、燃える様な闘志が見える。

……良い瞳だ。

まるでドラゴンに挑む騎士のような強さを持つている。

「あなたはクラシックデイスタンスで圧勝して見せた。もう証明できたのじゃないかしら？」

「いえ、三冠こそが私のミッション。それは変えられません」

「そう、良い覚悟ね」

「それで他には？ 貴女は二つ。と言いました」

まるで意地悪をしているみたいで、気持ちが乗らない。

一つ理由を言うのも実に心苦しいのだが、それでも聞いてくるブルボンは、意外と意地悪なのかもしれない。

「そうね。じゃあ二つ目」

「これが一番言いたくなかった。

相手によっては、完全に心を折ってしまうかもしれないからだ。

「ライスはダービーの時点で、本格化に入ったばかりだったの」

「え……」

ブルボンは尻尾の動きをピタツと止める。これには流石に動揺を見せたらしい。

そう、ライスの本格化はこれからなのだ。

ブルボンの成長はどちらかというと早熟傾向にある。

クラシック期の夏までにピークを迎えて、そこから徐々に衰えていく。

衰え方もそれぞれなのだが、早熟傾向のウマ娘は、シニア期の中盤ぐらいで引退やプロリーグへの移籍を考えることになるだろう。

それに比べて、ライスやマックイーンは晩成傾向にある。

成長が遅いが、シニア期に最も能力を発揮できるし、衰えもゆっくりな傾向にある。

晩成傾向はちょうど菊花賞あたりで最高の状態を迎える。

そう、ブルボンはピーク過ぎに、最高の状態のライスと戦うことになるのだ。

しかも、本来の適正距離外のレースで……。

「そんなライ스가ダービーで貴女について2着。そして、ライスは生粋のステイヤーよ。マックイーンよりもずっとね。ライスの適正距離は2500m以上なの」

ブルボンは表情こそ変えないが、黙って俺の話の聞いている。

冷静を装ってはいるが、内心はきつと相当に乱れているだろう。

「ダービーは適性外、本格化も入ったばかり。そして菊花賞は約4ヶ月後」
「なるほど。最高に仕上がった状態のライスさんと戦う事になると」

ブルボン は口を開く。

その言葉は俺にもわかるぐらいに震えていた。

「ごめんなさいね？ 意地悪言ってるわけじゃないのよ」

そんな震えた声を聞くと、話すべきでなかったと後悔した。

俺は思わず悲しい表情を浮かべるが……。

「いいえ、最高です」

「え？」

聞こえたのは、俺の後悔を打ち消す一言。

言葉を聞き間違えたか？ と思っと思わず声を上げてしまった。

「最高の状態のライスさんと戦える。勝てば私の強さの証明ができる」
ブルボンはまるで望外の喜び。と言った口調で、珍しく饒舌に話始める。

……俺は勘違いをしていた。

声の震えは恐怖ではなく。

歓喜——

好敵手ライバルと戦える喜びだったのだ。

「ありがとうございませす、セレストレーナー。貴女のおかげでさらに頑張れます」
「へえ……」

その闘志に満ちた声に、俺は思わず笑みを漏らしてしまう。
そうだ。

これぐらいで心が折れるのなら、クラシックのG1戦線なんて走れない。
俺は彼女を侮っていた。そんな事をしていい相手じゃないのに。

「貴女、最高よ。その覚悟があるなら、こちらも全力で倒しに行きます」
「はい、ありがとうございませす」

その言葉は敬意を表すと共に、彼女への明確な宣戦布告。

こちららも彼女を倒せるように、全力でライスをサポートしないと。
それこそが、三冠へ全霊を賭ける彼女への礼儀だ。

「最後にですが……セレストレーナー」
「何かしら？」

少し考えた後にブルボンは話を切り出す。

「あなたが私のトレーナーだった場合、菊花賞は出走させますか？」

「そうね……私だったら回避させるわ」

ブルボンは『努力は限界を超えられる』と言って、ダービーでそれを見せてくれた。しかし『努力では超えられないもの』は存在する。

それは生まれ持った肉体の強度だ。

「坂路4本に基礎的な訓練、それ以上の筋トレ。普通ならオーバーワークなの」

彼女のトレーナーもきつと、それを理解して全ての責任を負うつもりで許可してるの
だろう。

「菊花賞を越えてしばらくすれば、きつとあなたは限界が来る……」

考えたくもないが、走者人生の進退に関わる故障が発生する可能性もある。

「わかっていません。しかし私はこの道を選びました。そしてマスターも選んでくれました」

彼女も覚悟の上。と言った表情を見せる。

きつと、俺なんかが入り込む余地がないぐらい強い想いなのだろう。

俺に言えること。

それは……。

「貴女は良いトレーナーに出会えたわね」

「この一言だけだった。」

「はい、自慢のマスターです」

あまり表情を崩さなかった彼女が、明確に笑みを浮かべて誇らしげに言う。全身全霊で事に挑むために、一蓮托生の想いで走る二人。

そんな彼女たちに俺ができることは一つ。

どうか運命に屈せず、無事に走り続けられます様に。

……そう祈ることだけだった。

「お姉さまー！」

そんなやりとりをしているうちに、準備を終えたライスの姿が見えた。

とてとて。と走ってくるライス。

ブルボンを見つけると、嬉しそうに笑みを浮かべる。

「ブルボンさん、こんにちは」

「はいライスさん。新トレーナーとの仲も良好そうで安心しました」

「ブルボンさんは何してたの……?」

「ライスさんの新トレーナーさんに挨拶を」

ブルボンは少しぎこちなく笑むと。

「あなたは良いトレーナーに出会えましたね。ライスさん」

「ふえ……?」

そう言われてライスは少し首を傾げるが、すぐに言葉を返す。

「うんっ、自慢のお姉さまなの！」

「それは何よりです。では、私はこれで」

「ええ、またお話にきて頂戴ね？」

「はい、セレストレーナー。菊花賞、楽しみにしています」

溢れ出る喜びを抑え、もう冷静さを取り戻したのか、ブルボンはいつもの声色を取り戻していた。

彼女は無表情なまま一礼すると、そのまま『マスター』の元へと帰っていった。

「ブルボンさん嬉しそうだったね」

「そうね、ライスというライバルに出会えたことが嬉しいって言ってたわ」

「そ、そうなの？」

「ええ、だから、そんなブルボンのためにも……練習を頑張らしましょうか！」

「うんっ！ お姉さま！」

かくして、続々と集まってくるチームメンバーと共に、初日のトレーニングが始まったのだった。

決闘

「カフェ、少しストライドが短いわ、後10cmで良いから先に足を下ろす様に意識してみて」

「はい、トレーナーさん」

いつもより順調にトレーニングが進んでいる。

いつもなら、ゴール付近から双眼鏡で走行フォームを確認していたのだが、今日はカフェと並走しながら確認をしている。

近くでフォームを見れるから、繊細な筋肉の動きがわかるし注意点を見つけやすい。

その場で指摘できるしレスポンスも早い。間違いなく、この体の利点と言ったところだろう。

そして何より、並走することで俺の欲求も満たされる。

この体になってから、ターフを走りたくて仕方がないのだ。

これはウマ娘の本能なので、仕方がないことだろうけど。

カフェは意識したのだろう。

ぐんっ、と速度が一瞬だけ上がる。

デビューしていないのに、もうすでに自分の走法をモノにしている。こう言ったセンスは類稀なるものだ。

「さて、今日はここまでにしませうか」

カフエと一緒にゴール版へと戻ってくると、速度を緩めて止まり、ふう。と息をつく。つかれましたか……？」

「私は大丈夫。貴女は？　あまり無理をはいけないし、ちゃんとクールダウンするのよ？」

「はい、もちろんです」

「カフエは先にながって良いわ。トレーニング内容は追ってメッセージに送るわ」

「わかりました。トレーナーさんは……？」

「私はライスたちの様子を見に行くわね」

「そうですか……ではまた明日……」

カフエは少し残念そうな表情を見せたが、大人しく練習場を去っていく。

俺は彼女を見送ると練習場を見渡した。

マックインとライスの姿を見つけ、その練習風景を見つめる。

渡したトレーニング表通りにトレーニングを進めている様だった。さすがはマック

インと言ったところだ。

イベント用の観客席の近くに設けられている、選手用の控えのベンチに置いておいた書類に目を通す。

これにはメンバーのトレーニング要項をまとめている。
全員分……。

破天荒すぎて、ゴルシのトレーニング内容はまとめ切れていないが、とにかく一番重要な書類だ。

俺の三年間のノウハウが詰まっている。

「順調みたいだな」

ターフを見ると、ちょうどライスとマックイーンがゴール板へと戻ってきたところだった。

俺はタオルとスポーツドリンクのボトルを持って、彼女たちに駆け寄る。

「二人ともお疲れ様」

それを差し出すと、二人に笑顔を向ける。

「お姉さま！」

「トレーナーさん。言われていたトレーニングは終わりましたわ」

「ありがとう。マックイーンは将来は良いトレーナーになれるかもしれないわね」

彼女はもはや、俺のサブトレーナーと言っても過言ではないほどに練習を手伝ってく

れている。

彼女がその気なら、引退した後にこちらの道に引き込んでも良いかもしれない……。

気が早いか。

「ふふつ、あなたには敵いませんわトレーナーさん」

「そんなことないわ。貴女がいるから、順調にトレーニングが進んでるんですもの……つと。とりあえず、今日のトレーニングは終わりね」

一緒に抱えて持ってきた書類を確認しながら、二人に一枚ずつ紙を渡す。

「これ、次のトレーニング内容の詳細よ。確認しておいてね？ わからない時は、明日のブリーフィングまでに質問をまとめておいて頂戴」

「わかりました」

「うんつ、お姉さまー！」

「ちゃんとケアを忘れない様にね？」

「トレーナーさんは、この後はどうするんですの……？」

「ジムのほうに行つて、ダイヤの基礎トレの確認をしようと思つてるわ。その後は記者のインタビュー……やること山積みね……」

いつもハードなスケジュールだったが、今日は別格に忙しい。

その後は部屋に戻つて、残っている書類の整理を行わないといけない。

「ライスもついて行っていい……?」

「ううん大丈夫。それより、しっかりと休んで欲しいの」

夏の強化合宿も近い。

今は調子を保ちつつ、いかにトレーニングをできるか。

バランスをとるのが大切な時期だ。少しでも休める時に休んで欲しい。

「ライスさんは先にご上がってください。わたくしはレースの予定もありませんし、トレーナーさんの補佐をする事にしますわね」

「マックイーンも休憩を」

「良いですわよね?」

マックイーンは、ぐーっと近づいてニコニコと主張してくる。

「……そこまで言うなら。わかったわ」

思わず同意してしまった。

まあ、マックイーンは年内はレースに出ないわけだし……いいか。

そんなやりとりに、ライスはクスツと笑っていた。

「じゃあライス。気をつけて帰るのよ?」

「うんっ……! また明日ね? お姉さま、マックイーンさん」

ライスを見送り、俺たちはジムへと向かうのだった。

.....

.....

.....

ダイヤはまだ本格化に至っていない。

なので基礎的なトレーニングを行っているところだ。

筋トレを中心に、レースに耐えられる体を作れるトレーニングを提案している。

本当はつきつきりで、手取り足取り指導できればいいのだが、担当が多いとそこまで手が回らないこともある。

今はライスとカフェに専念したい。ということは伝えてあり、ダイヤもそれに同意してくれている。本当にいい子だ。

ありがたい事に、デビュー前のトレーニングの一部は教官に委託することができる。

今のところは、トレーニング計画を渡せばなんとかなる。

しかし、デビューしたあとのことも考えなくては……そろそろサブトレーナーでも雇うべきだろうか。

いつまでもマックイーンに頼むわけにもいかないし。

「また考え事してるんですの？」

「ん、いやまあ、してないって言う嘘になるわね」

「ダイヤさんの事ですか?」

「ええ、彼女のデビュー時期を考えてただけけれど……。この話はここでしないほうがいいわね」

俺はちらりと後ろを見る。

記者たちは俺たちに質問こそしないが、邪魔しない程度についてきていた。

若干、鬱陶しくもあるが、変な印象も与えたくないため無視を続ける。

「そうですね。とりあえずダイヤさんのところにいきましよう」

そんなやりとりをしているうちに、俺たちはジムへと到着した。何人かのウマ娘が自主トレを行っている。

俺たちが入ってくると、彼女たちはトレーニングを止めてこちらを見つめてきた。

「セレストレーナー……!」

「うそつ、こんなところにつ?!」

慌てて身嗜みを整えるウマ娘たち。

別に王族やお偉いさんが来たわけじゃないのだから、トレーニングを止める必要はないのに……。

さてダイヤはというと、部屋の奥の方で他のものに目もくれず、バーベルスクワットを続けていた。

重量は言いつけ通り50kgで、しっかりと約束を守ったトレーニングをしている。ウマ娘的には少し軽い重量だが、故障を起こすわけには行かないので、これぐらいがちょうどいいだろう。

彼女は最後の一回を上げ終わると、ずしんと地面にバーベルを落とす。

「ダイヤちゃん。お疲れ様」

「あつ！ トレーナーさん！ マックイーンさんも！」

「今日も励んでいる様ですわね」

ダイヤは俺を見つけるなり、真剣な表情が笑みに変わる。マックイーンもいるから嬉しき倍増といった表情だ。

まるで子犬の様に駆け寄ってくると、忙しなく尻尾を揺らしている。

「今終わったところなんです。えへへ」

「今日もお疲れ様。余裕があるみたいだし、明日からはもう少し負荷を高めてみようかしらね」

「はい！ 私はまだまだやれますよ！ デビューだつてすぐに！」

俺は、ぽふつと彼女の頭を撫でる。

「んっ……」

「焦らないの。貴女は本格化を迎えればきつと輝ける。そして私が導いてみせるわ」

焦りがちな彼女を抑える様に優しく言い聞かせる。

「トレーナーさん……」

焦る気持ちはわかる。

ダイヤはウマ娘のいなかったサトノ家の待望のウマ娘なのだ。

望まれたウマ娘――

そう呼ぶ声も少くない。

家の名を背負つてるところは、マックイーンと似たところがあるだろう。

焦る彼女は、まるで初期のマックイーンを見ている様だった。

「信用できない?」

「いえー! そんなことは……ただ私は『キタちゃん』と……」

そして、ダイヤが焦る理由はもう一つ……。

間違いなく、同期に入ってきたキタサンブラックにもあるだろう。

入学する前から親交のある『キタちゃん』と一緒に舞台に立ちたい。それが彼女の願

い。

実を言うと、キタちゃんの方が成長が早い……。

このままいけば、デビューはキタちゃんの一年後になるだろう。おそらくクラシック戦線で戦うという夢は叶わない。

トレーナーとしては彼女の夢を叶えたいが、勝てない戦いに出すほど愚かでもない。万全に体が出来上がってないのなら、故障の原因にもなる。それだけは絶対に避けたい。

「わかってるわ。期待に添える様に、私も考えてみるわね」

「大丈夫ですわダイヤさん。私もできる限りサポートしますので」

「トレーナーさん……。マックイーンさん……」

キタサンブラックの担当は『トウカイテイオー』のトレーナーだったか。

今度、一度話してみてもいいかもしれない。

「とにかく今日は……」

「おー？　なんだ新しいトレーナーは馴れ合いが好きなんだな？」

トレーニングの終わりを告げようとしていたところ、突然、部屋に響き渡った声。

その方向を見ると、ニヤニヤを薄ら笑い浮かべる男性トレーナーの姿があった。

「何かご用でしょうか」

明らかに第一声が好ましいものではなかったもので、俺は警戒する。

男は俺に近づくと、見下ろしながら嘲笑する。

「気にいらないんだよ。いきなり入ってきて、ベテランのトレーナー面しやがって」

なるほど。

一人ぐらい出てくると思っただが、そういった妬みを俺に向けてきたわけか。

「あなた！ なんのつもりですの！」

「そうですよ！ トレーナーさんにひどいこと言わないでください！」

二人は俺とトレーナーの間に立ち、耳を絞る様に後ろに倒している。

今にも噛みつきそうな勢いだ。

「本当のことを言ったまでだ。なあメジロマッククイン、サトノダイヤモンド。俺のチームにこい！ そんな実績のないトレーナーより、俺みたいに重賞を取ったことのあるトレーナーの方が、お前たちを勝たせることができる。悪くない話だろう？」

……。
相当地に自信があるのだろう。まあ、トレーナーは自信過剰なぐらいの人も多いのだが

ウマ娘に過度なストレスをかけて、掛からせて怪我でもしたらどうするつもりなのだろうか。

まだマッククインもダイヤも、そこまで至っていないので事を見守る。

「貴方が？」

「爆笑ものですね」

嘲笑う口調で男性トレーナーに返す二人。

「お断りですわ。貴方のもとで走るぐらいなら、ここで自刃を選びますもの」

「同じく。無礼な殿方とは関わられませんので」

その言葉に男性トレーナーは顔に怒りを浮かべる。バ鹿にされたことが相当に嫌だったのだろう。

「くそつ、言わせておけば……！　おい、お前！」

その怒りは、俺に向けられる様だ。

年下に完全に言い負かされている姿は、なんとも滑稽だったが……。

「なんででしょうか？」

「澄ました顔しやがって……俺と勝負しろ！　勝負して負けたら、アジエナを俺に渡せ！」

「はあ……」

チーム全員の特別移籍希望とは、相当に強欲なやつだ。まあ、それがこの男の真意ではないだろうが……。

押し込めることができなくて、ため息を出してしまう。

猫をかぶっていたのかもしれないが、よくもまあ中央の面接試験を通ったものだと呆れる。

「お断りします」

「くつ、ウマ娘もウマ娘なら、トレーナーもトレーナーかよ」

こんなやつに構ってる時間が惜しい。話すだけ無駄だからだ。

この後、記者たちのインタビュにも答えなくてはいけないのに。

「マックイーン、ダイヤ。もういくわよ」

話はきつと平行線だ。早々にキリをつけて、去ろうとした瞬間だった。

「くそ、所詮ヘボウマトレーナーかよ」

男性トレーナーの捨て台詞。

俺の耳にもしつかりと聞き取れた言葉、それは俺にとって響くものではなかったが。

「このっ！」

スプリンターよりも速く反応したのはマックイーンだった。

葦毛を翻し、男性トレーナーに詰め寄ると、その胸ぐらを掴む。

「やめなさいマックイーンっ！」

俺は叫ぶ様にマックイーンを抑制する。しかし、俺の声は届かない様だった。

「トレーナーさんへの侮辱。それはメジロへの侮辱！ 到底許せるものではありません

わー！」

ぎりぎり、と胸ぐらを締め上げるマックイーン。

「くっ、はっ、うっ、勝負に負けることが……怖くて逃げるトレーナーのことを、ヘボって言うて何が悪いんだ」

男性トレーナーは悪びれる様子もなく、謝罪の仕草すら見せない。

掛かっているウマ娘に掴まれているのに、悪態をつけるのは相当な根性だ。

「マックイーン！ やめろ！」

俺は思わず、いつもの口調で叫ぶ。

「つ……………す……………は……………いいでしょう……………」

マックイーンは、背後の俺をちらりと見る。鋭い表情に俺は息を飲んだ。

最後の理性が働いたのか、彼女はどうか気持ち落ち着ける様に、深呼吸をした。

そして男を雑に投げ捨てる様に解放すると、マックイーンは自らの胸に手を当て。

「貴方が提示した決闘、受けて立ちましょう。チームアジエナの名にかけて……………」

まるで決闘を受ける騎士の様に、怒りを隠し凜とした表情で、男が提案した勝負に乗ると宣言する。

その言葉に男性トレーナーはニヤリと笑う。

やはりこの男の真意は、マックイーンの移籍とか、アジエナが欲しいとかではない。

『この勝負』にあるのだろう。

ならば、なおさら受けるべきではない。

「マックイーン！ その勝負は……………」

「トレーナーさん、少しお静かに願います」

「っ……」

マックイーンの鋭い視線に、その威圧感のある言葉に、俺は言葉をつまらせた。これが現役最強馬の本気の怒り……。

静かな言葉で話す彼女だが、部屋が震える様な怒りだ。

「へへっ、言質は取ったからな！」

男は懐からレコーダーを見せると、マックイーンという言葉を再生する。

「おいおい、すげえ展開になったな」

「決闘か。トレーナーの威信をかけた戦い。いい記事になりそうだ」

「レースの公開はあるのかしら」

一部始終を見ていた記者たちが騒ぎ出す。

ああ、そうか……。

男がなぜ今のタイミングで話しかけてきたか、その理由がよくわかった。

記者たちを、この決闘の見届け人にするつもりだったのだ。

「勝負内容は追って伝えるからな！」

男はそう言い残すと、走ってその場を去っていった。

これは……まずいことになった。

「マックイーン……」

「問題ありませんわ。私が負ける理由がありませんもの」

「そうですよ！ デビューしてない私でも、あんなトレーナーには負けません」

そう。

そうだろう。

もちろん真面目に戦えば、ダイヤはともかく、マックイーンには勝てるわけではない。

「そうじゃないのよ。あのトレーナーは勝負内容を伝えなかった」

「その何か問題なんですかの……？」

「おそらく彼が挑んでくる勝負は……短距離」

「っ……………」

マックイーンは青ざめる様に言葉をつまらせる。

そう、適正外の距離で、かつ重賞級のウマ娘を担当しているのであれば、あのトレー

ナーでも勝機は十分にある。

アジエナは中、長距離のチームなのだ。

俺もプリンターを教育したことがない。もちろんアジエナには、短距離の適性を

持ったウマ娘はいない。

「卑怯ですわ！」

「そうです！ 卑怯です！」

「ええ、とつても卑怯だと思っわ。でも……」

「でも……?」

言葉を止めた俺に、マックイーンは恐る恐る聞き返す。

「それも真意じゃない。彼の真意は話題を作ることよ」

だから男性トレーナーは口汚く、俺たちが挑発に乗るように攻めてきたのだ。

そして、まんまとマックイーンはその挑発に乗ってしまった。

「彼は、現役最強馬を不得意な短距離で叩きのめして『悪役』^{ヒール}としての地位を確立した

かったのよ。相当な目立ちたがりね……」

「っ、わたくし、今から勝負を撤回してきます!」

「待ちなさい!」

俺はマックイーンの手を掴むと、落ち着く様に言い聞かせる。

「断つても彼はこう言うと思うわ『勝てないとわかって、尻尾を巻いて逃げた負けウマ

チーム』ってね」

「っ……!」

そう、八方塞がり。

ようは勝負を受けた時点で俺たちは負けなのだ。

アジエナの名を貶めて、さらには悪役として確立し、メデイアへの露出増も考えてい

るのだろうか。

俺たちを話題作りの出しに使うとは、よくもまあ小賢しいことを考える。

「理事長に報告すれば」

「そうですよ!」

「ええ、でもね? それをしたら、私は完全な七光りトレーナーと認識されてしまうわ」

これも実にうまい。

メディアがあれだけ盛り上がってしまったのだ。理事長も勝負を止めることはしないだろう。

もし止めてしまえば『私情を挟む理事長』になってしまうからだ。

俺が理事長の娘と言う立場であることを、最大限に利用して見せたのだから、上手い以外に表現が思いつかない。

「でもまあ、対応策がないわけじゃないわ」

「トレーナーさん……わたくし……」

マックイーンはしゅんと耳を倒して、落ち込んでいる姿を見せる。

「いいのよマックイーン」

今にも泣いてしまいそうな表情を見せるマックイーン。

俺は彼女の肩に手を置いて、落ち着かせるように摩る。

「あなたは『アジエナの名にかけて』と言ったわね」

「ええ、確かにそう言ったはずですわ……でもそれが……う？」

「『メジロの名にかけて』とは言っていない。つまりは、出走者はアジエナのウマ娘であれば誰でもいい」

「！」

マックイーンは気づいた様に、耳をピンと立てる。

トンチみたいな話だが、証拠はあのレコーダーに残っている。誰でもいいなら、スプリンターを見つけてくればいいのだ……。

だが……。

「スプリンターを見つけてくれば、勝てるかもってことですね！」

マックイーンよりも先に、ダイヤが言い放つ。

「そう、でも……」

「何か問題が……？」

ダイヤは首を傾げる。

そう、気持ち的な問題があるのだ。

「アジエナの名を出せば、所属してくれるウマ娘もいるはずよ。でもね、個人的な決闘のために、ウマ娘をスカウトしたくないのよね……」

みんなトウインクルシリーズで走るために、トレーナーのスカウトを受ける。

決闘のためのスカウトなんて、ウマ娘を物として見ているみたいで、理に反する行為の様な気がする。

所属させたところで、俺に短距離の教育経験がないため、その後を勝たせられるかもわからない……。

「……まあ、このことはあとで考えましょう。レース内容を見てからでもいいのだし」「トレーナーさん……申し訳ありません……私としたことが……」

「いいのよ。マックイーンは私のことを思っただけで怒ってくれたんだもの。ありがとう」「それでも……っ！」

「マックイーン」

後悔に押しつぶされそうなマックイーンを、俺は思いつき抱きしめた。彼女の顔を胸に埋めさせてあげて、優しく頭を撫でる。

「トレーナー……さん……っ！」

男の頃だったら、公衆の面前でこんな事しなかつただろうな。と思いつながら、彼女が落ち着くまでそれを続ける。

周りからは黄色い歓声が聞こえる。しかし今は無視だ。

マックイーンは最初こそ驚いたが、次第に耳を垂らして落ち着いた様子だった。

「まずは出来ることをしまししょう?」

マックイーンを抱きしめたまま、待っている記者たちを見つめる。

記者たちは、先ほどの内容も含め、何かを聞き出したくて今か今かと待ちわびている。彼らの質問に答えるのが、今できることだろう。

「マックイーン? インタビュー手伝ってくれる?」

まだ小刻みに震えるマックイーンの手をぎゅつと握って、彼女の気持ちを落ち着かせる。

「トレーナーさん……はい……」

マックイーンはまだ納得いかない感情を隠せずにいたが、気丈に振舞う。

「私も!」

「ふふっ、はいはい」

隣でぴよんぴよんと跳ねるダイヤ。彼女の手も繋いで記者陣へと向き直る。

そして、降りかかるであろう質問の嵐に、気を重く身を投じるのだった。

伝説のウマ

記者のインタビューにもみくちやにされたあと、俺は部室に戻って残ってる書類の整理を始める。

これからさらに忙しくなるし、例の勝負の対策も考えなくてはいけない。

眠気を吹き飛ばすために、エナジードリンクを買ってみたが……ウマ娘の体にはあまり効果がないらしい。

これからはウマ娘用のものを買わないといけない。よく覚えておこう。

ある程度の書類の整理を終えると、休憩がてらSNSを確認する。

話題は俺のインタビュー記事と、例の出来事が半々といった感じだった。

『新生アジエナ始動当日に事件発生！ 勝負の行方は』といった記事を眺める。

「どれどれ……」

新生アジエナに立ち塞がる壁！ 立ちはだかるは重賞優勝経験のトレーナー。容姿端麗なウマ娘トレーナーはその壁にどう立ち向かうか……。

要約すると、そんな感じの内容だった。

大手の記事は、軒並み口悪く言ってきたところが完全に切り取られてるあたり、

組織^{URA}

の監修が入ったらしい。

それでも、監修を漏れる記事も存在する。悪のトレーナーが俺に対して宣戦布告とか。中央トレーナーの質の低下が問題顕著とか。

これでもまだマシな方だ。一部始終が動画に撮られていたら、これじゃ済まなかっただろう……。もつとも、あのトレーナーはそれを分かって行動に移ったのだろうけど。

「良くも悪くも話題になってるなあ……」

これは事後処理が大変だな、と他人事みたいに考えてしまう。

しかし、勝負が中止される様な状況はない様で、そこはURRも話題作りに乗ったといった感じだろうか。

エナジードリンクを一気に呷ると、くしゃつと缶を握り潰す。

どうしたものだろうか。

スプリンターを見つけるにしろ当てがあるわけじゃない。選抜レースも、もう少し先だし勝負の日時も不透明なままだ。

腕を組んで、ぎいつ、と椅子に深く座る。

バンッ！

「セレス！」

瞳を閉じて、思考の海に潜ろうとしたところだった。

声と同時に扉を開ける音が響く。

慌てて姿勢を戻すと、視線をその方向に持つていく。

「あれ？ 理事長」

そこには慌てた様子で入ってきた理事長の姿があった。

珍しく髪をボサボサと乱しているところを見るに、相当慌てていたと見える。

「帰還！ 出張から帰って、最初にやるのがメディアや理事会との話し合いとは……」

この短期間会わなかったただけだが、それでも分かるほどにやつれた様子に、申し訳なさを感ずる。

理事長をこんな姿にした理由は、間違いなくあの勝負の一件だろう。

「ということとは……もう事の顛末は知ってるんですね」

「無論！ 君への批判はくると思っていたが、まさかあんな形になるとは」

「でも勝負は止めてくれないんですね？」

そんな理事長に、少し意地悪っぽくそう言ってみる。

彼女は深くため息をつくつと、俺の前に歩いてきた。

「各社の記事こそはしっかりと監修したが、馬鹿げたことに勝負に関しては理事会も乗り気なのだ。最近では話題に欠いていたのでな……」

「さしずめ……俺の能力をみたい。と言った感じでしょうか？」

「どうやって俺の存在をねじ込んだかにしても、俺と言う存在はあまりにもイレギュラーだ。」

理事会もそんなトレーナーを、アジェナのトップに据えていいか不安に思ってる人もいるのは間違いない。

今回の一件を利用して、俺の指導力を測りたいといったところなのだろう。

「理解してるのだな……。しかし、あのトレーナーがあそこまで大胆なことをするとは」理事長は扇子を開いて、暑いのか扇ぎながら話し始める。

「彼は口こそ良くなかったが、素行が悪いトレーナーではないのだ。正直なことを言うのなら私自身、今回の出来事に驚いている」

「猫被ってた……。なんてことは？」

「数年に渡って？　ボロも出さずにそんなことできたら狂人だぞ……」

瞳を伏せ、腕を組んでそう言い放つ彼女。

最初の2文字を付けないで話すあたり、真剣に考え込んでしまっているのだろう。もちろん無理もないが。

取材が終わったあとに彼のプロフィールを見てみたが、一度の重賞優勝経験と数多くのレースで好成績を残している。

担当ウマ娘のG1出走経験こそないが、未勝利で去っていくウマ娘も多い中これだけ

の成績が出せれば、相当に優秀なトレーナーと言ったか感じである。

「彼への聞き取りを行ったが、処分も覚悟の上で「言いすぎた」と反省をしていた。近いうちに君への謝罪も行われる予定だ」

「何か処分は行われるんですか？」

「理事会と話し合うことになっているが、問題を起こしたのは今回が初めてだからな……戒告と減給処分と言ったところだろう」

「今度次第って事ですか」

メディアが今後どう騒ぐかにもよるが、今の状況じゃそんなところなんだろうな。と納得する。

「すみません理事長。こんなことになってしまって……」

出張から帰って疲れてるだろうに、変な手間をとらせてしまった。俺は立ち上がる。と、彼女の近くに立ち頭を下げる。

「気にするな。私こそ勝負を止められなかった……勝算はあるのか？」

理事長は俺を覗き込むようにして、頭を上げさせる。

「あると言つて安心させたいですが、特に何もといった感じですよ」

実際、手詰まりに近い状態だ。

マックイーンやライスは現役の選手だから変な癖をつけたくないし、短距離の適性が

皆無。カフェはフォームを作る大事な時期だし、同じく短距離適性もない。ゴルシは……ちよつと計りかねるが、中長距離タイプだろう。ダイヤに至ってはまだ走れる段階じゃない。

「スカウトするにも当てがないですからね……とにかく少し考えてみますよ」

「そうか……なにか手を貸せれば良いのだが……」

「これはアジエナの勝負です。俺も俺の指導の力を示さなきゃいけない。それができてこそ、アジエナは再始動できる」

俺が出来ること、それは実力を見せつけて相手を黙らせる事ぐらいだ。

俺は今や新人トレーナー。ここでしっかりと存在感を見せつければ、無礼られる事もなくなる。もちろん理事会も納得させることができる。

相手に利用されたのだ。こちらも最大限に利用してやろう。

「理事長、俺は勝ちますよ」

「……自信家なんだなセレスは」

俺の自信を持った言葉に、やっと安堵したのか理事長は表情を綻ばせた。

それと同時に疲れたようにため息をつく。

「お疲れのようですね……手間かけさせてしまいましたし、俺にできる事なら何でも言ってください」

「ほーう？」

俺の言葉に理事長はにやーつと笑みを浮かべる。

『なんでも』つて言うのは言い過ぎだっただろうか……？

「ではセレス。そこに座ってくれ」

理事長はソファアを指差す。意図がわからないまま、言われた通り俺はソファアに腰を下ろす。

「うむ、失礼するぞー！」

俺が座ったことを確認すると、理事長はその小さい体で、ぼふつと俺の膝の上に乗ってきた。……可愛いけど、なんなんだこの状況は。

「母を労うのも娘の役目なものな！」

「労うってこう言うことなのだろうか？ 理事長は俺の胸に頭を預けている。」

「帽子のせいで表情は見えないが……。」

「ふにゃあ……。」

猫みたいな声をあげているので、おそらくは夢心地と言った表情をしているのだろう。

「にゃー」

帽子に乗っている猫も、呆れ顔でこっちを見ている。

「普通なら母が子供にしてあげることじゃないんですか？ 誰かに見られたらどうするんです？」

「問題ない。親子のスキンシップと言うやつだ気にするな」

「そんなもんなんですかねえ……」

理事長は俺の手を握ってくる。そしてしばらく沈黙した後には口を開いた。

「私は自分の母の様な立派な存在になりたいのだ」

理事長の母といえば、前URA理事長の事だ。

もつとも俺がトレーナーになった時には、すでに膝の上で寛ぐ理事長がURAのトップに座っていたので、前理事長については詳しくないが慕われていた人物であるのは知っている。

「私に子供はいないが、母親としても立派になりたい」

膝の上でモゾモゾと動く理事長は俺と向き合う様に座って、俺を思いつきり抱きしめる。

「私はセレスにも認めてもらえる様に立派な母になってみせるぞ」

抱擁と言うにはあまりにも小さかったが、力強い抱きしめ。

母に抱きしめられた思い出がない俺からしたら、なんともいえない感情を覚える。

嬉しいとか、幸せとも違う何か。温かい様なそんな感覚にどこかむず痒い。

「えっと……なんか恥ずかしいですね……」

俺は頬をかきながら、その自信に満ちた理事長の表情を見てしまう。

「……また、トレーナーとしての居場所を作ってくれてありがとうございます。……母さん」

初めて彼女を母と呼んでみる。言った後に恥ずかしくなつて顔をそらしてしまった。

理事長……いや、母さんは少し驚いた様な表情を見せるが、すぐに満面の笑みへと変わわり。

「セレスっ……!!!」

「ちよ、くすぐりたいですって!」

まるで甘える猫の様に、顔を胸に擦り付けてくる母さん。これじゃどっちが母親なんだか。

……でもこういうのも悪くない。

今まで受けたなかつた感覚に何か満たされる感覚を覚えながら、そのひと時を楽しんでいたのだった。

……

……

……

『次は、今話題の美人ウマ娘トレーナーの話題です!』

翌朝。

昨日の取材の後、記者に『今日の取材の一部が明日の朝放送される』と聞いたので、テレビを付けて、パンをかじりながら出勤時間までポーツと眺める。

普段はあまりテレビを見なかったが、今までいい意味での俺の特集なんて組まれたことはなかったたので、とりあえずの気持ちで見ることにしたのだ。

『他チームのトレーナーからの勝負の申し込みという波乱もありましたが、毅然とした態度と凛々しい姿を印象付けるレクスセレスティアさん。新生アジエナから目が離せませんね!』

昨日の一件はかなりオブラートに包まれ、『勝負』としての部分がクローズアップされていた。

あとは、理事長が作った俺のカバーストーリーが履歴として紹介されてVTRが終わる。

『どうでしょうか謎多き彼女ですが、……さんはどう見ますか?』

女性のアナウンサーが、競走ウマ娘評論家らしき男に話を振る。

『そうですね、彼女の並走トレーニング。実に整ったフォームで、なぜ競走ウマ娘を選ばなかったか疑問を感じますね』

『なるほど』

ライスとの並走と昨日の並走トレーニングで、走るのが嫌いじゃないとわかったが、トレーナー業を疎かにするわけにもいかない。

肉体年齢はともかく実年齢は20代半ばなのだ。そもそもトウインクルシリーズの出走権利はない。

わざわざプロリーグにいくために、アマチュアから始めるわけにもいかないしな……。

マックイーンからは行儀が悪いと言われると思うが、頬杖をつけてテレビを眺める。

俺はパンを一口齧った。

『走る姿はまさに『インヴィジブル』の再来と思ったのですがね。残念です』

「っ……………」

『インヴィジブルとは？』

俺は齧った。パンを口から溢す。

まさかその名前を今聞くことはないと思ったので驚いてしまった。

評論家の男の話を、俺は聞き続ける。

『インヴィジブルは欧州で活躍して、わずか4戦で伝説となったウマ娘です』

その存在はよく知っている。

インヴィジブルの生涯成績は4戦4勝。そのうち3勝がG1と言うイギリスのウマ娘だ。

その成績なら他にも有名なウマ娘がいるかもしれないが、彼女が伝説と言われる所以はレースの内容にある。

彼女は欧州三大競走と名高いレースを連勝したのだ。

新馬でありながらOP戦をいきなり勝ち抜き、2戦目ではいきなり『英ダービー』を勝利。

その勝ち方も、エプソムレース場の最終コーナーの坂を降りたところから完全に囲まれていたのだが、最終直線で一気に外に抜け出し約7バ身を抜き去り、強烈な末脚で差し切ると言った強さを見せた。

3戦目は『キングジョージ6世&クイーンエリザベスステークス』この勝利も劇的なものだった。

残り数ハロンのところで、内を差してきたウマ娘と接触。彼女は外へと弾き飛ばされてしまう。

普通のウマ娘では集中力が切れてしまうとところだが、彼女は違った。

そこから火のついた彼女は、一気にスパートをかけて差し切つてのゴール。

4戦目は彼女の引退レースとなった『凱旋門賞』日本の悲願であり、欧州最高峰と名

高いレースだ。

彼女はロンシャン特有の最終直線前の緩やかなカーブ『フォルス・ストレート』から仕掛けにかかる。

大きく抜け出した彼女だったが、直線に入ったところで後方から追い上げる馬群に沈みかける。

しかし――

まるでロケットの二段目を噴射した様な凄まじい末脚で、後続との差をつけてゴール板を駆け抜けた。

これが彼女が伝説と言われる所以。

負けなしの汚れなき女王。

インヴィジブル
見えざる末脚。

父さんが何回もレース映像を見せてくれたので今でも覚えている。

彼女は惜しまれつつ引退し、その後は母国でトレーナー資格を獲得して、同じトレーナーとして交友のあった日本人男性と結婚し日本へ渡った。

『そんな彼女は大病を患って以降、精神的に不調を訴えていましたからね……今では中東の名門チームで主任トレーナーをしています……』

評論家の言うとおり、彼女は『男の子』を出産後に大病を患って『子供を産めなくなっ

てしまった』のだ。

そして精神的に不調を訴えてトレーナー活動も休止して、日本人男性と離婚し本国へと戻った。

それから数年後トレーナー業に復帰し、現在では中東の名門チーム『グリマルキン』の主任トレーナーをやっているらしい。

『そんな彼女の子供……と言うわけじゃないでしょうが、レクスセレスティアさんは養護施設の出身と言うことなので、もしかして？』と思うジャーナリストも多いみたいですね』

そんなこと噂されてるのか……。

そう言う記者はきつと陰謀論とかも好きなんだろうな。と呆れつつ、俺は口からこぼしたパンをティッシュで包んでゴミ箱に捨てた。

『へえ、そうなんですね。とにかく、彼女の今後に目が離せません！』

アナウンサーはそれを軽く流すと、次の話題に話を進めた。

「インヴィジブル……ね」

まあ、その噂も実のところ間違いではない。

俺の母の名前は『インヴィジブル』

欧州三大競走を無敗で制したウマ娘なのだから。

雨の日に：マンハッタンカフェとの出会い

雨は嫌いではなかった。

耳に届く全てを包み込む音に、まるで世界に二人きりになってしまったかのように思えるから。

心地よい音が耳をくすぐり、時が流れていく。

時間を見ると、午後六時を少し過ぎたところだった。

「……困りました」

雨は嫌いではない。

そんなことを思いながらも、少し困ってしまっている。

「そんなに降られては……好きな雨も嫌いになります……」

私は湿気を含んで艶やかに光る青鹿毛の尻尾を振りながら、空を仰いで小さく愚痴つた。

この雨、止む気配がない。

あいにく傘は持っていないし、ここは人気の少ない校舎裏にひっそりと建てられている東屋。誰かが偶然通ってくれるとは思えない。

どうしてこんなことになっているか。

「私をどうしたいというのですか？」

私は雨の中でも関係なく、跳ね回っているあの子に小さく声をかける。

あの子とは、私だけが見ることのできる『お友達』

周りのヒトたちは、あの子を私のイマジナリーフレンドとか、私が幽霊を見てるとか、そんなことを言っていて気味が悪いというが……。目の前にしつかりと存在してるのだから仕方がない。

そんなお友達が今日はやたらと元気で、何かあるのだろうかとついて行った。

ついて行ってたどり着いたのがこの東屋で、そしてここに入った途端に土砂降りの雨。

何度も言うように雨は嫌いではない。

そのうち止むだろうと雨宿りをして早一時間……。

結局、雨は止む気配を見せず、帰るタイミングを見失っている。

そんなことも関係なしに、あの子はずっと雨の中を跳ね回る。何がそんなに嬉しいのだろうか……。

「ちよつといいかい？」

「っ……い！」

俯いて、小さくため息をつこうとした時だった。

ふと聞こえた声に、視線をそちらに向けると、一人の人間の男性が傘をさして立っていた。

雨の音がかき消していたのだろう。こんなに近くに来るまで気づかなかった。

「校舎の窓から姿が見えてき。もしかして傘がなくて困ってるのかと思つて」

男性はひよい。と二本の傘を見せる。

「俺は一応この学校のトレーナーをやつてる者でね。そつち行つてもいいかい？」

そして私が一人いる東屋へと入つてきた。傘を畳んで合計3本の傘を持つている。

私は目を伏せがちに、その二本の傘を見る。

「もしかして……」

彼もあの子が見えているのでは？ そう思い声をあげたが、その続きを發するのをやめた。きっとまたいつもと同じように揶揄われているのだろうと思つたからだ。

「もしかして。なんだい？ 余計なお世話だつたりしたかな？ まあ、世の中には雨に濡れながら散歩する奴もいるもんな……」

苦笑を浮かべて雨空を見つめながら乾いたように笑う彼。

揶揄うとか、馬鹿にすると言つた感情が微塵も感じられない口調。しかし、あの子が見えている様な気もしない。

「……擲揄いにきたのですか?」

いつもなら無言を貫き通すところだったが、今日はどうやらほんの少しの好奇心が口を動かした。きつと雨のせいだ。

「ん? ああ、これのことか」

彼は二本の傘をひよいと持ち上げる仕草をして、話を続けた。

「気を悪くしたら悪かったよ。マンハッタンカフェさん」

「……名前を知っていると言うことは、噂も知っているのですね」

ほらやっぱり。

知っていてそんなことをするんだ。と私はため息をついた。

しかし、彼は悪びれもせず話を続ける。

「まあ、噂ぐらいはね。それにこれは馬鹿にしにきたわけじゃないんだ」

「では、なぜ?」

否定する彼。呆れ気味に私は理由を聞き返した。

「君のお友達がいるかもしれないのに、傘一本はなんか申し訳なくてき……さてよ、目に見えない子が濡れるのか……? うーん……?」

私の問いに、彼は唸りながら真剣に考え込む。

(この人は一体……?)

言葉から感じ取れる無垢な感情、今まで私をバ鹿にしてくれた者たちとは違う感覚。

「と、とにかく気を悪くしたら悪かった。もちろん友達も……怒ってたりしないよな？」
心配した彼は、キョロキョロと周りを見てお友達を探す。

あの子はあの子で雨の中を走り回っている。

私一人が、こんな力オスな空間にポツンと残されている。

「元気に雨の中走り回っていますよ」

「まじか……。傘必要なかったかな……。？」

私が見つめる先を彼は追うように見つめる。そして私に視線を戻すと、苦笑を浮かべていた。

変な人。本当に変な人だ。

それと同時にそんな変な人に興味が出てしまった私も、等しく変人なのだろう。

「見えていないのに、私の言ったことを信じるんですか？」

再びの問いかけ。私の言葉に彼は小さく笑みを浮かべると、静かに語り始めた。

「目に見えるものが全てじゃない……なんて、ありきたりな言葉かもしれないけどさ」

彼はあの子がいる場所を見つめて続ける。

「目に見えるものが全てなら、希望や奇跡だって存在しないものになっちゃうじゃんか。

そんなの面白くない」

恥ずかしがりもせず語れる彼。

その言葉を聞いて、私の胸が少しだけ高鳴るのを感じる。

「説明できなくて、奇跡としか言いようがないものを感じたことがある。それだって確実に目で見たものじゃないんだ」

いつの間にか、私は彼の言葉に聞き入っていた。

「だから、君のお友達が居ても何もおかしくない。それに存在した方が楽しいし、なんなら俺も友達になりたい……かな」

彼がそう言い終えると、沈黙が訪れる。

雨音だけが響いて十数秒。

「くすっ」

はじめに沈黙を破ったのは私の方だった。無意識に微笑みがこぼれてしまったのだ。自分でも意外だと感じる。

彼のまったく臆することなく語る姿が、まるで希望に満ちた冒険家とか、竜に挑まんとする勇者にすら見えた。

まるで物語の人物だ。

「……笑うことないだろ？」

むーっと少し拗ねたような表情を見せる彼。

なんとさえばいいだろうか。少し愛らしくも感じてしまう。

「ではあなたは……ルビーの大地や、サファイヤの海があると私が言えば、あるって信じてくれるんですか？」

笑いまじりに私は冗談っぽく言ってしまふ。彼は同じように笑みを浮かべてくれた。

「ああ、なんならダイヤモンドの山とか、エメラルドの川なんてのもいいな。きつと綺麗だ」

雨音にかき消されて、他には聞こえない二人だけの声。

「そんなに綺麗な場所、私一人ではもつたいないですね」

「ははっ、なんなら一緒に探しに行くか？」

「くすっ、それではまるでスカウト……」

その言葉を呟きかけて、私はハッと今日のことを思い出す。

やたらと元気が良かった『お友達』

ここに連れ込んだのは、もしかして彼と私を引き合わせるためだったのではないだろうか。

そして彼が言った言葉。

目に見えるものが全てではない——

こういうのはなんと言うのだろうか。

目に見えないけど、確かに感じた感覚。

ありきたりな言葉で言うのなら。

運命。

目に見えないけど、きつと存在しているもの。

「あつ、そうだな……。まずいまずい、軽率にこんなこと言うべきじゃ」

「いえー」

私は自分でもびっくりするぐらいの大声をあげてしまう。彼はキョトンと言葉を失った。

「私……私と探しに行きませんか？ ルビーの大地、サファイヤの海、ダイヤモンドの山に、エメラルドの川……」

もしかしたら彼は、私の全てを受け止めてくれる人かもしれない。

微塵の疑問も感じず、あの子のために傘まで用意してくれた彼ならばと、私は手を差し出す。

運命を逃すほど、私はバ鹿じゃない。

「よろしく……。お願いします……」

私はじつと彼の顔を見つめる。

彼は少しだけ考え、そつと私の手を握った。

「ああ、一緒に見つけに行こう！ まだ目には見えないけど、確かに存在している場所を」

これが私。マンハッタンカフェと彼の出会いの話。

雨は嫌いじゃない。

彼との出会いを雨音が思い出させてくれるから。

カワイイの化身

朝日の満ちているトレセン学園への道を歩く。

ここは職員寮からの道なので、当然のようにウマ娘の姿は見当たらない。

まあ、ウマ娘の職員がいないわけではないのだが。それでも絶対数が少ないわけで、俺は目立った存在だろう。

いろんな意味を含んでいるであろう視線には、早いものでもう慣れてしまった。

そんな視線を受けながら、俺は内心いろいろなことを考えて歩みを進めていく。

トウインクルシリーズはウマ娘が行う競技の中でも、最も商業的だといっても過言ではないだろう。

古代から続く『競バ』と呼ばれる競技は、時代の流れとともに今の形へと変わった。

最初は力を示す純粋な競走として、のちに賭け事の対象にもなり、それも廃れて現在ではアイドル的な要素も加わって、トウインクルシリーズが成立した。

トウインクルシリーズの財源は、各レース場の入場料や、ライブのチケット、そして様々なメディアアミックスである。

有名なウマ娘ともなれば、映画や小説、果てまでぬいぐるみやお菓子といったもの

のモチーフになる。

走者寿命の短いウマ娘にとっては、レース賞金とともに貴重な収入源の一つだ。

もちろん、トレーナーの収入もそういったものの一部から支払われる。一部は出来高制なのだ。

そういった資金の中からサブトレなどを雇って、チームを運営していくもののだが……。

人材の当てもない自分からしたら、今は関係ない話である。

さて、俺はなぜそんなことを考えていたか……。

トウインクルシリーズは、競争の中でもエンタテイメント寄りである。

だからこそ、前のような暴挙がある程度許されるのだ。この傾向は最近では危ぶまれていくことの一つなのだが……。

まあ言ってしまうえば『面白いかどうか』それが重要視される。

もちろん競争は本気でやっているため、八百長などは行われていないが、それでもエンタテイメントであることには変わりがない。

挑戦状とか、宣戦布告とかライバル関係とか。

そういった話題も好まれる業界であることには変わりないのだ。

実をいうと、前回の喧嘩を吹っかけてきたトレーナーの気持ちは痛いほどわかる。

話題にならなければいけない理由があるからだ。

レースの出走権というものは、レースの勝ち数やファンの投票で決まることが多い。メイクデビュー、オープンクラス、重賞と段階を経てそのランクを上げて最終的にはG1を目指す。

その勝ち数と共に、重要なのがどれだけファンを獲得できるか。である。

ウマ娘はファンに推されて走る。と言われるぐらいにファン数は重要になってくる。例えばマックイーンの場合だが、聞いて驚いたが公式ファンクラブの人数は20万人を超えるらしい。

このランクまでくれば、どのレースに出たいといっても優先的に出走できるだろう。

ではあのトレーナーのウマ娘のファンはどのくらいだろうかというところ。

資料を調べてみると、概ね1万5000弱。

未勝利に終わるウマ娘も多い中、これは十分な数ともいえるのだが……。

短距離路線はG1レースも少なく、注目を浴びにくいいためかファン数を獲得するのが難しい。

活躍してもこのクラスのウマ娘が出走権を取り合ってしまうのだ。

この子は短距離での重賞勝利もあるが、去年のスプリンターズS、今年の高松宮記念には惜しくも漏れてしまったとのことだった。

ファン数獲得のための、決定的な何かが欲しかったのだろう。

ウマ娘の走者としての期間は短い。本格化を迎えていたらなおさらのことだ。

俺も同じ立場であれば、何か行動を起こしていたかもしれない。

しかし、どうしたものか。

短距離のウマ娘をトレーニングしたことはないが、この勝負を負けるわけにはいかない。

この勝負に勝たなければ、この姿になっても立場を守ってくれた理事長にもチームのメンバーに示しがつかない。

いわばこの勝負は、俺が正当なるアジエナのトレーナーとして示すための闘い。

何としても勝たなければいけない……。

そんなことを思いつつ歩いていると、いつの間にか校門の前まで来てしまっていた。

「ふう……」

考えても仕方がない。深くため息をつく、俺は今できることをしようと気持ちを切り替えることにした。

「あれ？」

考え事で周りが見えていなかったのだろう。

気が付くと校門には、人だかりができていた。その服装を見ると、トレセンの制服で

あるため生徒であることはわかる。

皆それぞれと耳をそばだてて、しっぽを振る姿は何かを待っているように見えた。興味こそ特になかったが、ここに固まっているとほかの者の邪魔になるだろう。

「あの、何かあつたんですか？」

注意をかねて、何かを待っている鹿毛のウマ娘に声をかけてみる。

「あつ、ああつ?! セレストレーナーっ!」

慌てた様子で声を上げる鹿毛のウマ娘。驚かせてしまっただろうか。

「驚かせてごめんなさいね? えっと……、みんな誰かを待ってるのかしら……?」

慌てる彼女を落ち着かせてさらに情報を聞き出す。理由も聞かずに注意するのも気が引けるし。

「ええっと! はいっ! あのCurrenが転校してくるんですっ!」

この集まりの規模を考えるに、学園に知り合いがいるから集まっている。といった感じではないだろう。

きつとその『Curren』とか言った子は、この集まっているウマ娘のアイドル的存在と考えるのが正解だろう。雰囲気もそんな感じではあるし。

「へえ、これだけ集まるってことは、そのCurrenさんって子は有名人なのね」

——ピキーン

俺がその言葉を発した途端、背筋が凍りつくような感覚に襲われた。

そこに集まっていたウマ娘が全員、俺を見つめて固まっている。

「あのつ、失礼ですが……セレストレーナーはCurrenをご存じでない……？」

震え声で語り掛ける鹿毛のウマ娘。その顔はどこか引きつっているようにも見えた。

「えっと、ごめんなさいね……？」

「ご存じないのですかっ！ Currenといえば、ウマスタグラムでフォロワー300万人を誇るカワイイの化身！ Currenをご存じでない……？」

割って入るように別のウマ娘が語り始める。相当な早口で言葉を紡ぐ姿に、俺は少し引いてしまっていた。

どうやらそのCurrenというウマ娘は、SNSでは相当な人気者らしい。

Currenに対しての愛を語るウマ娘を後目に、端末でウマスタを確認する。

説明通りフォロワーは300万人超え、しかも自撮りの投稿には毎回5万近くの反応がついている。

(どうやら有名つてのは本当みたいだな)

俺自身こっち側には無頓着だったし、これからはチームの情報発信の面も含めて勉強するべきなのかもしれない。

そうしているうちに、校門の前に高級そうな一台の車が止まる。そして、一人のウマ娘が降りてきた。

「ありがとうございましたー♪」

かわいらしい声の葦毛の少女は、車の運転手に笑顔でそう伝えると、集まった生徒たちには笑顔を向ける。

その瞬間だった。

「「「キヤーーーーーー！「「「

黄色い声援を通り越してもはや悲鳴。あまりの声に俺は耳を押さえて立ち尽くす。

数十人集まったウマ娘たちは、感動に泣く者、もはや動けずに石化したように固まるもの、サムズアップしながら気絶するもの……。

それぞれの反応を見せながらCurrenを出迎えていた。

「もしかして、カレンのために集まってくれたの？」

満面の笑みを振りまきながら、普通ならあざとらしさを感じるポーズを流れるように決める。なぜか彼女がそのポーズをすると、いやらしさを感じなかった。

それが当たり前のような、それが彼女の自然体なのだろう。

「はいっ！ Currenのためなら私たちはっ！」

Currenの愛を語っていたウマ娘が、びしっと姿勢を正しながら話す。

「ありがとう♪ でもでも、ここに集まったらみんなの迷惑になっちゃうから……」
あたりを見回すと、Currenは通りづらそうにしているウマ娘を見つけて。

「後で全員とツーショットできるようにするから、いったん解散っ。お願いしてもいいかなー？」

「二二はいつ！ カワイイカレンチャン!!!」

その一言を受けると、集まっていたウマ娘が一瞬にしてその場を離れていった。

統率の取れた動きにあっけにとられていると、解散していくウマ娘たちに手を振る彼女と目が合ってしまった。

「あーっ！ もしかして、セレストレーナーですか？」

足早に駆け寄ってくる彼女は、上目遣いにこちらに視線を向ける。

「え、ええ……えつとあなたは……そのCurrenでいいのかしら……？」

「はーい♪ カレンチャンです♪ えへへっ、ニュースで見た時から会ってみたかったの！」

「こ、光栄だわ……？」

ぐいぐいと勢い良く迫ってくるカレン。

これだけフレンドリーなアイドル的存在。確かに人気は出るだろう。

「あつ、そーだっ！ ツーショットお願いしてもいいですか？」

「ええつ、それはちよつと……」

写真に撮られなれてないため、とっさに断ろうとしたが。

「何よ、ツーショットぐらい良いでしょ」

「Currenがお願いしてるのに……」

周りから、解散したはずのファンのウマ娘の声が聞こえて視線が刺さる。

「だめー？」

追撃とばかりにうるうる瞳を輝かせてのお願い攻撃。

「……少しだけよ？」

最後には折れてしまった。

「やったーっ♪ じゃあえつと、セレストレーナーはこう……」

ポーズの指南までされて、どこから取り出したか自撮り棒で撮影を開始している。

「セレストレーナー！ 笑顔笑顔♪」

真似してみて？ と言わんばかりに隣で満面の笑みを見せるカレン。

最大限彼女の要望に近づけるために笑顔を見せるが。やはりぎこちなくなってしまう。
う。

「もー、かわいいお顔がだいなしだよー？」

「そんなこと言われても……」

「んー、じゃあじゃあ、セレストレーナー。ちよつと屈んでみて?」

彼女の言う通り、少し膝を曲げて彼女と同じ位置に顔を持っていくと。

「ちゅ♪」

「へっ……っ?」

間髪入れずにいきなりの出来事。頬に柔らかい感覚を感じる。

自撮り棒の先にあるディスプレイには……。

頬にカレンのキスを受けて、顔を真っ赤にしている尾花栗毛のウマ娘の姿があった。

シャッター音が鳴るとしばらくしてキスをやめるカレン。

俺はただただ驚いたように、キスを受けた頬を手で押さえるしかなかった。

「「「キヤーーーーーー!!!!」」」

周りの黄色い声も届かないほどに、俺はあつけにとられていた。

「#親愛のキス #セレストレーナーの初めて #カワイイカレンで悩殺 #秘密の

ツーショット つと」

「ちよ、カレンさんっ!?!」

「すごいっ、もう2000件も反応が来てるっ!」

そして投稿を止めることもできず、嬉々としてディスプレイを見せるカレン。

この反応数は……、これだけ拡散すれば消しても意味がないだろう……。

「……今度からは許可を取って頂戴ね？」

深くため息をつきながら、注意だけで済ませることにした。

朝からなんかすごく疲れた気がする。午後のトレーニングまで持つだろうか……。

「ふふっ♪ カワイイ写真ありがとー♪」

カレンはご満悦の様子でまたかわいらしくポーズを決めて感謝を伝えてきた。

「カレンね？ これから職員室に行かないといけないの。だから、またゆっくりお話しできるとうれしくないなー？」

「転入初日だったわね？ どこにあるかわかる？」

「うんっ、学園の地図はもう覚えてるの。じゃ、またねセレストレーナー！」

そういうとカレンは笑顔をみせて、足早に離れていこうとする。

「あっ、よければウマスタのフォローお願いね♪」

思い出したように踵を返すと、ウイंकをしながらそう告げるカレン。

その後、いろいろなウマ娘に声を掛けられながら、その一人一人に手を振って学園へと入っていった。

嵐の去った孤島に取り残された気分の俺は、ただ一人立ち尽くすのだった。

「トレーナーさん？」

そして不意にかけられる声。

振り向くとそこには、カレンとは違った意味の笑顔を俺に向けるマックイーンの姿があった。

「あ、あら、マックイーン……？」

「これ、どういうことですか？」

ああ、SNSって怖いんだな。そう実感するのだった。

利用するなら……

カレンチャンSide

私は浮かない顔でトレセン学園の廊下を歩いていた。

それは無理もないことだと思う。

だって、この学園に来る理由。ただ一つの理由だった人が、もうこの学園にはいないのだから。

「はぁ」

窓ガラスに映る顔は、最高にかわいくない……。

切り替えないといけないのに、そんな気持ちにもなれなかった。

長年探しても見つからなかったけど、ふと見たニュースで見つけた『お兄ちゃん』の存在。

レース自体はさほど興味がなく、普通の学校へと進んだ先で話題になったニュース。メジロマックイーン天皇賞秋で降着……。特段それに興味があつたわけではなかった。

ただ、私のおにいちゃんが、メジロマックイーンというウマ娘のために必死に謝罪し

ていた姿を見た時には、胸が張り裂ける気持ちになった。

久しぶりに見た姿が、そんな姿なのだから仕方がない。

実のところお兄ちゃんとは一回しか会ったことはない。

しかし、テレビで頭を下げる彼が、間違ひなくお兄ちゃんだと確信していた。

誰かのために必死に考えて、守ろうとする姿。カレンにしてくれたみたい。

たとえ成長していても、そんな彼の根底までは変わっていないから。

それと、心惹かれあう……。有り体に言ってしまうえば愛の力だ。

「なんで……」

窓ガラスに映る姿を見つめると、映ったカレンが問いかけるように私に愚痴る。

私はこの数か月、SNSの活動に勉強、そして雑誌やモデルなどの芸能活動に加えて、

レース走者のトレーニンングクラブにも通った。

すべてはトレセン学園に転入するためだった。

お兄ちゃんがトレーナーをしている学園に入るため。それは血のにじむような努力

だったと思う。

お兄ちゃんを幸せにできるのは、カレンしかいないと思ったから。

でも……。

ニュースを見て、私は言葉を失った。

アジエナのトレーナーが、病気で交代になるとの内容だった。

お兄ちゃんが、病気による無期限の休養になったとのこと。

なんてタイミングが悪いんだろう……。それはトレセン学園への転入が決まった二日後の出来事だった。

私は手当たり次第に情報網を駆使して、お兄ちゃんのいる病院を見つけだそうとした。

しかしメジロ家が本人の意思を尊重して、情報を出していないとの事だった。

私とお兄ちゃんの最高にかわいくて、幸せな計画が振り出しに戻ってしまった。

「あれってカレンちゃんじゃない!？」

ふと聞こえた声に、私は無理やり笑顔を戻す。

そして私に声をかけてくれた生徒に対して、かわいく手を振って見せた。

「きゃー！ 本当にあのカレンちゃんだ!」

いま私にできることは、お兄ちゃんの帰りを待つことだけ。

私のかわいい人生には、お兄ちゃんが必要なんだから。

……

……

……

セレスSide

「というわけで、これが正式なレースの内容となります」

俺はちょうど、たづなさんにレースの説明を受けているところだった。

「予想した通り、マジで短距離持ってきたみたいですね……」

予想した通り、芝1200mでのレース内容。短距離でも新潟の1000mを除いて最短の距離だ。

展開が素早いこの距離なら確実に勝てるかと踏んだのだろう。

「とにかくできることを考えないと……いつそタキオンに……」

いや、この考えは最終手段としておこう。タキオンに相談してこれ以上ややこしくなっても困る。

今できることは、俺が短距離のウマ娘も担当できるように勉強することぐらいか……。

協力してくれたウマ娘とはそれだけの関係。というわけにもいかないし、何よりそんな中途半端は俺が許さない。

「トレーナーさん？」

「ん、ああ、大丈夫ですよたづなさん。心配しないでください」

また考え込んでしまったようだ。いけないいけない。と俺は首をぶるぶると振って

たづなさんに視線を戻した。

心配そうに見つめる彼女に軽く笑みを向けた。

「時間は三週間もないですけど、とにかくやれるだけやってみます」

本当にやるのが山積だが、別に苦とは思わなかった。

新しいことを始めるといふのは、ワクワクするだけでもいいか。短距離の勉強もできる。そういうことで自分を納得させることにした。

でも負けるビジョンが見えないあたり、俺は思ったよりも自信家なのかもしれない……。

「わかりました。くれぐれも無理はしないでくださいね？」

たづなさんは一礼すると部屋を出ていった。

俺は立ち上がり、部屋にかけてあったカレンダーを見つめる。

そしてペンを取り出すと、レースの開催日時に○をつける。

(休日には駅の方の書店でも行ってみるか……あそこは専門書もあるし)

カレンダーをめくると、そこには夏合宿の文字も書かれている。

何もこのレースがゴールというわけじゃない。勝っても負けてもきつと、チームのみんななどの日々は続いていくわけで。

「ほんと山積みだなあ」

俺は一人部屋の中で零すのだった。

コンコン——。

その時だった。

ノックの音が響く。

「どつどつ」

俺はドアに向かって声をかける。

少し静まり返った後、ガチャ。とドアを開けて入ってきたのは、勝負を仕掛けてきたトレーナーだった。

「失礼します」

あの時とは対照的に物静かに入ってきた彼は部屋の真ん中まで来ると、近寄った俺向き合う。

「謝罪ですよね？」

「……」

先に口を開いたのは俺のほうだった。彼は視線をそらして口ごもった。

そして少しの静寂のあと、彼は口を開く。

「正直、酷い真似をしたと思ってます……。本当にすみませんでした」

彼は深く頭を下げる。俺からの言葉を待っているようだった。

しかし俺は今、謝罪より聞きたいことがあった。

「今回のことに、貴方の担当ウマ娘は同意していたんですか？」

「えっ……？」

罵倒なり苦言を彼は待っていたのだろう。

思いもよらない言葉に、素つ頓狂な声を上げて顔を上げる。

「話題集めのために私たちを利用しようとしたこと。担当ウマ娘と合意の上で行ったんですか？」

「……」

彼はまた沈黙する。

話すべきか、話さないべきか。悩んでるような仕草を見せたため、俺はもう一度言葉で突き刺す。

「利用されるんです。聞く権利ぐらいあると思いますか？」

「……もともとはあの子からの提案なんだ」

観念したように、彼は静かに語り始める。

「ラッキーシグナル。アジエナを任されたアンタなら、もう経歴ぐらい見てると思うが、彼女は去年のスプリンターズステークスと、今年の高松宮記念の出場を逃してる」

彼の言う通り、俺は彼女の経歴書を確認済みだ。

重賞の優勝経験はあるものの、ファン数の関係でG1を逃しているウマ娘。

「彼女はレースは目を見張るものがあるが、パフォーマンスが苦手だな。ファンの伸びが悪い」

「だから話題を欲して私たちを利用しようと彼女は言った。あなたは止めるべき立場じゃなかったんですか？」

「もちろん止めた。でも彼女は……」

少し口を止めた後、また言葉が続ける。

「あなたは『何をしてでも』私をG1ウマ娘にすると言った。だから私は貴方をG1トレーナーにすると言った。これは彼女をスカウトした時に交わした約束なんだ。その言葉を言われて……」

「腹をくくった……と」

まさかウマ娘側からの提案だったとは思わなかったが、だいたい話の全体像はわかった。

少なくとも彼の深刻そうな物言いは、嘘をついてるようには思えなかった。

しかし……。

「よかった」

「えっ？」

俺は彼の言葉に心底安心していた。

「貴方が先走って今回のことを行つて、担当ウマ娘との関係悪化なんて、どちらも幸せになれない結果になったら悲しすぎますから」

「アンタ……怒つてないのか……？」

「半分は怒ってますよ。でも気持ちわかりますから。本格化を迎えて一番いい状態なのにG1に出れない。そんな子何人も見てきましたし」

焦ってるがゆえに故障して引退した子。焦ってるがゆえにトレーナーとの関係が悪化した子。

この業界に数年いるだけでも、そういった話は入ってくる訳で。

「それに半分怒ってるっていうのも、貴方に罵倒されたから。つてわけじゃないんですよ」

「じゃあ……なんで……？」

「貴方がラツキーシグナルさんの力を信じてあげてなかったからです」

担当ウマ娘からの提案でも、彼は意地でも彼女を止めて、彼女の力を信じて指導してあげるべきだった。少なくとも俺はそう思う。

確かにきれいごとかもしれないが、正道に勝る邪道はきつとない。

「導くべき立場のトレーナーが掛かってどうするんですか？」

「……返す言葉もない」

彼は瞳を閉じて、ただ俺の言葉を聞いていた。

「さて、謝罪とかお説教はこの辺にしましょう」

俺はポンと手を叩いて、彼の目の前にずんずんと進んで行き、顔を見上げる。

「勝負を受けたからには、私も勝ちにいきます。不利な勝負でも、貴方に勝つことで私のトレーナーとしての力も証明できますから」

彼の目の前で腕を組み。胸を張りながら不敵な笑みを浮かべて。

「利用させてもらいますね？」

逆に宣戦を布告するのだった。

カレンとの休日

徹夜で過去の短距離レースの記録を見続けてしまった。

いくらウマ娘の体力があり、休日の前日だったからとはいえ、少しやりすぎてしまったか。

しかし時間がないのも事実で、俺はそのまま駅前書店へと足を運んで専門書を買ってあさった。本を配送する時間も惜しいので、両手には本の入った袋を抱えっぱなしだ。

(弱音を吐いても仕方がない……)

ため息をつくのをぐっと抑えて駅前を歩く。

照り付ける太陽が瞳を刺してくる。一瞬立ち眩みに足を止めて辺りを見回した。

「ん……う？」

ふと視線にとまったのは人だかりだった。

お店の行列といった感じではなく、駅前といっても人が多すぎる。

……何かに群がっているような感じに見える。

(有名人でも来てるんだらうか)

トレセン学園の周辺に芸能人やアイドルが来るのは珍しいことではない。

ウマ娘はアイドル的側面もあるため、多くのテレビ撮影やコラボの依頼もやってくるからだ。

そもそもウマ娘も有名な子になると、あのくらいの人だからできてもおかしくない。ルドルフとか女性人気も高いし。

まあ、休日の朝からご苦労なことだ……。なんて思いながら、足早に隣を通り過ぎようとする。

「カレンチャン！ 私ずっと会いたかったんです!!」

俺は耳をびくつと動かして足を止める。

おそらくファンの一人であろう人が呼んだ名前に反応してしまった。

最近その名前をよく聞く気がする……。

「ありがと！ でもカレン急いでて……」

困り顔で人だかりに対応しているウマ娘を見つける。

そんな困り顔の彼女を気にせずに、ファン達は握手をしようと集まってくる。

さすが人気ウマスタグラマー。

(どうするかな困ってるみたいだけど……)

掛かり気味に押し寄せるファンの対応に困っているカレンチャン。

抜け出せる様子もなく、ここはトレーナーとして手を貸すべき状況なのだろう。

本の袋をまとめて片手で持つと、ファンの人混みを割りながら彼女へと近寄って行く。

「すみませーん！ 彼女のマネージャーです！ 通してくださいー！」

カレンチャンの関係者を装って、彼女に近寄って行く。ファンの人は驚いたように道を開ける。

「カレンさん。次の撮影の予定があるでしょう？ 行きましょう」

「えっ、セレストレーナー……？」

「良いから合わせて」

そして素早く驚く彼女の手を取ると、その場を脱出して行く。

早歩きでそのまま離れようとするが。

「あれ、セレストレーナーじゃない？」

「ほんとだ！ セレストレーナーだ！」

（あ、やばい。今この姿だった……）

人混みから聞こえる声にハッとする。

今の自分の姿をすっかり忘れていた。やはり寝ていないと思惑能力が落ちるらしい。

「た、タクシー!!」

あわてて道沿いまで走ると、手をあげてタクシーを止めて飛び乗る。

「適当に走ってください、早く！」

急かされて走り出すタクシー。何とかファンの群れを撒くことができたようだが……。

ため息をついて横を見ると、ポカーンとかわいらしく口を開けて呆然とするカレンちゃんの姿が。

「あ、えつと……。こんにちはカレンさん……。？」

頬を掻きながら苦笑いを浮かべてしまう。

「セレストレーナー……。強引なんですね？ 意外だったかも」

そんな俺を見てカレンちゃんはくすつと笑って見せる。

今のこの姿には似合わなかったか……。俺はため息をついて顔をそむけた。

「そういうえぼどうして駅前に？ 何か用事でも？」

「ファッション誌の撮影に向かう途中だったんですけど。ファンに捉まっちゃってなるほど。さすが人気ウマスタグラマー。」

というか、本当に撮影に向かうところだったのか……。

「カレンならもつとかわいく解決できたかもだけど、助けてくれてありがとうごさいます。でもカレンよりホットな有名人なのに、よく助けに入ろうと思いましたがね？ 下手すれば、もつと揉みくちやにされたかも……」

「そんなにかしら……カレンさんには負けると思うけど……?」

「あー、あれだけテレビや雑誌で話題が持ちきりだったのに、よくそんなこと言えますねー?」

そういつてくすと笑うカレンちゃん。彼女の言う通り、あまり大きな行動は避けた方が無難かもしれない。少なくとも『セレス』としてのうわさが落ち着くまでは。とりあえず今は話題を変えよう。

「せっかくだから、このまま撮影場所まで行きましようか。『強引』に引つ張つてきちゃったんだし」

強引という言葉を強調しながら、彼女に笑って見せる。

「本当ですか? ありがとうございます♪ じゃあ○○のスタジオまで……」

そのあとは軽く雑談しながらスタジオまで向かうのだった。

……

……

……

「せっかくだからついてきてくださいよ! カレンのマネージャーなんでしょう?」

始まりはこの一言からだった。

確かにあの時はとっさにそういつたが、まさか一日マネージャーにされるなんて思っ

てなかった……。

カレンチャン曰く。

あの解決法は可愛くなかったらしい。

だから責任をとってカワイイをしつかり学んでほしい。そのためにマネージャーをしてくれとの事だった。

その強引さはカワイイのか？　と言いかけたが言葉を飲み込んだ。

俺としては少しでも時間が欲しいところだったが……。

追い打ちの彼女のうるうるオネダリには勝てなかった。

「大丈夫ですよ！　セレストレーナーはカレンのこと見てるだけでいいんですから♪」

自分が巻き込まれ体質だとはわかっていたが、ここまで来るとそろそろ対策考えた方がいいんじゃないか。

「あっ！」

そんなやり取りをして、スタジオの廊下を歩いていたところ、何かを見つけたカレンが声をあげてそっちの方に駆け寄っていく。

その先にはきれいな尾花栗毛のウマ娘の姿があった。

(あの子は確か……)

「カレン遅い！　って！　セレストレーナー!?　どうして……」

口を押えて驚きの表情を見せる、自分と同じ尾花栗毛のウマ娘。トレセン学園でも珍しいから名前も知っている。

『ゴールドシチー』

モデルもやっているため、街の広告でその姿を見ることも多い。

「こんにちはゴールドシチーさん……でしたよね？　ちよつと訳ありません」

「セレストレーナーはカレンを助けてくれたんです♪　で、一日マネージャーに」

「ちよい待ち……話が読めないんだけど？」

頭を抱えるシチー。

こんな簡単な説明では分かるはずもない。俺は彼女に軽く経緯を説明した。

説明してもなお彼女は少しあきれたように。

「断らないって、セレストレーナー。結構お人よしだったたりしますか？」

「ははは……否定できませんね……」

苦労してるね。みたいな表情でこちらを見るシチー。すぐにハツとした表情をして。

「つと、話もいいけど、スタツフ待たせてるから、カレンは早くメイクの方行つて」

「はーいー！」

促されるまま、カレンチャンは駆け足で廊下を走っていく。

「セレストレーナーは……えつと、どうしますか？」

「どうするって……?」

「撮影一日かかりますよ? ほんとにマネジやるんですか?」

「えっ?!」

思わず素つ頓狂な声をあげてしまった。

マックイーンの時も撮影関係は全部彼女任せにしてたから、そっち関係には疎かつた。

自分は受けるとしてもトレーナー関係の取材ぐらいだったし、ファッション誌の撮影がそんなに時間がかかるものだったとは……。

「帰っても良いんじゃないですか? 付き合うことはないと思いますけど」

「そ、そうよね。じゃあ私は……撮影頑張つて」

「だめーっ!」

突然の声。

メイクに行つたはずのカレンチャンがこっちに走ってくる。ウマ娘の聴力恐るべきだ。

彼女は俺の手をつかんで抗議のまなざしを見せる。

「カワイイをわかつてないセレストレーナーはカレンを見てカワイイを学ぶべきだと思うんです!」

「一回いうと聞かないんだから……。カレンちよい強引すぎじゃない？」

シチーはあきれ顔を見ている。

確かに一日マネージャーを了承したのは俺だが……。

「だめ……ですか……？」

うるうると泣きそうな顔での抗議。ああ、それに耐えられないこと知ってて……。

カレンチャン。なんて恐ろしいウマ娘なのだろうか。

巻き込まれたなら最後まで責任を持つことにするか……。さらば帰ってのお昼寝。

「わかりました。最後まで責任持ちますよ」

「やったーっ！ セレストレーナー大好き！」

「セレストレーナー？ほんとにいいんですか？」

「しょうがないじゃない。一日マネージャーやるって言ったのは私なんですから。それに」

「それに？」

「この子の嬉しそうな表情見ちゃったらね……」

隣で笑みを浮かべているカレンチャン。この表情を見てしまえば断らなくてよかつたとも思えてしまうから不思議だ。

「いっっっ♪ セレストレーナー！」

カレンちゃんは強引に俺のことを引っ張っていく。

今日は一日、大変なことになりそうだと思いつながら、俺はカレンちゃんに引きずられるのだった。

.....

.....

.....

「笑顔笑顔！ いいですねー！ 姉妹っぽいですよー！」

はい、またもやどうしてこうなった。

俺はカメラに向けて慣れない笑顔を作っている。もちろんしっかりメイクまで施されて。

自分では選ばないようなフェミニンな服を着ながら、カレンちゃんやシチーと手をつないでいる。

「笑顔が固いよセレスお姉ちゃん？」

「そっだよセレスお姉ちゃん？」

「絶対からかってますよね?? 慣れるわけないでしょ！」

笑顔が固いことをからかってくる二人。慣れない服装も相まって、恥ずかしくて顔が熱くなりっぱなしだ。

さて……。

どうしてこうなったかだが。

撮影スタッフに

「一緒に撮らせてくれ、報酬を払うから！」

と言われて。

「トレセンを通してくださいー」

と逃げ道にしようとしたが、撮影スタッフが速攻電話して理事長に話を通して……。

理事長も理事長で。

「承認ー」

とか言っちゃったせいで、撮影に急遽加わることになったのだ。

さらに、もともと撮影するための服のサイズが合ってしまったので、それを着ての撮影。

仕組まれていたのでは？ と疑ってしまう。

そしてなぜ『お姉ちゃん』なんて呼ばれているかという点、なんでも姉妹コーデの撮影だったらしい。

雰囲気づくりのために二人は俺をそう呼んでくる。

……中身が男なのにお姉ちゃんと呼ばれて、さらにはこんな女性らしい格好で、しつ

くりこなくて表情もほぐれない。

「もー、そんな顔じゃダメですよ？」

「んー、でも私たちと違って、セレストレーナー慣れてるわけじゃないし」
その通りだ。

生まれてこの方モデルの仕事なんてやったことないわけで。そこから数十分で慣れるわけない。

もちろんこれからも慣れる予定はないが……。

「しょうがないなー。ほらほら、お姉ちゃん。もつと笑顔笑顔♪」

「あ、じゃあ私も。セレスお姉ちゃん？ ほら、もつと柔らかく」

「ひゃあつ?!」

両サイドから抱き着いてくる二人。思わず驚きの声をあげてしまった。

緊張をほぐすつもりだったんだろうが逆効果だ。

……いや違う、これは完全に押掬われているのだ。

「お、いいね！ 妹二人に翻弄されるお姉ちゃんみたいで！」

……カメラマン的にはOKだったらしい。

目の前で強くフラッシュが焚かれる。徹夜の目にはその光が刺さる……。

この二人は、普段からこんな仕事をしているのか。

正直、尊敬を覚える。自分がなれと言われてもこの道は選ばないだろう。
これが一日中続くのか。

……明日は一日ゆっくりにしよう。

カワイイあの笑顔

本当にひどい目に合った。

結局夕方まで撮影は続き、俺はカレンチャンと一緒に学園への帰路に就いた。夕日はあたりをオレンジに照らして、一日の終わりが近いことを感じさせる。

シチーとはスタジオで別れた。

どうやらこの後、明日の撮影の打ち合わせがあるらしい。さすがプロのモデルといったところか。

日用品の買い出しを忘れていたため、帰りに近くの商店街に寄ることにした。

目当ての物も手に入って、今は学園への道を歩いている。

「ごめんなさいね？ 荷物持たせちゃって」

自分は本を持っていたので、カレンチャンに少しだけ荷物を持ってもらっている。

「良いんですよ。今日一日カレンのわがままに付き合ってもらっちゃったし。すつごく楽しかったです」

わがままということとは自覚してたのか。と少しあきれながらも彼女の笑顔は嫌いなれない。

まあ、こんな休日もあっていいかな。と思い始めていた。

「それならいいんだけれど……。ありがとうね？」

「いえいえ、気にしないでください」

そんな他愛もない会話を交わしつつ帰路を歩く。

そういえば、俺はまだカレンチャンのことを何も知らない。ウマスタも詳しい方ではないし。

こんな機会だ。少し話題を広げるとしよう。

「そういえばカレンさんは珍しい時期に転入してきたわよね？」

「あ、それは……。そうかも……。ですね」

……いきなり地雷を踏んだかもしれない。

少し歯切れの悪い言葉で返すカレンチャン。

落ち込んだような悲しい表情を見せている。よっぽどの理由があるのだろう。

これ以上、聞くべきではないのかもしれない。

「ごめんなさいね？ 話せないこと聞いちやったかしら……。？」

「あつ、ううん、違うの……。つて、はあ……。違わないか」

困ったように笑うカレンチャン。少し無理して笑ってるようにも見える。

瞳からは落ち込みの感情が漏れ出している。

「ダメダメ！　こんなの可愛くない」

彼女はそういうと、ブンブンと顔を振っている。

「カレンさん……？　もしかして学園で上手く行っていないの？　お友達関係とか、ト

レーニングとか？　それなら私が相談に乗るわ」

落ち着かせるように声をかける。

いつも明るいカレンチャンがこんなにも落ち込みを見せるなんて、明らかに様子がおかしい。

俯く顔を覗き込んでみる。

「……セレストレーナーは優しいんですね」

カレンチャンは少し詰まったように声を紡ぐ。

「でも大丈夫なんです。これはもう口に出しても叶わない事だもん……」

ため息をつきながら、夕日に染まった空を見上げる。

その横顔はどこか悲しく、あきらめといった表情だった。

「あーあ。こんなのかわいくないですよね」

「そんなことないわ。誰だって落ち込むことぐらいあるんだもの」

「セレストレーナーも落ち込むことってあるんですか？」

カレンチャンは意地悪そうに聞く。

「失礼ね。もちろんあるに決まってるでしょう？」

俺は冗談っぽくそう返すと、昔話の一つでもしてみようと思いつく。

「少し昔の話でもしようかしら。あれは、えっと、私がトレーナーを目指して勉強していた頃の話のだけれど」

.....

.....

.....

勉強に行き詰って、何もかも上手くいかないって思い込んでた時があつたわ。

そんな時期に私は柄にもなく、遊園地なんか遊びに行つたの。場所を変えれば気分転換になると思つたから。

「なんだかなあ.....」

流れる人を見ながら、ベンチに座つてた私は小さくため息をついた。

本当に落ち込んでる時は、何をやってもネガティブに考えてしまう。

アトラクションに乗る気もなく、ただ、時間が過ぎていった。

そんな時ね。

「おねーさんも、まいご.....ですか.....？」

声のする方を見ると、小さい女の子がこつちを涙目で見てたの。

「おねーさん……。パパとママは……。？」

「え？」

私はその質問に何と返せばいいか分からなくて、でも必死でこつちを見る女の子を無視することもできなくて。

「まあ、私も……。ある意味迷子か」

なんて、曖昧な答えをしたのよ。

確かに何をすればいいか分からなくなった時期だから、迷子もある意味正解ね。

「じゃあ、わたしといっしょ……。だからいっしょにいてあげるね……」

涙目になってる女の子は、迷子になって心細かったのね。私の隣に座ってきたのよ。

「君は迷子なの？」

「パパとママときてたの。でも、どこかにいっちゃった……」

とりあえず落ち着かせてから迷子センターにでも連れていこうと思って、話しかけることにしたの。

「おねーさん……。まいごだからおちこんでたの……？」

「うーん、お姉さんの場合は、ちよつと違って……。何をすればいいか分からなくなったの」

女の子は首をかしげる。

「お姉さんね、トレセン学園って分かるかな……？　そこでウマ娘さんたちのトレナーになろうと思ってるの」

「とれーなーさんに？」

すっかり泣き止んだ女の子は、食い気味に私の話を聞いていたわ。

「そう、でも勉強が難しく、何をすればいいか分からなくて。元気になろーってここに来たんだけど……」

「げんきでない……？」

「おかしいわよね。ここでも何すればいいか分からなくなっちゃって」

私は苦笑いを浮かべて女の子を見た。

そうしたら、女の子は小さな手で私の頬を触って、満面の笑みを見せたの。

「えがおじゃないと、げんきでないよ？」

さつきまで泣いてた子が、輝くような笑顔に変わったから、驚いちゃって。

「ほら、私のまねをして？　おねーさん、もっとかわいいえがおみせて？」

「ふふっ……あつ……」

女の子の変わりように思わず笑っちゃって。その時気づいたの。最近笑ってなかったなって。

「おねーさん、とつてもかわいくなつた！」

「ふふつ、貴女ほどじゃないわ」

そう言つて笑いあつて、しばらく女の子と他愛もなく話してるうちに、悩んでた事もなんだか馬鹿らしくなつて……。

「おねーさんがトレーナーになつたら、わたしがたんとうまむすめになつてあげるね！」

「そうね。じゃあお姉さん頑張らなくっちゃ」

なんだか勇気づけられて、頑張らないとなつて思つたの。

……

……

……

「そのあと、その子のパパとママが見つかつて、彼女は駆け寄つて行つちやつたからそれつきりね」

たどりついた公園のベンチに座りながら、途中で買った缶コーヒーを飲む。

今の姿に合うように脚色したが、そんな感じの出来事があった。

今トレーナーをやれてるのも、彼女のお陰かもしれない。

「トレセンでも会えるかも……。なんて思ったけど、そんな奇跡が起きるはずもなく。……カレンさん？」

ふと横を見ると、驚いたように目を見開くカレンちゃんの姿があった。

「その話……。誰かから聞いたとかじゃないんですよね……。？」

「え？ 私の昔話だけれど……。何かおかしかったかしら？」

「その女の子の名前は……。？」

「聞いたはずなんだけれど……。忘れちゃったわ……」

「そう……。ですか……」

昔話のつもりだったが、何かいけないことを言ってしまったか……。

困惑気味のカレンチャンは、ぶるぶると頭を振って、気持ちを落ち着けようとしていた。

何が地雷だったか分からないが、とりあえず話題を変えよう。

「暗くなるといけないわね！　そろそろ行きましょう」

そういつて一緒に帰路を急ぐことにした。

……

……

……

カレンチャン Side

そんなはずない……。

そんなはずなのに、あまりにも似すぎてる。

私が小さいころにあった出来事に。

遊園地で迷子になった時、一緒にいてくれた優しい『お兄ちゃん』との思い出。

トレセン学園に来る切っ掛けになった思い出……。でもセレストレーナーがその思い出を知るはずがなくて。

……セレストレーナーはアジエナのトレーナー。お兄ちゃんが担当していたチーム。突然の病気とか、明らかにおかしいことが多すぎる。もしかしてセレストレーナーとお兄ちゃんには何か関係が……。

兄妹……。

それはない。

兄妹の思い出をあんなに懐かしむように語れるはずがないし、兄妹であることを隠す必要なんてないし……。

(……もしかして)

私は、隣を歩くセレストレーナーを見て、一瞬だけバカらしい考えが頭の中に浮かんでしまう。

(セレストレーナーが、お兄ちゃんだとしたら……)

人がウマ娘になることなんて、あり得ないことかもしれないけど、セレストレーナーはすんなりとアジエナのトレーナーになれた。

普通新しいトレーナーが引き継ぐとなると、どんなにうまくいったとしてもトレーニングで何かしらの不具合や、チーム内でぎくしゃくするものだと思う。

でも、セレストレーナーは全くそういった噂を聞かない。

一部の生徒の裏垢も把握してるけど、そういった噂一つない。

いま思えば完璧すぎる。

その完璧さは、まるで『間違わないように完璧を演じている』ような違和感を感じる。

普通の人は騙せても、それでは私を騙せない。

馬鹿らしいけど、しっくりくる。私の脳内はそんな答えに支配されていた。

『セレストレーナーはお兄ちゃん』なのだ。

そうなれば、確証を得るためにカマをかけるしかない。

私が黙ってたせいで、セレストレーナーはどこかぎこちない表情をしている。

動揺している今がチャンスかもしれない。

うまいこと、話にのせて言質を取る……。

そのためには……。

……

……

……

セレスSide

学園に続く長い坂を歩く。

隣には黙り切っているカレンチャン。

俺が昔話をした後から、カレンチャンはこんな感じで神妙な顔をしながら、俺の隣を歩いている。

時折、俺の顔を見てはまた考え込む。俺は相当な地雷を踏んでしまったらしい……。トレーナーになって長いが、コミュニケーションというのは難しいものだなと実感する。

「セレストレーナー？」

「はっ、はいっ!？」

沈黙からいきなり声をかけられれば、びっくりして尻尾をピンっと伸ばしてしまう。そんな姿を気にせず、カレンチャンは話しを続ける。

「セレストレーナーはアジエナのトレーナーでしたよね？ 前のトレーナーから引き継いだって」

意外と普通の質問だった。

「ええ、前のトレーナーが急病で、私が引き継ぐことになったの」

だから普通に返す。考えてくれたカバーストーリーも、今ではすんなり自分の事として語れるようになってきた。馴れつつ怖い。

「引継ぎ大変だったんじゃないですか？ アジエナに所属してる子たちって、あの名優って言われるマックイーンさんとかも居ますし」

「そうね……。大変じゃなかったか、って聞かれると大変だったわ。でもみんな協力的で助かったわね」

なるべく無難な答えで流していく。

「そういえばうわさで聞きましたよ？ 宣戦布告されたとか。やっぱり大変じゃないですか」

あの話は流石に学園全体に広まってるようだ。

「実は今も頭の中はその事ではいっぱいなものよ。短距離の子の当てもないもの」

今もそのことで悩みっぱなしなわけで……。

早く帰って対策を考えないといけない。短距離のウマ娘を所属させるっていう目途すら立ってない。

もう時間がない中、重賞級のウマ娘に勝つウマ娘を見出すことなんてできるのだろうか

か。

しかも今は無名も同然なトレーナーなのに、そんなトレーナーと共に走ってくれるウマ娘なんて居ると思えない。

「万事休すつてやつね……」

「マックイーンさんの天皇賞秋の時よりもですか？」

「ああ、あの時は確かに大変だったけれど……マスコミに囲まれないだけマシね」

正直あの時は堪えた。

マックイーンンの降着処分で四六時中マスコミに追っかけまわされたのだ。

あれ以降、俺は世間にあまりいい印象を持たれなくなったわけで……。

メディアが嫌いだったのもあるけど、あの時は前に出ないとマックイーンに火の粉が……。

「あ」

「ねえセレストレーナー？」

「な、何かしら……？」

「やっぱりそうなんですかね？」

もしかしてバレた……？

考え事をしながら返答していた自分も悪かったが、なぜカレンチャンが俺の正体に目星をつけてきたんだ？

全く脈略が分からない。

脳内を混乱させながら俺は、まだ誤魔化す言い訳を考えるが。

「おかしいと思ったんです。どうしてウマ娘になってるかわからないですけど……」

「何の事かしら……？」

笑顔でそう迫ってくる彼女に顔が引きつってしまふ。

俺にポーカーフエイスは無理だ……。

「他のみんなは誤魔化せても、カレンは誤魔化せないよ?」

初めて会ってからそんなに接点もなかったはず。

「あ、あと、それ以上誤魔化そうとしたら、みんなに言いふらすし、ウマスタに載せるから、」

悪魔のほほ笑み。そんな姿すらかわいらしいカレンチャン。

これ以上誤魔化せないことを悟る。

「観念してね? ○○お兄ちゃん」

俺の過去の名前。今ではもう自分のものと思えない名前をささやく彼女。

「……どこで気づいた。バレない様に動いてたはずだ」

「ふふっ♪ とりあえず人のいないところでお話。しよつか？」

.....

.....

.....

「人の居ないところって言ったけど、お部屋に連れ込むなんて、お兄ちゃん大胆なんだー」

そんな軽口を叩くカレンチャン。

街中で誰かに聞かれるよりはマシだと思い、ここまで来たが……。

あたりはすっかり暗くなっているので、明かりをつけて椅子に座る。

彼女は興味津々に部屋をキョロキョロと見ている。

「そういうのは良いから。誰から聞いた？ タキオンか？ それともアジエナのメンバーか？」

当然の質問攻め。出所を知っておかないと取り締まりようがない。カレンチャンはくすくすと笑うと、ベッドにぼふつと座る。

「勘つて言ったら怒っちゃいます?」

「怒る。そんな適当な事あつてたまるか」

こっちは本気で演じていたはず。

……最終的にはポロつてしまったが、目星をつけてないなら、そんなこともできないはずだ。

それが『勘』の一言で片付けられたら困る。

「うーん、嘘じゃないんだけどなあ……」

彼女は少し考えると、優しく微笑んで。

「古くからの約束……つてことじゃダメかな? お兄ちゃん」

「いや、本当に意味わからないぞ……。それになんださつきからお兄ちゃんって……」

自分がそう呼ばれる理由が見つからない。

まあ、ライスからはそう呼ばれてるかもしれないが、カレンチャンが呼ぶ意味が見つからない。

「お兄ちゃんって呼ばれる理由も、古くからの約束って……」

何か引つかかる感覚に苛まれる。

脳を刺激されているような……。

「いや、待てよ」

深く考え直してみる。

その二つの単語で脳内がフル回転し始める。

「……いや、まさか」

そんなはずは……。

「いやあり得ない。気づいた原因も……、俺……なのか……？」

さつきカレンにした話を思い出す。ずっと昔に出会った女の子の話。カレンの顔をよく見つめる。

くりつとした綺麗な瞳。

美しい葦毛を見れば、脳細胞がフル活動して思い出させる。

「わたしね『かれん』ってうちの」

あの頃の声が聞こえて、カレンと姿が重なる。

俺はただ啞然として、目を見開いた。

「……あの頃の女の子って。カレンちゃんだったのか？」

俺の言葉を聞いて、彼女は瞳をウルウルとさせて泣きそうになりながら、俺に飛びついてきた。

強く抱きしめられ、甘い香りが鼻をくすぐる。

「お兄ちゃんッ！ 思い出してくれたのっ？」

「いや、そんな奇跡あるはずないだろ!？」

脳内で理解していても、未だ混乱が止まらない。

「カレンもね？ 本当のことをいうと少しだけ忘れてたの。お兄ちゃんの顔……。でもね？ 去年の天皇賞秋のマックイーンさんの降着処分の会見を見た時にピンときて」

「それでわざわざ編入してきたっていうのか……。？ 確証もないのに？」

「トレセン学園に入るために、クラブにも通ったの。それでやっと今年の推薦枠に入れて」

「俺に会うため……？　子供のころの約束を守るために？」

「カレンは、お兄ちゃんの担当ウマ娘になるためにここに来たの」

カレンはゆっくりと俺から一步離れると。

「カレンのトレーナーになってくれる……よね？」

少しだけ不安そうに、でも確信をもって尋ねる彼女。

「……拒否る理由はないな。俺に会いに来てくれたんだろ？」

こんなところで古い約束を果たすことになるとは……。

そう思いながらも、彼女に手を差し出す。

「俺と一緒に走ってくれるか？　カレン？」

カレンは、ぱあと不安を吹き飛ばすような笑顔を見せる。
鮮明によみがえる記憶。あの時と同じ『カワイイ笑顔』

「よろしく！ お兄ちゃん!!」

カワイイ彼女は俺の手を取るのだった。